



上代日本語の否定辞に関する研究

徐, 一平

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

1989-03-31

(Date of Publication)

2014-02-26

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲0824

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1000824>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



昭和63年9月30日

上代日本語の否定辞に関する研究

神戸大学大学院文化学研究科(博士課程)

徐 一 平

上代日本語の否定辭に関する研究

徐 一 平

一九八八年九月三十日

上代日本語の否定辞に関する研究

目 次

序	1
第一編、上代におけるナ行系統の否定辞について	7
第一章、原因・理由を示す「に」について	7
第二章、終止用法の「ぬ」について	23
第三章、「ぬか（も）」の表現について	27
第四章、「ねば」の表現について	41
第五章、ナ行系統否定辞の上接用言について	51
第一編のまとめ	56
第二編、上代におけるザ行系統の否定辞について	58
第一章、「ずあり（ざり）」の表現について	58
第二章、「ず」の終止的用法について	70
第三章、「ずや（も）」の表現について	76
第四章、「ずは」の表現について	82
第二編のまとめ	96
第三編、平安時代に見る両系統否定辞の変化	98
第一章、ナ行系統から見た変化	100
第二章、ザ行系統から見た変化	108
第三編のまとめ	115
結び	118
参考文献一覧	124

序

上代日本語において、否定や打消の意味を表す際には、系統の違う二つの表現形式が存在した。一つは、次の諸例に現れる「に・ぬ・ね」といったような、形態的に動詞四段活用 に似た活用形を持っているナ行系統のものである。

万、3777、昨日今日君に逢はずてする術のたどきを知らに（多度伎乎之良尔）哭のみしそ泣く¹⁾

万、4012、矢形尾の鷹を手に据ゑ三島野に狩らぬ日まねく（可良奴日麻祢久）月そ経にける

万、1525、袖振らば見もかはしつべく近けども渡るすべ無し秋にしあらねば（秋西安良祢波）

もう一つは、次の二例が示すような、形態的には動詞的なものではなく、むしろ形容詞のように、ほとんど活用形を持たず、²⁾連用修飾をその基本的な職能としながら、助動詞などへ繋いでいくには存在詞「あり」の力を借りるザ行系統のものである。

万、450、往くさには二人わが見しこの崎を独り過ぐれば見もさかず来ぬ（見毛左可受伎濃）

万、3984、玉に貫く花橋を乏しみしこのわが里に来鳴かずあるらし（伎奈可受安流良之）

この両系統の否定辞³⁾は、形態的に明らかに違ふし、本来別々なものであったと考えるのが自然であろう。

しかし、この系統の違った二つの否定辞については、古来、「ず」が「ぬぞ」（富士谷成章）と見られたり、「為」がその前に来る打消の「ぬ」と同化した結果「ず」となる（金沢庄三郎）と見られたりしている。現代の研究者の中でも、ナ行系統の連用形「に」にサ変動詞の「す」が付いて「にす→ず」に変化したと説かれる場合が少なくないようである（例えば北条忠雄氏、山崎良幸氏、大野晋氏など）。⁴⁾

上のような解釈に立てば、ナ行系統の否定辞がより古い形で、ザ行系統の否定辞がより新しいものであるということになり、特に「にす→ず」の説では、ザ行系統の「ず」がナ行系統の「に」によって成り立つものとされ、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の差を時代の新旧の差に求めるということになる。

ところが、果たしてそう言えるであろうかということになると、幾つかの疑問がある。

次頁に掲げる表1は、記紀歌謡および万葉集巻毎におけるナ行系統否定辞の用例の数とザ行系統否定辞「ず」の（「ざり」活用の融合形式が含まれていない）用例の数を対照させた統計表である。括弧内の数字はその巻の（記紀歌謡はそれぞれ万葉集一卷に準じて見る）歌数に対するパーセンテージである。⁵⁾

表1、記紀歌謡と万葉集における否定辞

	ナ行系統	ザ行系統
記	3 (3%)	24(22%)
紀	11 (9%)	26(20%)
巻1	10(12%)	13(15%)
2	48(32%)	31(21%)
3	40(16%)	52(21%)
4	77(25%)	48(16%)
5	28(25%)	22(19%)
6	16(10%)	34(21%)
7	56(16%)	44(13%)
8	34(14%)	32(13%)
9	28(19%)	41(28%)
10	93(17%)	61(11%)
11	103(21%)	85(17%)
12	72(19%)	86(23%)
13	53(42%)	44(35%)
14	31(13%)	25(11%)
15	31(15%)	28(13%)
16	14(13%)	12(12%)
17	33(23%)	39(27%)
18	14(13%)	22(21%)
19	22(14%)	24(16%)
20	21 (9%)	23(10%)

この表に基づいて、パーセンテージの少ない方から拾っていくと、ナ行系統は一番少ない3%の古事記歌謡から、紀、万葉集巻20、6、1、14、16、18、8、19、15、3、7、10、9、12、11、17、4、5、2、13の順となり、最も多い巻13は42%となっている。一方、ザ行系統の方は、一番少ない10%の万葉集巻20から巻10、14、16、7、8、15、1、4、19、11、5、紀、2、3、6、18、記、12、17、9、13の順となり、最も多い巻13は35%となっている。この中で、古いところ(記・紀・万葉集巻1など)を見ても、ナ行系統の否定辞よりもむしろザ行系統の否定辞のほうが多く使われていることが分かる。或いは、文献時代にはナ行系統の否定辞が既に衰えてしまい、故にこういう現象になっているのではないかという反論があるかもしれない。がしかし、そうだとすれば、ナ行系統の衰えが後になればなるほど、顕著になるはずなのに、言語事実は決してそうはなっていないのである。従って、ナ行系統の否定辞とザ行系統の否定辞のいずれがより古いかといった議論はあまりにも根拠の乏しいものである。

また「に+す→ず」の考え方では、実例もあり、音韻的にも「nisu→nsu→nzu→zu」と解釈でき、かなり有力なように見えるが、「に」の下に来る「す」は「見れど飽かにせむ{見礼登安可尔勢牟}」(万、3902)「待ちかてにせし{麻知迦弓尔勢斯}梅が花」(万、845)「立ちかてにする{立難為}」(万、1139)「待ちがてにすれ{待難為礼}」(万、

629) などとあるように、明らかに「せ・する・すれ」といった活用形を持ったサ変動詞型の「す」であるにも拘らず、それが融合して成立したと考えられているザ行系統否定辞の「ず」には、何故サ変動詞のように「ぜ・じ・ず・ずる・ずれ」の活用形が見られないのだろうか、という疑問も相変わらず残ってくる。

更に、上代にだけ存在して、後世に見られないような、両系統の否定辞にかかわる特殊表現が幾つかある。

ナ行系統で見れば、次のような問題がある。

万、4195、わが幾許思はく知らに〔斯努波久不知尔〕霍公鳥何方の山を鳴きか越
ゆらむ

これは先ほど挙げた用例にもあった連用形「に」の問題である。この形は平安時代に入ってから、形そのものもほとんど消滅してしまっており、辛うじて「～がてに」という固定化したものの中にその痕跡が見られるだけである。⁶⁾

万、1470、もののふの石瀬の社の霍公鳥今も鳴かぬか〔今毛鳴奴香〕山の常陰に
風、3、筑波峰に廬りて妻なしに我が寝む夜ろは早も明けぬかも〔波夜母阿気奴
賀母〕⁷⁾

この二首の歌に現れる「ぬか」或いは「ぬかも」の形は「希求」の意味を表している。特に「ぬかも」の方は「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の表現形式とも関連する。平安時代の古今和歌集で見たとき、「ぬか(も)」ではなくて、「ぬか(な)」の形が存在する。しかし、それには「否定的な詠嘆」と「否定的なことがらに対する疑問」の意味はあるが、「希求」を表す意味・用法は見られなくなる。

万、1628、わが屋前の萩の下葉は秋風もいまだ吹かねば〔未吹者〕かくそ黄変て
る

この歌に見られるような、已然形「ね」プラス「ば」からなる「ねば」の形は後世にも見られるが、それが逆接関係に解釈される用法はやはり基本的に上代に限られているようだ。

ザ行系統で見れば、次のような問題が見られる。

万、86、かくばかり恋ひつつあらずは〔恋乍不有者〕高山の磐根し枕きて死なま
しものを

これはいわゆる一種の「ずは」の問題であり、このような「ずは」の用法は後世に見られない。

万、3980、ぬばたまの夢にはもとな相見れど直にあらねば恋ひ止まずけり〔孤悲
夜麻受家里〕

万、4014、松反りしひにてあれかもさ山田の翁がその日に求め逢はずけむ〔母等
米安波受家牟〕

記、61、つぎねふ 山代女の 木鍬持ち 打ちし大根 根白の 白腕 枕かずけ

ばこそ〔麻迦受禰婆許曾〕 知らずとも言はめ

上の三例に見られるように、上代では「ず」の下にかつて「けり」「けむ」「けば」が下接していた。このような用法も平安時代に入ってからは見られなくなる。

以上のように、上代日本語の否定辞に関しては、まだ様々な未解決の問題が残されていると言えよう。とりわけ、上代特殊表現の問題については、今までも数多く論じられてきたが、両系統の否定辞が本来違っていたからこそそのような特殊表現が上代において存在し得たのであり、両系統の否定辞が後にある程度変容したために、それらの表現が消滅したのであるという指摘がなされていないようである。ある言語形式の意味・用法の消滅および変容については、もちろんその言語全体の歴史的な変化と結び付けて考える必要があるけれども、しかし、その意味・用法を担う言語形式そのものに変化が起こったのではないかというところに、その原因を求めるのも、あながち邪道とは言えないであろう。

以上のことからして、上代日本語の否定辞について再考の余地があるのではないかと思ひ、特に両系統の否定辞はどのように違っていたか（形態的な違いだけでなく、使われ方や表現性などにはいかなる相違が見られるか）、両系統否定辞の関係はどんなものであったかなどのことを究明する必要があると考え、本稿では、この問題を取り上げることにした。

ナ行系統とザ行系統の否定辞が本来的に相異なるものであり、しかもその違いは単に形態上の問題ではなく、ある意味では用法乃至表現性において相違があったのではないかと考えられる。出来得るならば、その相違の本質とはいったい何であるかと突きとめたいのだが、しかしその前人未到の難問を解決するのはとうてい小論の手に負えない。その大研究の基礎づくりとして、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の用法及びそれにかかわる諸表現には、どんな違いが見られるのか、それらのことを丹念に調査して、網羅的に示し、両系統否定辞の相違を言語事実の側から浮彫りにすることがまず必要であり、いわゆる上代特殊表現とされるものにはどんな特殊性や特徴が見られるのかを知る必要性もあるであろう。そのために本稿は、ナ行系統の否定辞とザ行系統の否定辞の、それぞれが使われる表現において、いかなる相違が見られるかということと、それらの表現に見られる様々な文環境的な特徴ないし文型的な特徴などを、出来るだけ詳細に調べることを中心にして、論を進めていきたいと思う。

本稿で取り上げるのは上代日本語に使われている否定辞、いわゆるナ行系統のもの、形式として「に・ぬ・ね」にかかわる一連の表現と、ザ行系統の「ず」とそれにかかわる諸表現である。同じ否定的な意味あいを持ち、専ら「打消意志」や「打消推量」の意味を表す「じ」、禁止表現に現れる接頭語の「な」、或いは形容詞「なし」の語幹をなす「な」などについては、取り扱わないことにした。また、本稿は上代の標準語とされる近畿地方の言語資料を研究の対象とし、東歌や防人歌など方言的な要素の強い用例については、標準語に準じて解釈できるものは取り上げて考えるが、そのように取り上げることの出来な

いものについては割愛することにした。従って、否定表現ではあっても、専ら東国方言にのみ現れる「なは・なふ・なへ」の一連のものは自ずと対象外になる。

言語の研究には共時的な観点はもちろん重要であるが、通時的な視点もいつも必要とされている。いわゆる万葉時代だけでも百三十年あまりの歴史がある。しかも奈良時代末期から平安時代初期にかけての間は、日本語の変化が激しいとされる時期でもある。その歴史過程にわたって存在した否定辞を考察する以上、変化の観点からそれを検討するという手続きが当然必要とされるであろう。上代の否定辞と平安時代の否定助動詞との間の変遷過程を少しでも具体的に描き出すことも、上代における否定辞の性質を知ることによってやはり非常に重要なことであると考えられる。そのために、本稿において、平安前期の言語状況の縮図である『古今和歌集』(古)⁸⁾を取り上げ、その中の否定助動詞の使われ方や表現性を、上代における否定辞と対照させてみることも行った。

以上の研究目的を達成するために、本稿は上代の文献として、『万葉集』(万)、『古代歌謡集』(古事記歌謡<記>、日本書紀歌謡<紀>、続日本紀歌謡<続>、風土紀歌謡<風>、仏足石歌<仏>、琴歌譜<琴>)、『続日本紀宣命』(宣)などを言語資料とした。⁹⁾これは日本語固有の言語事実を可能なかぎり正確に把握するために、これらの言語資料を選択したわけであり、従って、上代にも見られる漢文資料(古事記や日本書紀の本文および万葉集の題詞など)は取り上げなかったのである。

以下、序に続いて、三編にわたって論じていきたいと思う。

第一編は「上代におけるナ行系統の否定辞について」である。そこでは上代に見られるナ行系統に属する否定辞にかかわる諸表現を取り上げ、ザ行系統否定辞に対していかなる相違が見られるのか、及び各表現の特徴などを考察してみる。

第二編は「上代におけるザ行系統の否定辞について」である。そこでは第一編に対して、上代に見られるザ行系統に属する否定辞にかかわる諸表現を取り上げ、ナ行系統否定辞に対していかなる相違が見られるか、及び各表現の特徴などを考察してみる。

第三編は「平安時代に見る両系統否定辞の変化」である。そこでは、明らかに一助動詞に統合したと考えられる平安時代前期の否定助動詞について、古今和歌集に見られる諸表現を通して、上代から平安時代前期にかけての否定辞の変化を浮彫りにする。

注：

1、「万」は万葉集の略である。本稿における万葉集の本文は、基本的に中西進氏編『万葉集全訳注原文付』(1978~1983、講談社)による。異訓・異説などの検証は、鶴久氏・

森山隆氏編『万葉集』（1981、桜楓社）と小路一光氏『万葉集助動詞の研究』（1981、明治書院）などによる。意味解釈は、後掲した万葉集に関する諸参考文献を参考にした。引用中、否定辞に関する部分と特に問題にするところは万葉仮名の表記を示す。以後同じである。

2、形容詞には、いわゆる「カリ活用」のほかに、「ク・キ」などのような、語幹に語尾が添加することによる形も見られるが、動詞の活用とは本質的な違いがあると考えられている。

3、従来、これらのものは否定或いは打消の「助動詞」と言われる。その場合はナ行系統のものもザ行系統のものも一緒にしているような慣習がある。本稿は基本的に、上代における両系統の否定辞が本来別々なものであろうという立場を取っているので、従来の考え方と区別するために、「否定辞」の用語（分けて使うときは、「ナ行系統否定辞」と「ザ行系統否定辞」）を使った。なお、明らかに一助動詞に統合されたと考えられる平安時代の否定助動詞については、従来どおり「否定助動詞」と呼ぶ。

4、吉田金彦氏『上代語助動詞の史的研究』（1973、後掲参考文献197）の「ず」の語源を述べたところにおいて、この辺の事情が詳しく紹介されている。富士谷成章や金沢庄三郎の語源説などは、いずれも吉田金彦氏による。詳しいことは後掲参考文献197を参照されたい。

5、この表は、一つの目安を出すための表であるので、異訓のある用例についても、特に吟味せず、習慣的な訓み方に従って、それぞれに割り当てている。なお、パーセンテージの数字も、小数点以下のものは四捨五入で切り捨てている。

6、もちろん、上代の文献においても、この連用形は既に活発ではなく、衰えの一途を辿っている。しかし、平安時代よりは助動詞的な姿を整えていることも事実である。

7、「風」は「風土記歌謡」の略。本稿における古代歌謡の本文は土橋寛氏・小西甚一氏校注『日本古典文学大系古代歌謡集』（1957、岩波書店）と大久保正氏『古事記歌謡全訳注』（1981、講談社）『日本書紀歌謡全訳注』（1981、講談社）による。万葉仮名の表記は万葉集の用例の場合と同じである。なお、古代歌謡の歌番号は古典文学大系のものを使う。

8、『古今和歌集』の用例を引用するとき、括弧の中のように「古」と略す。

9、各資料名の後の括弧内のものは、用例として引用する時の略称である。

第一編、上代におけるナ行系統の否定辞について

第一章、原因・理由を示す「に」について¹⁾

上代のナ行系統否定辞については、一般的にその連用形と見なされている「に」の問題がある。

万、5、…大夫と 思へるわれも 草枕 旅にしあれば 思ひ遣る たづきを知らに {鶴寸乎白土} 網の浦の 海処女らが 焼く塩の 思ひそ焼くる わが下ごころ

この歌の中の「知らに」の「に」がそれに当たる。

この「に」については、後に紹介するように、かつて佐伯梅友氏によって、「次に来る事柄の理由」を示すものだということが指摘されていた。本章では、この「に」がどんな経緯でいわゆる原因・理由を示し得たのか、この「に」にかかわる表現にはどんな特徴があるのか、ということ考察したいと思う。このことを通して、ザ行系統否定辞の連用形とされる「ず」との違いが看取される。

万葉集に次のような二首の歌がある。

万、200、ひさかたの天知らしぬる君ゆゑに日月毛不知恋ひ渡るかも

万、201、埴安の池の堤の隠沼の去方乎不知舎人はまとふ

この二首の歌に関する注釈を見ると、201番歌の「不知」については、諸注すべて「知らに」と訓む。一方、200番歌の「不知」については、『万葉集大成総索引』、武田祐吉氏の『万葉集全註釈』、窪田空穂氏の『万葉集評釈』、土屋文明氏の『万葉集私注』などが「知らに」と訓んでいるのに対して、佐々木信綱氏の『新訂新訓万葉集』、『日本古典文学大系万葉集』、澤瀉久孝氏の『万葉集注釈』、佐竹昭広氏・木之下正俊氏・小島憲之氏共編の『万葉集』などが「知らず」と訓んでいる。²⁾

このように訓みが分かれている「不知」の例に着眼して、佐伯梅友氏が1932年に「『不知』の訓について」³⁾と題した論文を発表された。この論文において、氏は、確実に「知らに」と訓まれる歌と確実に「知らず」と訓まれる歌を集めて検討した上で

「『シラニ』の方は……次に来る事柄の理由といふやうなものを表はす時に用ゐ、『シラズ』の方は単に状態を表はすのに用ゐられてゐるやうである」

と指摘し、200番歌の「不知」は「知らず」と訓み、201番歌の「不知」は「知らに」と訓むべきだと主張された。

このように佐伯氏の論によれば、「不知」を「知らに」と訓むか、「知らず」と訓むか

は、意味によって決まるべきだということになる。そして、佐伯氏はこのような意味的な違いとともに、「知らに」と訓まれるものは常に助詞「を」を承け、「知らず」と訓まれるものは常に助詞「も」を承ける、という文型的な違いも示されている。

万、3777、昨日今日君に逢はずてする術のたどきを知らに（多度伎乎之良尔）哭のみしそ泣く

万、3897、大海の奥処も知らず（於久可母之良受）行くわれを何時来まさむと問ひし児らはも

さて「～を知らに」という形式に関して、佐伯氏は同論文の中で

「『ニ』は誰もいふ如く打消の『ヌ』の活用で、連用形であるが、万葉時代には既に『知ラニ』と『カテニ』とだけであると言ってもよい位に用途が限られ、同時にその意味も限られてしまっている。而してその用法意味は『高ミ』『遠ミ』等に頗る相似たものがある」

と述べ、いわゆるミ語法と呼ばれる表現との類似を指摘された。⁴⁾

このように、佐伯氏の論においては、同様に否定・打消助動詞の連用形と見なされている「に」と「ず」には実は表現の性質において或いは意味において違いが存在する、という鋭い指摘があったのだが、しかし、何故ナ行系統の「に」がそのように「次に来る事柄の原因・理由」を示し得たのか、それは「に」のどういう性質によるのか、ということについては、必ずしも明確に論じられていないように思われる。また、佐伯氏が指摘されたように、「～を知らに」には、意味的にだけでなく形式的にも、「～を～み」といういわゆるミ語法に頗る相似ている一面があるのは確かであるが、両者は単にある形式化によって、その特殊な表現性が見られるのだろうか、それとも他にその性質を求めるべきなのか、という問題について、氏は特に明言されていないようである。

一、「～を知らに」と「～を～み」（ミ語法）

周知のように、「に」の上接用言には大きな偏りがある。それは「知る」「～かつ」「飽く」（「飽き足る」も含めて）の三つに限られている。⁵⁾その中で最も多いのは「知る」という動詞である。「知らに」という語法は万葉集、古代歌謡、続日本紀宣命のいずれにも見られる。その分布と数は次頁に示す表2のようである。

万葉集を巻別に見ると、巻1、2、3、4、5、7、9、10、11、13、15、17、19の各巻に用例が見られ、いわゆる万葉時代の前期はもちろんのこと、かなり後期の歌が集められていると思われる巻においても用例が見られる。万葉集と古代歌謡に万葉仮名で表記されるものは「之良尔・斯良尔・斯良迹・志羅珥・辞羅珥・白土・胡粉・思良尔・白二・白粉」などとある。また一部の用例は「不知」の後に「尔」を付けて「不知尔」の形になり、特に続日本紀宣命ではいわゆる宣命書きで「尔」が小文字になっている。本稿では、表2

で見られる異訓のあるものを除き、主に仮名表記のものを考察対象にし、「不知」のうち、異訓のないようなものはその参考とする。

表2、「知らに」の分布

	仮名 表記	「不知」 異訓無し	「不知」 異訓有り
万葉集	22	14	16
古代歌謡	8	0	0
宣命	10	8	0

前述のように、「～を知らに」の意味用法が、「～を～み」といういわゆるミ語法に頗る相似た一面があることは、佐伯氏によって指摘されている。

「～を知らに」の用例、

万、904、…思はぬに 横風の にふぶかに 覆ひ来ぬれば 為む術の 方便を
知らに {多杼伎乎之良尔} 白栲の 手襪を掛け まそ鏡 手に取り持ちて 天
つ神 仰ぎ乞ひ祈み…

「～を～み」(ミ語法)の用例、

万、44、吾妹子をいざ見の山を高みかも {去来見乃山乎高三香裳} 大和の見えぬ
国遠みかも {国遠見可聞}

この「～を知らに」と「～を～み」という形式的な類似及び、いずれも「理由を表す」という意味的な類似によって、しばしば両者はいずれもある形式化されたものとして同類視されているようである。⁶⁾

確かに「知らに」の上接項目には一つの注目すべき特徴がある。それは、「知らに」へかかる要素は「徒」の形⁷⁾であるか、助詞が付く時はほとんど必ずといっていいほど助詞「を」を伴って「知らに」にかかっている、ということである。

「を」が付く用例、

万、3627、…吾妹子に 淡路の島は 夕されば 雲居隠りぬ さ夜ふけて 行方
を知らに {由久散乎之良尔} 吾が心 明石の浦に 船泊めて…

「徒」の形の用例、

万、4195、わが幾許思はく知らに {斯努波久不知尔} 霍公鳥何方の山を鳴きか越
ゆるむ

この「～を知らに」という特徴は、前に紹介した佐伯氏の論文において、「不知」を「

シラニ」と訓むべき一つの客観的な根拠と見なされていた。しかし、この「を」を文法的にどういうふうの説明すべきかということについては、佐伯氏の論文では必ずしも明示されていないのである。

一方、ミ語法については、形容詞から派生して未発達に終わった動詞連用形語尾だとする説、接尾語説、副詞説、原因の助詞とする説などいろいろに分かれ、それと関連して、そこに使われている「を」についても、格助詞と見たり、感動の助詞と見たりして分かれているようである。⁸⁾

ところで、周知のように「～を～み」という「ミ語法」の「み」に上接しているのはすべて形容詞の語幹であり、これに対して、ナ行系統否定辞の連用形「に」に上接しているのは、明らかに動詞の未然形である。

また橋本四郎氏(1962)によると、ミ語法の受ける助詞には「を」以外に若干の「の」「が」の例もあると言う。「の」も「が」も形容詞の取り得る格助詞である。それと関連付けて「ミ語法」の「み」の形容詞性が主張できるかもしれない。ところが、「知らに」の受ける助詞には「の」も「が」も見られない代わりに、次の用例が示すように「と」が見られる。

万、4202、藤波を仮廬に造り浦廻する人とは知らに〔人等波不知尔〕海人とか見らむ

琴、9、庭に立つ ふふきの雄鳥 しついついつら 愛子夫 我が夫 暁と知らに〔安可止支止之良尔〕我が寝ば しついつら 打ち越せ雄鳥

この「と」は言うまでもなく、そこに使われる「知る」という動詞の知覚内容を示すものに付く格助詞と考えられよう。即ち「知らに」の用法は、「ミ語法」のように、ある形式化のために本来形容詞の取らない助詞を敢えて取る必要がなかったのであろう。言い換えると、「知る」という動詞と知る内容を表す体言との意味関係を示す格助詞がそのまま使えたのである。⁹⁾

従って、「～を知らに」に使われている「を」という助詞については、「～を～み」のミ語法の中の「を」のように、感動の助詞ではないかと詮索する必要も無く、間違い無く「知る」という動詞の目的語・知覚内容を示す格助詞の「を」と断定することができるのであろう。

「～を知らに」と「～を～み」の違いは、上に述べたような助詞「を」にだけではなく、その上接項目についても看取される。つまり、ミ語法の上接項目を見るとほとんど体言だけである。しかし「～を知らに」の上接項目(目的語)はどうなるであろうか。もちろん、最も多いのは体言であるが、しかし次頁の表3が示すように、もっと広がりが見られる。

表3、「知らに」の上接項目

体言	たどき・たづき せむすべ・行方 心・われ	31
ク語法	盗まく・取らく 思はく・刺けく・すらく 窺はく・延へけく	9
準体 用法	ありける 刺ける	2

体言の用例、

万、460、…あしひきの 山辺を指して くれくれと 隠りましぬれ 言はむす
べ せむすべ知らに（将為須臾不知尔） たもとほり ただ独りして 白袴の
衣手干さず 嘆きつつ…

ク語法の用例、

紀、18、…己が命を 死せむと 盗まく知らに（農殊末句志羅珥） 姫遊びすも

準体用法の用例、

万、401、山守のありける知らに（有家留不知尔） その山に標結ひ立てて結ひの
恥しつ

同じ体言といっても、「～を知らに」の方は、「たどき（たづき）」や「せんすべ」が最も多く（それぞれ14例と12例ある）、ほかには「行方」や「心」で、これらはいずれもいわゆる事柄性を帯びた体言である。その中でコトガラというよりモノを表すと考えられる体言「われ」でも次のように使われている。

万、223、鴨山の岩根し枕けるわれをかも（吾乎鴨）知らにと妹が（不知等妹之）
待ちつつあるらむ

つまり「われ」でも、ただの「われ」ではなく、「岩根し枕けるわれ」（しかも形式的には「われをかも」の形で現れ、単なる体言用語とは言えない）であって、やはり一種の事柄性が感じられるであろう。このような事柄性を帯びている体言と、ク語法、準体用法などに関連してみれば、「～を知らに」の上接項目は、「山を高み」のミ語法の上接項目（前後が形容詞文の主述関係を成す項目）とは決して同じではないと言えよう。もちろん、このことは「知る」という動詞の性質とも大いに関係があると思われるが、しかし「～を知らに」と「～を～み」の両者に明確な違いがあるということも無視してはならないであ

ろう。従って、「知らに」に現れる「に」が原因・理由を示す役割を持つということは「～を知らに」が「～を～み」という「ミ語法」と類似していて、その形式化によるからであると言うことも出来ないであろう。

二、「に」の性質について

以上のように「～を知らに」と「～を～み」は、形式的に似ているにも拘らず、その中身を見ると、むしろ違うものが見られ、両者を同じようにある形式化のために特殊な意味あいが生まれたのだと考えてはいけないと言うべきである。しかし、「～を知らに」の形が、次に来ることがらの原因・理由を表すということも、また事実である。例えば、

万、3274、為むすべの たづきを知らに {田付叫不知} 石が根の ござしき道
を 石床の 根延へる門を 朝には 出で居て嘆き 夕には 入り居て思ひ…

この歌については「どうしてよいのかその手だても分からなくて、岩のごつごつした道を、岩の広がっている門を、朝には外に出て嘆き、夕方には中に入って偲び…」¹⁰⁾ という注釈が見られる。また、前出万葉集3627番歌の「…さ夜ふけて行方を知らに吾が心明石の浦に船泊めて…」についても「…夜がふけて行く先もわからないので、(我が心)明石の浦に舟を泊めて…」¹¹⁾ という注釈が見られる(ほかの用例もそうであるが、紙数の関係で一々示さないことにする)。

つまり、ナ行系統否定辞の「に」は、否定の意を表す助動詞の連用形と認められながら、後件の動詞にかかわった時、次に挙げる用例に使われているザ行系統否定辞の連用形「ず」とは違って、状態修飾の役割を果たすのではなく、むしろ「～なくて」「～ないので」と訳したくなるような、原因・理由を表す場面に用いられているのである。

「ず」の用例、

万、3894、淡路島門渡る船の楫間にもわれは忘れず {吾波和須礼受} 家をしそ思
ふ

この歌は一般的に「淡路島の瀬戸を渡る舟の、楫を操る間でさえ、わたしは忘れずに、家のことばかり思う」と解釈されている。¹²⁾

また、前にも触れたように、「に」の上接用言には偏りがあり、佐伯氏も指摘されたように、万葉時代において既に「に」の用法の固定化が見られた。しかし、「に」が持っている「ず」と違う特別な意味は、決してその用法の固定化によるものではない。これは万葉集より少し時代的に遅いと考えられる続日本紀宣命の「に」の用法から見ても、或いは平安時代に現れる、「に」が形骸化されたような「～がてに」の用法から見ても、むしろ「に」の用法が固定化される以前に、或いは本来的に「に」と「ず」が意味的に違いがあったはずだと言わなければならない。¹³⁾

それでは、「に」のこのような特殊な表現性についてはどう解釈すべきであろうか、そ

の表現性は「に」のどういう性質によるのであろうか。

筆者は、それは「に」が持っている動詞連用形たる性質によるのではないかと考え、その意味用法は動詞連用形と同様である、という立場で解釈したい。

ここで少し長くなるが、橋本四郎氏（1962）の論述を引用しておく。

「動詞の場合も

劍大刀腰に刀利波積さつゆみをた握り持ちて（804）

……

のやうな並列的な中止法の他に

等利都々伎追ひ来るものは（804）

時の盛りを等々尾迦祢過ぐしやりつれ（804）

大船にまかぢ之自奴伎…敏馬をさして潮待ちて水脈ひき行けば（3627）

など、後行句を規定するかに見られるものもある。時間的に先後に並べた二つの部分に、継起的な関係が認められる結果、前が後を規定するかに受け取られることはいふまでもない。」¹⁴⁾

この中で特に注目すべきことは、後句との並列関係を表す中止法と、後句を時間的乃至継起的な関係で規定する用法という二つの用法を具えているのは動詞の連用形であるということである。もし、「～に」の用法をこの動詞連用形に準じて考えれば、その原因・理由を表す意味も、動詞の連用形のように、後句を規定する用法による、という類推から自然に解かれるのではなからうか。

ところで、このように解釈するためには、「に」が後句を規定する用法を持っているほかに、動詞連用形的な中止法も同時に具えている必要がある。しかし「に」は果たして中止法を持っているだろうか。¹⁵⁾ 次の古事記歌謡を見てみよう。

記、44、水溜る 依網の池の 堰杙打ちが 刺しける知らに（佐斯祁流斯良迹）

尊繰り 延へけく知らに（波閉祁久斯良迹） 我が心しぞ いや愚にして 今
ぞ悔しき

この歌における最初の「刺しける知らに」は明らかに後の「延へけく知らに」に対して並列関係を構成するものであり、その意味で、ここに使われている「知らに」の「に」は中止法としか言いようがないだろう。¹⁶⁾ これは「～に～に」の形で、後の「に」に対して前の「に」が並列関係を示す「に」の中止法である。更に「に」には、「～に」一つだけで後句に対して並列関係を示す用法も見られる。

万、3276、…為むすべの たづきを知らに（田付乎白粉） 物部の 八十の心を

天地に 思ひ足らはし 魂合はば 君来ますやと わが嘆く 八尺の嘆き…

この歌を現代語に解釈すると「…どうすればよいのかわからず、（もののふの）ちちに乱れた心は天地に満ち溢れんばかりに思い…」¹⁷⁾ 云々になり、「知らに」は中止用法の働きをしていると考えられよう。

このように、「に」には動詞連用形が具えている二つの用法、つまり後句との並列関係を示す中止法と、後句を規定する結果、原因・理由を表す用法とがそなわっていたとすることができる。これはもしかすると「に」の本来の性質であり、「に」が次に来る事柄の原因・理由を示し得たのも、動詞連用形が後句に対して原因・理由を示すのと同じ事情によるものと理解することができるのではなからうか。

このような性質を有する「に」が、歌の中で同じく原因・理由の意味を示すミ語法、或いは「已然形+ば」などの条件句と共存するのは言わば当然の成り行きであり、それが目立って多い（合計16例ほどある）のは、全く自然なことであろう。

ミ語法と共存する用例、

万、619、…日も暮るるまで 嘆けども しるしを無み〔知師乎無三〕 思へども たづきを知らに〔田付乎白二〕 幼婦と 言はくも著く 手童の ねのみ泣きつつ…

万、210、…昼はも うらさび暮らし 夜はも 息づき明し 嘆けども せむすべ知らに〔世武為便不知尔〕 恋ふれども 逢ふ因を無み〔相因乎無見〕 大鳥の 羽易の山に わが恋ふる 妹は座すと 人の言へば 石根さくみて なづみ来し 吉けくもそなき…

「已然形+ば」条件句と共存する用例、

万、1792、…逢はぬ日の 数多く過ぐれば 恋ふる日の 累なり行けば〔累行者〕 思ひやる たどきを知らに〔田時乎白土〕 肝向ふ 心砕けて 玉襷 懸けぬ 時無く 口息まず わが恋ふる児を…

万、207、…沖つ藻の 靡きし妹は 黄葉の 過ぎて去にきと 玉梓の 使の言へば 梓弓 声に聞きて 言はむ術 為むすべ知らに〔世武為便不知尔〕 声のみを 聞きてあり得ねば〔聞而有不得者〕…

上に考察したことによって考えれば、ナ行系統否定辞の連用形「に」が後句の原因・理由を示す意味を持つのは、「に」が動詞連用形のような性質を持ち、後句に続くことととの間に、あたかも動詞連用形が後句と関連するときのような関係があり、本来並列的に並べられた両件の間に時間的な先後関係乃至継起的な関係が認められることによって、「～て」や「～ので」で繋ぐような因果関係を示す意味さえ生まれたからであろう。これは、ナ行系統否定辞が動詞のような活用形を持つという形態的な特徴とも無関係ではないかもしれない。

もちろん、「に」が持っているこのような性質は、「知らに」だけでなく、他の「～に」の用法にも同じように見られる。

否定辞「に」の上接用言で、「知る」に次いで多いのは、「かつ」という補助動詞である。¹⁸⁾ この「かてに」（「がてに」）に現れる「かつ」について、「堪ふ」「敢ふ」または「得」などというような意味を持っているということは早くから橋本進吉博士によっ

て指摘されていた。¹⁹⁾

「～かてに」（「～がてに」も含む）の用例は万葉集に22例が見られる（うち異訓のあるもの2例）。²⁰⁾ そのうち「加弓尔・迦弓尔・可天尔・可提尔・我弓尔・我弓尔」などと正音字で表記するもの7例、「勝尔」のような正訓字と正音字の交用表記のもの2例、出来上がった「かてに」が持っている「～しかねる」という意味を汲み取って、「難」の字を当て、それに「尔」や「丹」を付けた「難尔」と「難丹」で表記するもの7例、「難」一文字を当てて表記するもの4例ある。以下実例を挙げておく。

正音字表記の用例、

万、4398、…真袖持ち 涙をのごひ むせひつつ 言問ひすれば 群鳥の 出で
立ちかてに {伊渥多知加弓尔} 滞り 顧みしつつ…

万、859、春されば吾家の里の川門には鮎子さ走る君待ちがてに {吉美麻知我弓尔}

「勝尔」の用例、

万、1684、春山は散り過ぎぬとも三輪山はいまだ含めり君待ちかてに {君待勝尔}

「難尔」の用例、

万、901、荒栲の布衣をだに着せかてに {伎世難尔} 斯くや嘆かむ為むすべを無
み

「難」一字の用例、

万、2004、己が夫ともしき子らは泊てむ津の荒磯枕きて寝君待ちがてに {君待難}

これら「かてに」（「がてに」）の用例も前後句と関係する場合、やはり「ミ語法」や「已然形+ば」のような原因・理由を示す条件句と共存するものが見られる。意味的には「～かねて」と訳せるように、時間的先後関係・継起関係を以て後句を規定し、更に因果関係を示す意味を持つようなものである。つまり、「知らに」を考察した時に得られた「に」の性質は「かてに」の「に」にもあてはまるのである。

そして、「に」の上接用言が「知る」と「かつ」に偏る中で、次のような「飽き足らに」の用例が一つある。

万、2009、汝が恋ふる妹の命は飽き足らに {飽足尔} 袖振る見えつ雲隠るまで²¹⁾

この歌に使われる「に」は「知らに」や「かてに」の「に」と同じもので、ナ行系統否定辞の連用形「に」だと考えられ、事実この歌を「あなたが恋い慕う織女星は、別れた後も十分満足できないので、袖を振っているのが見えた。雲に隠れるまで」²²⁾ 「あなたが恋する織女星は、物足りながって、袖を振るのが見えた、雲に隠れる間際まで」²³⁾ などのように解釈することが可能なようである。

三、続日本紀宣命の特殊例について

ところで、続日本紀宣命においては、上に述べた「に」の性質に反するような用例が見られる。

宣、14、掛けまくも畏き我が皇天皇、斯の天日嗣高御座の業を、受け賜はりて仕へ奉れと負せ賜へ、頂に受け賜はり恐まり、進みも知らに退きも知らに（進毛不知退毛不知尔）恐み坐さくと宣ふ天皇が御命を、衆聞き食へと勅ふ²⁴⁾

宣命には「知らに」の用例が18例あるが、その内16例までが上に挙げたような「進みも知らに退きも知らに」という慣用的な表現である。

ここでまず第一に気が付くことは、前に挙げた「知らに」の確例に見られなかった助詞「も」である。佐伯氏の説によれば「知らに」は「も」を承けないはずであった。だがしかし、これは「～も知らに～も知らに」と同列に並んだために、並立の助詞「も」が使われたのだ、と一応解決することができる。

もっと重要なのは、これら用例の意味が、いずれも後句との並列を示し、或いは後句を規定するようなものではなく、むしろ「～ずに～」と解釈できるような状態修飾の意味になるということである。²⁵⁾ これらの用例に関してはどう考えるべきか。

ここでは、参考として、まず田島光平氏（1950）にある一つの整理表を掲げたい。²⁶⁾

表4、田島光平氏（1950）の整理表

	聖武天皇	孝謙天皇	淳仁天皇	光仁天皇
不知	4	1	1	0
不知尔	0	1	2	5

この表によると、続日本紀宣命においては、時代が新しくなるに連れて、「知らに」の表現を「不知尔」と表記する必要性が大きくなっていると言える。田島氏は、それは「に」の衰退の結果であると考えた。だが、表記には表記者の癖も考えられるし、更に捨て仮名的な二重表記は他の表現にも見られるので、表記だけを根拠に「に」の衰退を考えるのは必ずしも十分とは言えないと思う。²⁷⁾ 表記の仕方とも関連して、「に」の意味上の衰退が考えられないであろうか。

周知のように、続日本紀宣命は上代の文献ではあるけれども、万葉集や記紀歌謡に比べれば、やや時代的に新しいと言える。しかも「知らに」の用例が初めて宣命に見られるのは第五詔で、時期的に見ると聖武天皇の神亀元年（西暦724年）であり、万葉の時期区分で言えばかなり後期に当たる。そこに「進みも知らに退きも知らに」と常用句のように現

れた「に」の意味・用法には一つの変化が明らかに認められる。即ち、並列関係を示す中止法と後句を規定する限定法から後句の動詞を修飾する副詞法への変化である。

もちろん、この変化は突然変異的なものであるとは考えられない。前述のように「に」の用例を見ると、単に後句と並列するようなものもあれば、時間や継起的な関係で後句を規定するようなものもあった。後句を規定する用法は、角度を変えれば副詞法への近づきであるとも考えられる。即ち「に」の意味・用法は、副詞法に転じる可能性をもともと持っていたのである。しかも、上代の用例から見ても、「に」の原因・理由を表す用例が、「に」の中止法的な用例よりずっと多く見られるのである。つまり、後句に対する限定の用法は、「に」の用法の中では、既により大きな比重を占めていたのであるということであろう。²⁸⁾それが、続日本紀宣命の時代になると完全な副詞法である状態修飾の用法が実現することになったのではなかろうか。実は続日本紀宣命の用例を辿っていくと、第五十八詔（光仁天皇、天応元年〈西暦781年〉）にはこんな用例もある。

宣、58、如此あらむと知らませば、心置きても談らひ賜ひ相見てましものを、悔
しかも哀しかも、云はむすべ知らにもしあるかも（云部不知毛之在加毛）

助詞「もし」を介しているけれども、ここの「知らに」は明らかに後の存在詞「あり」とかかっているのである。ところが、存在詞「あり」とかかわり、いわゆる「ザリ活用」まで生み出したのは、第二編で取り上げるもう一方のザ行系統否定辞の「ず」である。しかも、この用例の最後の部分は意味的に「…何と云ってよいかわからずにいることであるよ」と修飾法的に解釈できる。²⁹⁾

こうなれば、形式的にも意味的にもザ行系統否定辞の連用形「ず」との違いが無くなり、「に」は「ず」と張り合って存在する価値を失い、ついに衰退・消滅の一途を辿ることになるのであろう。³⁰⁾「に」の用例に多く見られる「かてに」は、当てられた「難」の文字からして、それだけ「知らに」より状態性が強かったせいか、後に一語化され、化石的な存在となった。しかも、後に取り上げる平安時代の古今和歌集に見られる「～かてに」の用例はやはり後句の動詞を状態修飾する用法になっているのである。

四、「にす」の用法について

ナ行系統否定辞の連用形「に」の用法について、もう一つ「にす」の用法を考察しておく必要がある。序のところでも述べたように、「～にす」の用法は、学者によって後に「ず」が成立する原形と見られるくらい大いに注目されている用法である。上代において、この用法にはどんなものが見られるのであろうか。

「に」の下にサ変動詞「す」が付く用例は7例見られるが、それを幾つかのパターンに分けることが出来る。

まず次の用例が示すように「に」が「す」の力を借りて、そこで終止してしまうような

ものがある。

万、167、…さす竹の 皇子の宮人 ゆくへ知らにす {帰辺不知尔為}

次に以下の用例が示すように「に」が「す」の力を借りて、係助詞「か(も)」や「こそ」に応じた係り結びの形を整えているようなものが見られる。

万、1139、ちはや人宇治川波を清みかも {清可毛} 旅行く人の立ちかてにする {立難為}

万、629、何すとか使の来つる君をこそ {君乎社} かにもかくにも待ちがてにすれ {待難為礼}

それから以下の用例が示すように「に」が「す」の力を借りて、助動詞へ繋いでいき、或いは更に連体修飾へ展開するような用法もある。

万、3902、梅の花み山と繁にありともやかくのみ君は見れど飽かにせむ {見礼登安可尔勢牟}

万、845、鶯の待ちかてにせし {麻知迦互尔勢斯} 梅が花散らずありこそ思ふ子がため

ここでもう一度確認されることは、ナ行系統の否定辞「に」に付く「す」は明らかにサ変動詞の「す」だということである。「にす」のほかに「にせ」「にする」「にすれ」の用法も確実に存在したのである。ザ行系統否定辞の「ず」に「ぜ・ずる・ずれ」などの活用形が存在しない限り、安易に「にす→ず」に変化したと認めないほうが言語事実上添うのであろうと思う。

さて、上に挙げた「にす」の諸例を見ると、そこに現れているサ変動詞「す」はいずれも形式的な役割を果たしているのである。「に」がこの「す」の力を借りることによって、そこで文を終止することができ、係助詞の結びになることができ、更に助動詞へ繋ぎ、体言を修飾することができたのである。そこで、特に注目すべきことは、ナ行系統否定辞連用形の「に」が、ある形式用言の力を借りて文の様々な表現に参加する場合、ザ行系統否定辞の連用形「ず」と違い、存在詞「あり」の力を借りるのではなく、動作的な代動詞「す」の力を借りるということである。これはまたナ行系統とザ行系統の両系統の違った否定辞の相異なる性質を一面から示しているのであろう。

ほかに、「に」がサ変動詞「す」と関連する用例には下記のような用例が二つあった。

万、948、…馬並めて 行かまし里を 待ちかてに {待難丹} わがせし春を {吾為春乎} かけまくも あやに畏く 言はまくも ゆゆしくあらむと あらかじめ かねて知りせば…³¹⁾

万、987、待ちかてに {待難尔} わがする月は {余為月者} 妹が着る三笠の山に 隠りてありけり

二例とも「待ちかてに」の用例である。この二例は、ある意味で上に見た、「す」の力を借りて助動詞へ繋ぎ、また連体修飾へ展開する「にす」の用例と似たような用法とも言

える。違うところは「に」と「す」の間に「わが」という動作主を表す言葉が入っていることである。動作主が入ることによって、後の「す」は代動詞というより本動詞としても考えられる。そうすると、前項の「に」には後項の「せし」や「する」との間に一種の規定乃至修飾の関係が生まれる。ところが、両者には、いわゆる複文で考えられる前件と後件ほどの関係も考えられず（「す」が前の「待つ」の一つの代動詞でもある）、「に」の後件の原因・理由を示す意味も読み取れない。すると、それが「待ちかねないままに、私がそうした（そうする）…」のような意味になり、「に」と「す」の間には、いわゆる状態修飾とでも言えるような関係が生じてくる。このような用法は上代でも「～かてに」に限られ、それによって、「～かてに」の状態修飾の機能が触発され、後に「に」が消滅しても「～かてに」が慣用句的な形で生き残る下地となっただけではなかろうかと考えられよう。³²⁾

以上、本章において、ナ行系統否定辞の連用形と考えられる「に」を考察してきた。確かに、上代においても、「に」は既に用法が限られてしまい、廃れる傾向が現れてはいる。しかし、それが文に参加した場合、後句と関連したとき、ザ行系統否定辞の連用形「ず」と違い、本来的には後続する動詞に対して状態修飾するのではなく、後件の原因・理由を示すこと、形式用言を取るとき、また「ず」と違い、存在詞の「あり」を取らずに、代動詞の「す」を取ることなど、つまり明らかにザ行系統否定辞の連用形「ず」と相異なる性質が、やはり端的に示されているのである。

注：

- 1、本章第一、二、三節の内容は「ナ行系統の否定辞『に』」と題して『国文学研究ノート』21号（神戸大学、1988）に発表した。本稿において更に修正を加えた。
- 2、これらの異訓の指摘は小路一光氏『万葉集助動詞の研究』（1980、後掲参考文献72）による。
- 3、佐伯梅友氏（1932年、後掲参考文献78）による。
- 4、注3の参考文献による。
- 5、万葉集1460番歌の「吾が手もすまに（吾手母須麻尔）」と万葉集1633番歌の「手もすまに（手母須麻尔）」の二例について、「スム」が休息する意の動詞で、「ニ」が打消を表す「ニ」であると解釈する注釈書もあるが（例えば『日本古典文学全集万葉集』など）、しかし、「すまに」は確かに「休めずに」の意味には解釈できるが、だからといって、そ

の「に」がナ行系統否定辞の連用形「に」だを見ていいということではないだろう。現に「すまに」の成立を「未詳」と意見を保留する辞典（例えば、大野晋氏・佐竹昭広氏・前田金五郎氏編『岩波古語辞典』）、「すまに」全体を一つの副詞として扱う辞典（例えば、松村明氏・今泉忠義氏・守随憲治氏編『旺文社古語辞典』）、また、「テモスマニのスマは、アシモアガカニのアガカと同じで、未然形が状态的な意義を表すものと考えられ」、「アガカニ」は「足搔クの未然形アガカに、助詞ニが加わって副詞となったもの」と解釈する辞典（例えば、『時代別国語大辞典上代編』）などがある。なお、小路一光氏『万葉集助動詞の研究』でも、この二例を打消・否定の助動詞の「に」の用例に取り入れてはいない。筆者も、この二例に見られる「に」が後句の原因・理由を示すというより、副詞のように状態修飾をするという用法から見て、むしろ、上代のナ行系統否定辞の連用形「に」の性質に反するものであると考えられるので、そこに見られる「に」をナ行系統否定辞の連用形「に」と関連付けず、「すまに」全体を一つの副詞と見るという立場を取りたい。この二例を除けば、「に」に上接する用言は「知る」「かつ」「飽く」の三つになる。

6、事実『時代別国語大辞典上代編』において、この両者を共にある形式化されたものとして同類視するような記述がされている。

7、本稿における「徒」は「タダ」と読み、助詞を伴わない形を意味する。以後同じ。

8、ミ語法に関する論は、管見の及ぶ限りでは、橋本四郎氏（1962、後掲参考文献129）がもっとも詳細であると思われる。従って、ミ語法の事実関係や理論的な展開は同文献を参照するところが大きい。また上原良明氏（1978、参考文献8）も参考にした。

9、実は若干の異訓があるものの、「知らに」の受ける助詞の用例として、次のような「は」を使うものもある。

万、2677、佐保の内ゆ嵐の風の吹きぬれば還りは知らに（還者胡粉）嘆く夜そ多
き

鶴久氏・森山隆氏編『万葉集』（桜風社）によると、「還者胡粉」には「還るさ知らに」の異訓（『岩波古典文学大系万葉集』）もある。

10、この現代語訳は桜井満氏訳注『現代語訳対照万葉集』（旺文社）による。

11、この現代語訳は『日本古典文学全集万葉集』（1971～1975、小学館）による。

12、『日本古典文学全集万葉集』（小学館）による。

13、続日本紀宣命の用例について、佐伯氏も前記論文の「追記」のところで「自分としては困る材料である」と嘆いている。なお、宣命の特殊例については、後に取り上げた。

14、注8に挙げた橋本氏の論文による。もちろん橋本氏の論述はミ語法と関連したものであるが、筆者にとっては、「に」と関連させた方がもっと適切ではないかと思う。なお、「ミ語法」の「み」の動詞連用形的な性質を認めることによって、その「み」と「に」の共通性も考えられるが、「ミ語法」の性質を追求することは、本稿の主旨から離れてしまうので、深入りしないことにした。本章第一節で、「～を知らに」と「～を～み」の違い

- を明らかにしたのは、両者が原因・理由を表し得たのがその形式化によるのではなく、両者の形式に限ってみれば、むしろ違いが見られるのだと言いたかったのであり、そのことは「に」と「み」の共通性を求めてはいけないということを意味しないのである。
- 15、注3の参考文献では、佐伯氏が「に」の中止法を認めず、「中止法に用いるのも『ズ』で、『ニ』には例を見ぬ」と述べている。
- 16、記紀歌謡に「～に～に」の確例があるので、佐伯氏が上の方の「に」が中止法で「ず」と訓んだ方がいいとされている、万葉集3239番歌の「…己が母を取らくを知らに〔取久乎不知〕己が父を取らくを知らに〔取久乎思良尔〕いそび居るよ斑鳩とひめと」のところが「～に～に」と訓むことも許されるであろう。
- 17、『日本古典文学全集万葉集』（小学館）による。
- 18、「かつ」を動詞と見る辞典もあるが、その用法から見ると、上代では、他の動詞の連用形に接して使われる用法しか見られないので、一応補助動詞として扱うことにした。
- 19、橋本進吉氏「『がてぬ』『がてまし』考」（1910、後掲参考文献130）。
- 20、巻14の3431番歌の「来がたに〔故賀多尔〕」について「児が為に」（あの児のために）という異説があるが、本稿では一応「来がてに」の東国方言の例と見て、異訓のある用例に入れ、確例としない。
- 21、『万葉集大成総索引』のように「飽足」と「尔」の間に「迄」を入れて「あくまでに」と訓む説には従いにくい。
- 22、注10に同じ。
- 23、『日本古典文学全集万葉集』（小学館）による。『日本古典文学全集万葉集』の頭注には「飽き足らに―十分に満足できないので」と記してある。
- 24、続日本紀宣命本文の訓みは北川和秀氏編『続日本紀宣命校本・総索引』（1982、吉川弘文館）に従う。金子武雄氏の『続日本紀宣命講』（1941、白帝社）によれば、「進むも知らに退くも知らに」と訓む。なお、否定辞に関する部分と特に問題にするところは宣命の原文で示し、斜体の文字は本文小書きであることを示す。以後宣命の例を引くときも同じ方法で示す。
- 25、前記佐伯氏論文の「追記」によれば、これらのものについて、「『いたく恐みて、せむすべしられぬさまを詔玉ふ也』と詔詞解にある」と言う。
- 26、田島光平氏「万葉集における『ず』の表記の特色とそれより導かれる種々の問題」（1950、後掲参考文献106）による。
- 27、「シラニ」を「不知尔」と表記する用例が万葉前期とされる巻2、3にも見られ、そういうものに関して田島氏はその巻の書記の癖とされている。一方、「不知尔」のようにいわゆる二重表記と見られるものも単に「知らに」だけではなく、「濡れにし衣干せど乾かず〔雖干跡不乾〕」（万、1186）に見られる「ど」、「べき」を「可…伎」と表記するものが続日本紀宣命の十、十一、五十四、五十五、六十の各詔に見られ、名詞の「たち」

も「諸王多知（おほきみたち）」と続日本紀宣命第四十二詔に見られる。従って、意味と関連させず、表記だけで云々するのは不十分であろうと思う。

28、それに対して、橋本四郎氏に指摘された、動詞連用形における、後句に対する限定の用法は、動詞連用形の用法の中ではむしろ少数にしか見られないものである。これはまたナ行系統否定辞の連用形「に」と動詞連用形との違いでもあり、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞が統合してから、「に」が消滅する原因にもなるのであろう。

29、この解釈は注23に挙げた金子氏の注釈による。

30、この変化の背後に、本稿で主張するナ行系統否定辞とザ行系統否定辞との統合が起因していると考えられるが、それを深く究明することは今後の課題として残される。

31、この歌の「わがせし春を（吾為春乎）」には「わがする春を」の異訓もある。

32、この二首の歌はいずれも神亀四年・五年（西暦727年・728年）の作とされており、万葉時期区分では第三期の作品に属し、第三節で考察した続日本紀宣命の用例と同時期のものであるということも無視されないことであろう。

第二章、終止用法の「ぬ」について

ナ行系統否定辞の活用形式は、よく動詞四段活用の形式に擬せられる。その実態はともかくとして、形としては「な・に・ぬ・ね」が揃っているのも事実である。¹⁾もし、動詞四段活用の形式に擬して考えるならば、「ぬ」の形は連体形の役割を果たすと同時に、終止形的な役割をも果たしていたはずである。

周知のように、上代においては、「ぬ」の形が既に十分に連体形としての役割を果たしていた。筆者の調査によれば、上代の諸文献から、連体形と考えられる「ぬ」の用例は、連体修飾用法のものと準体用法のものを合わせると、260例（その内19例の異訓を持つものが含まれる）も見られるのである。

では、終止的な用法の「ぬ」が上代には見られるのであろうか。

古代日本語には「係り結び」という結び方がある。一般的に曲調終止と言われるが、一種の終止的な用法とも考えられる。

ナ行系統否定辞の「ぬ」の形には、以下のような係り結びとしての用法が見られる。

「～か（も）～ぬ」の用法（20例）

万、3983、あしひきの山も近きをほととぎす月立つまでに何か来鳴かぬ（奈仁加吉奈可奴）

万、767、都路を遠みか妹が（遠哉妹之）このころは折ひて宿れど夢に見え来ぬ（夢尔不所見来）

万、583、つき草の移ろひやすく思へかも（念可母）わが思ふ人の言も告げ来ぬ（事毛告不来）

「～や（は・も）～ぬ」の用法（10例）

万、892、…天地は 広しといへど 吾が為は 狭くやなりぬる 日月は 明しといへど 吾が為は 照りや給はぬ（照哉多麻波奴）…

万、1783、松反りしひてあれやは（四臂而有八羽）三栗の中上り来ぬ（中上不来）麻呂といふ奴

万、198、明日香川明日だに見むと思へやも（念八方）（一は云はく、思へかも）わご大君の御名忘れせぬ（御名忘世奴）

「～そ（も）～ぬ」の用法（8例）

万、1521、風雲は二つの岸に通へどもわが遠妻の言そ通はぬ（事曾不通）

万、3469、夕占にも今夜と告らるわが背なは何そも今夜（阿是曾母許与比）よし来まさぬ（与斯呂伎麻佐奴）

「～なも～ぬ」の用法（1例）

宣、31、今しきの間は念ひ見定めむに、天の授け賜はむ所は、漸々に現はれなむと念ひてなも定め賜はぬ（念天奈毛定不賜）と敕ふ御命を、諸聞き食へよと敕ふ²⁾

以上のように、係り結び的な「ぬ」と呼応する係助詞は「か(も)」「や(は・も)」「そ(も)」「なも」などが見られるが、これらの係助詞は、いずれも活用語の連体形で終止することを要求するものばかりである。その意味で、これらの「ぬ」の用法は実質的には一種の終止的な用法ではあるが、「ぬ」の活用形と言え、同じように連体形であると言わなければならない。終止形とは考えられない。

それでは、ナ行系統否定辞の「ぬ」には、曲調終止にならざる単純終止の用法が存在したのであるか、もし存在したならば、それはどんなものだったのであるか。

このことについては、佐竹昭広氏(1959)が「終止形にはヌという形があったと思われる」と指摘されたことがあり、後にこれを認める議論もしばしば見られる。³⁾

いわゆる単純終止の用法と認められ、或いは解釈される「ぬ」の用例としては、一般的に万葉集196、802、2012、2965、3423、3861、3865、4497などの8例がある。この中では、196番、3861番、3865番の三例の「ぬ」について、「ず」の異訓もあるので、ここでは例によって確例とはしない。残りの5例は以下のようなものである。

万、802、瓜食めば 子ども思ほゆ 粟食めば まして思はゆ 何処より 来り
しものそ 眼交に もとな懸りて 安眠し寝さぬ {夜周伊斯奈佐農}

万、2012、白玉の五百つ集ひを解きも見ず吾は離れかてぬ {吾者千可太奴} 逢は
む日待つに⁴⁾

万、2965、椽の裕の衣裏にせばわれ強ひめやも君が来まさぬ {君之不来座}

万、3423、上野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ {遊吉須宜可提奴} 妹が
家のあたり

万、4497、見むと言はば否と言はめや梅の花散り過ぐるまで君が来まさぬ {伎美
我伎麻左奴}

しかし、この五例をすべていわゆる単純終止、つまりナ行系統否定辞「ぬ」の終止形的な用法として認めてよいかとなると、やはりまだ問題があるようである。

まず、802番の歌を見よう。歌の中に助詞「そ」(「来りしものそ {積多利斯物能曾}」)が使われている。このような助詞「そ」の後句に、連体形で結ばれる用例はほかにも見られる。例えば、

万、724、朝髪の思ひ乱れてかくばかり汝姉が恋ふれそ {名姉之恋曾} 夢に見え
ける {夢尔所見家留}

万、2153、秋萩の咲きたる野辺はさ男鹿そ {左少壮鹿曾} 露を分けつつ妻問ひし
ける {嬬問四家類}

724番歌では「そ」が前句の「朝髪の思ひ乱れてかくばかり汝姉が恋ふれ」を受けて、更に後句の「夢に見えける」と連結する。そのように結ばれた前・後句の中に現れる主体となる「汝姉」は前句の「恋ふれ」の主体であると同時に、後句の「夢に見えける」主体でもあると考えられる。

2153番歌では、「そ」も同じように、前句の「秋萩の咲きたる野辺はさ男鹿」を受けて、更に後句の「露を分けつつ妻問ひしける」と連結する。「秋萩の咲きたる野辺は」を現代語訳にする時、「…には」や「…では」と場所格に訳さなければならないが、その「野辺」と「さ男鹿」との間が、助詞「は」によって結ばれている限り、一種広義の（論理を超えた）題述関係（乃至主述関係）が認められるであろう。つまり、作者が秋萩の咲いている野原を見渡した時に、そこに「さ男鹿」がいた。そこで作者はとりもなおさずこの二者を結び付けて表現した。更にその「さ男鹿」を観察すると、「露を踏み分け踏み分け、妻を求めている」のであった。その意味で、「さ男鹿」は前句の述語的な存在であると同時に後句の主語的な存在でもあると言えよう。

それでは、802番歌はこのような歌に準じて理解できないだろうか。「瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばまして思はゆ」によって話題にされた子供は「何処より来りしものそ」と不思議な気持ちをもって表現するのが歌の前半部分で、そして、その「何処より来りしもの」が私を「安眠し寝さぬ」と後半で歌っているのであろう。つまり「何処より来りしもの」はいわば前句の述語的な存在であると同時に、後句の主語的な存在でもあり得ると考えられる。最後の一句に「寝さぬ」と使役の表現になっているのもまさにその証拠と言えよう。このように見てくると、歌の末に現れる「ぬ」は連体止めの「ぬ」（或いは広義の係り結びの「ぬ」）と見て差し支えないと言えよう。

次に2965番の歌と4497番の歌を見ると、この二首の歌の中に助詞「や（も）」（2965番歌の「われ強ひめやも（吾將強八方）」、4497番歌の「否と言はめや（伊奈等伊波米也）」）が使われており、従って、文末に使われた「君が来まさぬ」は、やはり同じように連体止めの形か広義の係り結びとしての「ぬ」と見るべきであろう。

上の三例を除くと、残るのは2012番歌と3423番歌の二例である。⁵⁾

この二例には連体止めの形とよく呼応する助詞が見られず、特に2012番歌では「吾は離れかてぬ（吾者干可太奴）」と使われており、語法上においても絶対に連体形とは考えられないので、「ぬ」の単純終止用法の確例と見てよいであろう。⁶⁾

ところで、この単純終止と認められる二例を見ると、そこにある種の共通する特徴が看取される。つまり、この二例とも「～かてぬ」というように使われているのである。そこで、当然ながらすぐに思い出されるのは、第一章で「に」を考察した時に、「～かてに」の用例が「知らに」に次いで多く存在することである。終止的な「ぬ」と考えられそうなほかの用例が、いずれも何らかの形で連体止めや広義の係り結び的な存在と認められるのに対して、この「かつ」という補助動詞に付いて使われる「ぬ」のみ、純然たる終止用法となることは、「かてに」の用法も多く存在することと関連して考えれば、「かつ」という補助動詞とナ行系統否定辞との親密性を示唆すると同時に、ナ行系統否定辞の「ぬ」の終止形としての用法の特殊性をも暗示しているのではなかろうか。

以上、本章において、ナ行系統否定辞の「ぬ」の終止的な用法を考察してきた。その中で見られた係り結びになる用法は、他の活用語に準じて考えれば連体形の用法であり、後世の否定助動詞の連体形におさまる「ぬ」に見られる係り結び的な用法とあまり変わらないものである。それに対して、「～かてぬ」という単純終止用法の確例が存在する事実が認められ、上代において、「ぬ」の形がナ行系統否定辞の連体形であると同時に終止形である性質も備えていたと考えられる。このことによって、ナ行系統否定辞が本来ザ行系統否定辞と相異なるものとして存在したことが、もう一つの側面から積極的に示されているのであろう。

しかし、その終止形が純然たる終止法に使われるのは「～かてぬ」という特殊な場合に限られており、あまりにも非一般的であり、しかも数的にも僅かにしか見られなかったのである。このように、「ぬ」の単純終止の終止的用法が非常に珍しく、つまり非一般的にしか存在しないという事実は、ナ行系統否定辞が持っている、ザ行系統否定辞と相異なる性質の一面を物語っているのであろう。

注：

- 1、ナ行系統否定辞の形式に「な」が見られるのは「なく（に）」の表現だけである。しかし、周知のように、この「なく（に）」にある「な」は結局連体形の変形であり、未然形に擬せられるような「な」ではないのである。
- 2、金子氏『続日本紀宣命講』では、「念ひてなも定め賜はず」と訓んでいるが、ここでは北川氏の訓みに従っている。
- 3、このことについて実例を挙げて説明するものには佐竹昭広氏「上代の文法」（1959、後掲参考文献85）、吉田金彦氏『上代語助動詞の史的研究』（1973、後掲参考文献197）などがある。本稿で取り扱っている用例は上述の文献などが扱うものと、一般の注釈書がそう見ているものなどである。その選択は小路一光氏『万葉集助動詞の研究』（1980、後掲参考文献72）に負うところが大きい。
- 4、『日本古典文学全集万葉集』によれば、「太」の字を「て」と訓む例は、ほかに万葉集2903番歌「いとのかきて〔五十殿寸太〕」、万葉集1214番歌「足代へ行く〔安太部去〕」などがあると言う。
- 5、3423番の「行き過ぎかてぬ」の後に「妹が家あたり」という体言節があるために、連体形説で解釈される注釈もあるが、本稿では「ぬ」で切れる終止形説の注釈に従った。
- 6、この例について、語法上に見ても、連体形と見られず、紛れもなく終止形であることは、澤瀉久孝氏が『万葉集注釈』において指摘されている。

第三章、「ぬか（も）」の表現について¹⁾

ナ行系統否定辞の「ぬ」の形にかかわる表現として、ほかに「ぬか（も）」の表現がある。この表現に関する考察は、上代におけるナ行系統否定辞の性質を知ることによって、非常に重要なことであると思われる。

「～ぬか（も）」の表現には、「希求」を表す「ぬか（も）」と「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の両方があった。この二つの「ぬか（も）」の成り立ちについては、いわゆる否定にかかわる助動詞「ぬ」（本稿の言うナ行系統否定辞の「ぬ」）プラス終助詞「か（も）」であるということが一般に認められているようである。²⁾ それを出発点として、この両表現においては、「否定的な詠嘆」の方がより根源的なものであり、「無いことについて詠嘆する」というはかない「嘆き」から、「いまだ無いことを実現してほしい」という「希求」が生まれてくるのだという考え方が打ち出されている。³⁾ しかし、このような考え方は、果たして両表現の真実をついているのであろうか。文献に現れている言語事実を調べると分かるように、「ぬか（も）」の表現において、「否定的な詠嘆」と「希求」という両者の意味は、一方が前面に出れば、もう一方が退くというような関係で、決して並行するようなものではない。してみると、両者の関係は、一方が下敷きになって、もう一方がそこから派生してきたようなものではないように考えられる。しかも、両表現の違いは単に意味解釈だけのものではなく、もっと文的環境や文型的な特徴として、はっきり見られるのである。本章において、この両表現の置かれる違った文的環境及び文型的な特徴を追究し、両表現の違いをいっそう明らかにしてゆきたいと思う。

一、否定的な詠嘆を表す「ぬかも」

「否定的な詠嘆」と解釈される「ぬかも」の用例は、万葉集から59例、日本書紀歌謡から1例、合計60例が得られる。その中に1例異訓のあるものを除くほか、⁴⁾ 残り59例の確かなものは、万葉集の巻14、16、18、19を除いた他のすべての巻に現れ、万葉集の時代に一般的に使われた表現形式と考えられよう。

この59例の中では、「不…鴨・不…可聞・不…香聞・不…覺・不…香裳・不…可母・不…鹿裳・未…可母」などのように正訓字「不」や「未」で「ぬ」を表記したものが45例で、全体の約76%を占め、「奴可母・努可毛・奴香母・奴鴨・奴加毛・奴香聞・努介茂」などのように万葉仮名で「ぬ」を表記したものが14例で、全体の約24%を占めている。

このように表記されている「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の表現としての現れ方については、次のような大きな特徴が指摘できる。

第一に、ほとんどの用例は、短歌の場合第五句、長歌の場合その末句に現れているということである。そうでないものは次の二例しかない。

紀、4、沖つ藻は辺には寄れどもさ寝床も与はぬかもよ {阿党播怒介茂誉} 浜つ
千鳥よ

万、885、朝霧の消易きあが身他国に過ぎかてぬかも {須疑加豆奴可母} 親の目
を欲り

しかも、この二首の歌では、日本書紀歌謡4番の歌は、最後に呼格の「浜つ千鳥よ」が
つけ加えられているだけであるから、ある意味では、やはり「ぬかも」が歌の末に位置し
ていると言えよう。そして、万葉集885番歌の末句「親の目を欲り」も補足的な表現に過
ぎず、歌の意味から見ると、第四句で切れているのである。

このことは、後に見る「希求」を表す「ぬか(も)」の表現に、第五句と末句以外の句
に位置するものがかなり多くあることと対照をなしている。考えてみれば、「詠嘆」とい
う表現は、話者のしみじみとした気持ちがこめられたもので、さまざまな感情がそこで集
中され、もうそれ以上何も言えないというようなものが多い。「否定的な詠嘆」を表す「
ぬかも」が圧倒的に多く末句に位置することも、こういった詠嘆表現の性質と関係がある
と思われる。

第二に、内容的に吟味すると、これらのものは、いずれも話者自身が経験し、或いは直
面している、ある否定的なことがらに対する詠嘆であり、その「話者自身」が「われ」な
どのような言葉として歌の中に顔を出すこともしばしばある。例えば、

万、1127、落ち激つ走井水の清くあれば措きてはわれは {癡者吾者} 去きかてぬ
かも {去不勝可聞}

万、3256、しくしくに思はず人はあるらめどしましもわれは {蹇文吾者} 忘れぬ
ぬかも {忘枝沼鴨}

第三に、話者が詠嘆する対象となることがらは、大きく二つのパターンに分類できる。
一つは、話者自身が何かが出来ないという状態をしみじみと嘆くものである。

万、2698、行きて見て来ては恋しき朝香湯山越しに置いて寝ねかてぬかも {宿不
勝鴨}

万、3159、湖廻に満ち来る潮のいや益しに恋はまされど忘れぬかも {不所忘鴨}
もう一つは、詠嘆的な気持ちをこめて何かを讃めたたえる讃美的な常套句である。

万、36、…水激つ 滝の都は 見れど飽かぬかも {見礼跡不飽可聞}

万、2159、影草の生ひたる屋前の夕影に鳴く蟋蟀は聞けど飽かぬかも {雖聞不足
可聞}

もちろん、後者の常套句的な讃美は、前者の「何かが出来ない」ということへの詠嘆か
らの延長として発生したもので、「いくら見ても満足できない、いくら聞いても満足でき
ない」という意味から「それほど素晴らしいものだなあ」という讃美的な意味に転じたも
のであると考えられよう。従って、「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の表現は、基本的
に話者自身があることに直面し、何かが出来ないという状態を、しみじみとした気持ちで

詠嘆するものであると言えよう。

このような性質を持った「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の表現には、更に次のような三つの文型的な特徴が看取される。

(a)、述語に可能の意味を表す要素が含まれているもの（「～かてぬかも」「～えぬかも」「～あへぬかも」の例23例）。

万、186、一日には千たび参りし東の大き御門を入りかてぬかも〔入不勝鴨〕

万、4356、わが母の袖もち撫でてわが故に泣きし心を忘らえぬかも〔和須良延努可毛〕

万、3329、…大船の ゆくらゆくらに 思ひつつ わが寝る夜らは 数みも敢へぬかも〔数物不敢鴨〕

このように可能の意味を表す要素が含まれているものは、直接的に「…できないことだなあ」「…られないことよ」というような意味が表現されており、このことは前述した「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の持つ「何かが出来ないことに対する詠嘆」という表現性質と関連すると思われる。

(b)、逆接の条件句が含まれるもの（「～ど（も）～ぬかも」の例39例）。

万、65、あられ打つあられ松原住吉の弟日娘と見れど飽かぬかも〔見礼常不飽香聞〕

万、148、青旗の木幡の上をかよふとは目には見れども〔目尔者雖視〕直に逢はぬかも〔直尔不相香裳〕

この39例中、大部分（25例）が万葉集65番歌のように、讚美的な常套句として使われている。話者が、自分の讚嘆がなみたいていのものではないということを示すために、単に「…しないことよ」という形では満足せず、「…しても…しないことよ」という形にしたのであろう。その効果と同じように、148番歌のように使われると、「目には見れども」という逆接的な前件と対照させることによって、後件の「直に逢はぬかも」の詠嘆の気持ちがいっそう増大されているのであろう。

(c)、原因・理由を表す条件句が含まれるもの（「～用言已然形+ば～ぬかも」「～形容詞語幹+み～ぬかも」の例11例）。

万、2536、息の緒に妹をし思へば〔妹乎思念者〕年月の行くらむ別も思ほえぬかも〔不所念覺〕

万、2895、人言を繁み言痛み〔繁三言痛三〕吾妹子に去にし月よりいまだ逢はぬかも〔未相可聞〕

(b)のような前件の逆接的なことがらと対照させて、詠嘆の気持ちを増大させる手法と違って、(c)では、詠嘆の気持ちを起こさせる原因・理由が示され、「…するので…しないことよ」というふうに、詠嘆の気持ちが正当化される。

以上に挙げた(a)、(b)、(c)三つの文型的な特徴は、一首の歌につき一つだけ備えているも

のもあれば、一首に二つの特徴が重なって現れるものもあり、また、次のような一首の中に三つの特徴が同時に見られるようなものもある。

万、607、皆人を寝よとの鐘は打つなれど〔打奈礼杼〕君をし思へば〔君乎之念者〕寝ねかてぬかも〔寢不勝鴨〕

「皆の人が寝よとの鐘を打つ音が聞こえるけれども、君のことを思っているので、なかなか寝つかれないことよ」と詠み手の詠嘆の感情が満ち溢れており、読む者の心がよりいっそう打たれるのであろう。

分析対象になった59例の中に、以上の三つの文型的な特徴を備えていないものは万葉集2286番の一例だけである。それについて、以下(d)の特徴の中で解決を見よう。

「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の用例には、以上のような文型的な特徴が備わっているほかに、もう一つ(d)とする大きな特徴が注目されるべきだと思う。

つまりこれらの用例においては、文中に話者自身の事が主体として示される万葉集885番、1127番、3256番の三例と主体も対象も示されていない9例⁵⁾のほかに、大多数のもの(47例)に動作の対象が文中に示されているのである。このことはまた後に見る「希求」を表す「ぬか(も)」の、文中に第三者的な主体が提示されていることと対照をなす。

万、909、山高み白木綿花に落ち激つ滝の河内は〔瀧之河内者〕見れど飽かぬかも〔雖見不飽香聞〕

(「見る」の対象である「河内」は助詞「は」によって示される)

万、1413、庭つ鳥鷄の垂尾の乱尾の長き心も〔長心毛〕思ほえぬかも〔不所念鴨〕

(「思ほゆ」の対象である「長き心」は助詞「も」によって示される)

万、1190、舟泊てて戕舸振り立てて盧せむ名子江の浜辺〔名子江乃濱邊〕過ぎかてぬかも〔過不勝鳧〕

(「過ぐ」の対象である「浜辺」は「徒」の形で示される)

万、2910、心には千重に百重に思へれど人目を多み妹に逢はぬかも〔妹尔不相可母〕

(「逢ふ」の対象である「妹」は助詞「に」によって示される)

万、4407、ひなくもり碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく〔伊毛賀古比之久〕忘らえぬかも〔和須良延奴可母〕

(「恋しく(思う)」の対象である「妹」は助詞「が」によって示される)

以上の事実から見ると、「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の表現においては、その動作にかかわる対象が表現の中心になるということが言えよう。ここで、先ほど触れた(a)、(b)、(c)の文型的な特徴のいずれも看取されない一例を取り上げてみよう。

万、2286、わが屋戸に咲きし秋萩散り過ぎて実になるまでに君に逢はぬかも〔於君不相鴨〕

この歌においては、話者の「逢ふ」対象である「君」が、助詞「に」によって示されて

表現の中心に据えられており、つまり上に示した(d)の特徴が看取されるのだから、この歌は、やはり話者がその「君」に「逢えない」ことを詠嘆する表現であり、言い換えると、そこに使われている「ぬかも」は「否定的な詠嘆」を表すものと解釈されるべきであろう。⁶⁾

以上で、「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」表現の文的環境及び文型的な特徴が尽くされていると思うが、これらの特徴はいずれも次に見る「希求」を表す「ぬか(も)」に見られないものである。

二、希求を表す「ぬか(も)」

「希求」と解釈される、「ぬか」の用例は万葉集から28例が得られ、「ぬかも」の用例は万葉集から30例、風土記歌謡から1例が得られる。この中、「ぬか」の28例中に5例、「ぬかも」の31例中に3例に異訓があり、確例とは言えない。⁷⁾このような異訓のある用例を除けば、「希求」と解釈される「ぬか(も)」の用例は凡そ51例ほどある。これを万葉集で見ると、巻1、9、17、20以外の各巻に現れ、やはり万葉時代に一般に行われていた表現形式と言えよう。

「ぬか」の方が「奴可・粳・奴香・額・奴賀・寐鹿」などのように、「ぬかも」の方が「奴鴨・奴香聞・奴可毛・沼鴨・濃香聞・奴香裳・奴可母・奴香文・奴可聞・奴賀母・粳毛」などのように万葉仮名で表記されているほかに、「ぬか」の用例に2例(万、1954、2513)、「ぬかも」の用例に9例(万335、1287、1953、2029、2366、2384、2387、2585、2593)が、「ぬ」が無表記で読み添えになっているものがある。⁸⁾

「希求」と解釈される「ぬか(も)」の表現の、歌の中における位置を見ると、「ぬか」23例中、短歌第五句に現れる6例(26%)に対して、第二句に現れるもの9例、第四句に現れるもの8例(両方合わせると74%)あり、⁹⁾「ぬかも」28例中、短歌第五句に現れる18例と長歌末句に現れる4例(両方合わせると78%)に対して、第三句に現れるもの5例(うち旋頭歌2例)、長歌の途中に現れるもの1例(両方合わせると22%)ある。つまり先に見た「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」が必ず歌の末尾に置かれていることとはやや違った様相を呈していると言える。

内容的に見ると、これらの歌において、「ぬか(も)」によって希求されていることは、いずれも自然や動・植物のことか、さもなければ、常識的には実現不可能と思われるようなことがらである。あまり多くない人間にすることがらへの希求は、その希求対象はいずれも第三者的な存在として表現されている。例えば、

(自然現象に対する希求)

万、520、ひさかたの雨も降らぬか(雨毛落粳)雨つつみ君に副ひてこの日暮ら
さむ

(動物に対する希求)

万、1954、霍公鳥来居も鳴かぬか〔来居裳鳴香〕わが屋前の花橋の地に落ちむ見む

(植物に対する希求)

万、1973、吾妹子に棟の花は散り過ぎず今咲ける如ありこせぬかも〔有与奴香聞〕

(第三者的な存在の人に対する希求)

万、1019、石の上 布留の尊は …… 大君の 命恐み 天離る 夷辺に退る

古衣 又打の山ゆ 還り来ぬかも〔還来奴香聞〕

これらの希求内容を通観してみると、話者は未来や外におけるある事態の成立を希求しているのだと分かる。換言すれば、「ぬか(も)」が表している「希求」は、いわば話者の非体験的な時間、或いは空間におけるあることからの存在・実現への希求であると考えられる。

以上の性質と関連しているからだろうか、「希求」を表す「ぬか(も)」の上接用言には一つの大きな特徴が見られるのである。つまり、自然や動・植物に対する希求が多いために、その表現となる「降る・吹く・照る・明く・鳴く・咲く」などのような動詞が多く現れるのは当然でありながら、更に「あり」という用言が上接されるものが圧倒的に多いのである。¹⁰⁾ 例えば、

万、525、佐保河の小石ふみ渡りぬばたまの黒馬の来る夜は年にもあらぬか〔年尔母有糶〕

万、335、わが行きは久にはあらじ夢のわだ瀬にはあらずて淵にあらぬかも〔淵有加毛〕¹¹⁾

それに「あり」にかかわる「常にあり」(2例)「常なり」(1例)も入れれば、実に21例もあり、「希求」を表す「ぬか(も)」用例の全体の41%、すなわち半分近く占めているのである。このことは、おそらく「ぬか(も)」が表している「希求」が、一面において話者の非体験的な空間におけるあることからの存在に対する希求である、ということと関連するものと思われる。

次に「希求」を表す「ぬか(も)」の幾つかの文型的な特徴を見てみよう。

(a)、二文構成の歌の末に「む」が使われているもの(13例)。

万、2513、雷神も少し動みてさし曇り雨も降らぬか〔雨零耶〕君を留めむ〔君将留〕

万、3651、ぬばたまの夜渡る月は早も出でぬかも〔波夜毛伊豆奴香文〕海原の八十島の上ゆ妹があたり見む〔伊毛我安多里見牟〕

この事実は早くから注目され、「む」は、希求事項が実現した時に、話者が執ろうとする態度を表明する役割を果たすのだと指摘されている。¹²⁾ 同時に、この後句に共存する「む」を通して、話者の希求することがらは、話者の非体験的な時間、つまり未来におけ

るあることからの実現への希求であるということも見て取れるだろう。そうすると、このような文末の「む」だけでなく、後句に現れる「むため」はもちろんのこと、助動詞「べし」、目的や指定の目標を表す助詞「に」、或いは文中に現れる連体的な「む」なども、それに似たような役割を果たしていると考えられるのではなかろうか（9例）。

万、332、わが命も常にあらぬか（常有奴可）昔見し象の小河を行きて見むため
（行見為）

万、1887、春日なる三笠の山に月も出でぬかも（月母出奴可母）佐紀山に咲ける桜の花の見ゆべく（花乃可見）

万、4123、この見ゆる雲ほびこりてとの曇り雨も降らぬか（安米毛布良奴可）心足ひに（己許呂太良比尔）

万、1223、海の底沖漕ぐ舟を辺に寄せむ（於邊将因）風も吹かぬか（風毛吹額）
波立てずして

また、二文構成で、「ぬか（も）」が後句に現れる場合、当然これらの要素を前句に見出すこともできる。

万、1077、ぬばたまの夜渡る月をとどめむに（将留尔）西の山辺に閑もあらぬかも（塞毛有粳毛）

(b)、「はや」「また」「いま」などの副詞や「百歳」「千世」などのような長期間を意味する名詞が使われるもの（20例）。

万、1374、闇の夜は苦しきものを何時しかとわが待つ月も早も照らぬか（早毛照奴賀）

万、2057、月かさねわが思ふ妹に逢へる夜は今し七夜を（今之七夕）続きこせぬかも（続巨勢奴鴨）

万、4232、雪の山齋巖に植ゑたる石竹花は千世に咲かぬか（千世尔開奴可）君が挿頭に

万、1025、奥まへてわれを思へるわが背子は千年五百歳（千歳五百歳）有りこせぬかも（有巨勢奴香聞）

特に一文構成の歌の中では、これらの副詞や名詞は、未来に眼を向けている話者の希求を表す上で、極めて効果的な役割を果たしていると考えられる。

(c)、「未然形+ば」や「～く」のような補助動詞が使われるもの（4例）。¹³⁾

万、4044、浜辺よりわがうち行かば（和我字知由可波）海辺より迎へも来ぬか（牟可倍母許奴可）海人の釣舟

万、3867、沖つ鳥鴨とふ船は也良の崎廻みて漕ぎ来と聞え来ぬかも（所聞許奴可聞）

4044番歌の「未然形+ば」の使い方は、前件のことがらが行われたら、後件のことからの実現を希求するという表現の仕組みによるものであろう。

前節「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の文型的な特徴を考察した時、特徴(c)として「～用言已然形+ば～ぬかも」の形式が見られた。その特徴が、いまここに見る「未然形+ば」と対照をなしているのであろう。つまり「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」は已然的なことと共存しやすく、「希求」を表す「ぬか(も)」は未然的なことと共存しやすい、という相違が現れているのであろう。

3867番歌の「～く」という補助動詞も、ことがらがやがて自分の方にやってくるという意味になり、やはり話者の非体験的な時間におけることがらの存在・実現希望ということと関連するのであろう。

以上のように、「希求」を表す「ぬか(も)」の表現には、話者の非体験的な時間・空間と結びつけられる述語的な特徴と文型的な特徴が見られた。特に、(a)、(b)、(c)に見られる文型的な特徴と関連してみれば、「ぬか(も)」が表す希求は「未来指向」の希求であると言えよう。

このほかに、「希求」を表す「ぬか(も)」の表現にはもう一つ(d)とする特徴が看取される。

それは、希求されることがらの主体と考えられるものがいずれも「は」「も」「徒」の形で文中に提示されていることである。¹⁴⁾

万、1591、黄葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今夜は{遊今夜者}明けずもあらぬか{不開毛有奴香}

万、1616、朝ごとにわが見る屋戸の瞿麦が花にも君は{花尔毛君波}ありこせぬかも{有許世奴香裳}

(主体である「今夜」や「君」は助詞「は」で提示される)

万、1642、たな霧らひ雪も降らぬか{雪毛零奴可}梅の花咲かぬが代に擬へてだに見む

万、2384、わが背子は幸く坐すと遍く来てわれに告げ来む人も来ぬかも{人来鴨}

(主体である「雪」や「告げ来む人」は助詞「も」で提示される)

万、4067、二上の山に隠れるほととぎす{保等登藝須}今も鳴かぬか{伊麻母奈加奴香}君に聞かせむ

万、2585、かくしつつわが待つしるし{吾待印}あらぬかも{有鴨}世の人皆の常ならなくに

(主体である「ほととぎす」や「待つしるし」は「徒」の形で提示される)

以上の歌が示しているように、これらの主体は、いずれも第三者的な存在として現れている。そうすると、「ぬか(も)」の表す希求は、話者の非体験的な時間或いは空間における、第三者的な存在を中心とするあることがらの実現に対する希求であると言えることが出来よう。

だとすれば、前述の述語的な特徴と文型的な特徴(a)、(b)、(c)のいずれも見られない万葉

集2366番と3558番の歌、

万、2366、真澄鏡見しかと思ふ妹も逢はぬかも（妹相可聞） 玉の緒の絶えたる
恋の繁きこのころ

万、3558、逢はずして行かば惜しけむ麻久良我の許我漕ぐ船に君も逢はぬかも（
伎美毛安波奴可毛）

の中の「逢はぬかも」は、やはり「希求」を表す表現であると主張すべきである。「逢ふ」という動詞は「私が人に逢ふ」と「人が私に逢ふ」のどちらにも使われる。この二首の歌の中で、「妹」と「君」は話者の「逢ふ」対象として立てられているのではなく（「に」が使われていない）、「私に逢ってくれる」主体として提示されているのである（「も」が使われている）。このような「妹も逢はぬかも」「君も逢はぬかも」は、

万、1287、青みづら依網の原に人も逢はぬかも（人相鴨） 石走る淡海島の物が
たりせむ

の中の「人も逢はぬかも」の「人も」と同じで、やはり第三者的な存在として考えられる。従って、この二つの「逢はぬかも」もやはり「希求」の表現として解釈されるべきであろう。

以上で、「希求」を表す「ぬか（も）」表現の文的環境及び文型的な特徴が尽くされていると思うが、これらの特徴はいずれも前に見た「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」に見られないものである。

三、希求を表す「なむ」と関連して

前節において考察した「希求」を表す「ぬか（も）」の諸特徴はいかなる意義を持つかを見るために、「希求」の意を持つとされる「なむ」と関連して考察する必要があると思う。¹⁵⁾

上代日本語には、「希求」の表現形式として、もう一つ「～なむ」の形があった。

万、18、三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなむ（情有南畝）隠さふべしや¹⁶⁾

このような「希求」と解釈される「なむ」の用例は万葉集から25例（その内異訓のあるものは5例、確例が20例）が得られ、万葉集巻1、2、7、8、9、10、11、12、13、14、16、19、20の各巻に分布している。数的にも或いは分布の状況からしても、上代においては「希求」を表す「ぬか（も）」よりやや少なめになるが、やはり一般的な表現と言えよう。

内容的に見ると、「なむ」の希求対象となることからもやはり「ぬか（も）」による希求と似ていて、いずれも自然や動・植物への希求か、さもなければ、常識的には実現不可能と思われることがらである。例えば、

（自然現象に対する希求）

万、1072、明日の夕照らむ月夜は片よりに今夜に寄りて夜長くあらなむ〔夜長有〕
〔植物に対する希求〕

万、1212、足代過ぎて糸鹿の山の桜花散らずあらなむ〔不散在南〕還り来るまで
〔実現不可能なことがらへの希求〕

万、1766、吾妹子は釧にあらなむ〔久志呂尔有奈武〕左手のわが奥の手に纏きて
去なましを

こうして見ると、「なむ」で表す「希求」と「ぬか（も）」で表す「希求」とが非常に
近似しているということが分かる。では、両者が全く同じなのかと言えそうではないの
である。このことについて、木下正俊氏（1974）が、

万、3788、耳無の池し恨めし吾妹子が来つつ潜かば水は濁れなむ〔水波将濁〕
という歌に注目して、この「水は濁れなむ」は、

「過去の事実の裏返し、いうなれば後ろ向きの希求（？）」
であり、その意味は

「『濁れてくれよ』と言っては正確でなく、古典大系本の〔大意〕のように『濁れて
くれたらよかったのに』と言うほうが分かりよく、過去の事実の反対の場合を仮想し、
そうしてくれなかったこと、そうでなかったことを恨む気持ちがあるようである」
と述べ、「なむ」には、「ぬか（も）」の形からなる希求表現が持っていない「反事実性」
が見られるのだと指摘された。¹⁷⁾

木下氏のこの指摘は当を得ていると思われ、「希求」を表す「なむ」を使った歌には次
のような文型的な特徴が見られる。

(a)、「べしや」と共に現れること（5例）

万、1998、わが恋ふる妻はいや遠く行く船の過ぎて来べしや〔過而應来哉〕言も
告げなむ〔事毛告火〕

(b)、「ましを」と共に現れること（2例）

万、2260、吾妹子は衣にあらなむ〔衣丹有南〕秋風の寒きこのころ下に着ましを
〔下着益乎〕

この二つの特徴から見て、「なむ」は一種「反実仮想性」を帯びていると言えよう。¹⁸⁾
この(a)、(b)と関連して、次の(c)、(d)も、「なむ」が反実仮想性を持っているということの
傍証になるであろう。

(c)、「べきものか」と共に現れること（1例）

万、1402、こと放けば沖ゆ放けなむ〔奥従酒嘗〕湊より辺着かふ時に放くべきも
のか〔可放鬼香〕

(d)、「めやも」と共に現れること（1例）

万、1254、大船に楫しもあらなむ〔楫之母有奈牟〕君無しに潜せめやも〔潜為八
方〕波立たずとも¹⁹⁾

このように見てくると、「希求」を表す「なむ」の意味は、恐らく木下氏が指摘したように「そうしてくれなかったこと、そうでなかったことを恨む気持ち」から出ている「希求の意」と考えられよう。このような意味で、上代に見られる「なむ」を使った歌を解釈すると、15例（確例の75%を占める）がそのように解釈でき、そうでないものは5例にとどまる。その5例とは、前掲した万葉集1072番と1212番のほかに、以下のような3例がある。

万、2962、白栲の袖離れて寝るぬばたまの今夜ははやも明けば明けなむ（明者將開）

万、4437、ほととぎすなほも鳴かなむ（奈保毛奈賀那牟）もとつ人かけつつもとな吾をねし泣くも

万、4495、うちなびく春ともしるくうぐひすは植木の木間を鳴き渡らなむ（奈枳和多良奈牟）

この5例のものは、反事実というよりはむしろ未来指向のものとして解釈される。そして1072番歌に文中の「照らむ（將照）」、2962番歌に「はやも（早毛）」、4437番歌に「なほも（奈保毛）」などの表現と共起する現象が見られるということもそれを物語っていると思われる。ところで、これらのものは数量的にも少ないし、時期的にも万葉後期のものばかりである（4437番は天平勝宝7年〈西暦755年〉のもので、4495番は天平宝字2年〈同758年〉のものである。他の3例は雑歌と相聞の部類で時期や作者が不明である）。特に中古以降の「なむ」がすべて未来指向性を持っていることと関連すれば、これは「なむ」自身の中の一つの変化として見てよいのであろう。²⁰⁾ してみると、反事実性という意味特性は、やはり上代の「なむ」の本来の意味だと考えられよう。

以上のように、上代における「希求」を表す「なむ」の大多数が持っている(a)、(b)、(c)、(d)の四つの特徴は、いずれも上代における「希求」を表す「ぬか（も）」には見られないものであり、また「ぬか（も）」の表現に見られる「む・べく」などとの共起現象とは対照をなすものであろう。こうして見ると、上代においては「なむ」と「ぬか（も）」にはやはり相違が存在していた希求表現であると言わなければならない。同時に、第二節で見た「希求」を表す「ぬか（も）」の表現において看取された様々な文型的な特徴及び未来指向の性質などは、決して希求表現一般のものとして考えるのではなく、やはり「希求」を表す「ぬか（も）」の特徴であると見るべきであろう。

以上、本章において、ナ行系統否定辞の「ぬ」にかかわる「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の表現と「希求」を表す「ぬか（も）」の表現における文環境的な相違及び文型的な特徴の違いを見てきた。両表現の意味が一方前面に出れば、もう一方退くという関係と同じように、一方に見られる文環境的な特徴及び文型的な特徴は、もう一方の表現においては見られない。

このような関係にある二つの表現について、恐らく二通りの考え方が可能であろう。一つは、両表現は全然無関係なもので、全く違うものが全く違う環境と条件を必要とするのは当たり前であるという考え方であり、また他の一つは、基本的に同じ成り立ちのものが、違う環境と条件に置かれることによって、結局違う表現になってしまったというような考え方である。²¹⁾ 「ぬか(も)」の表現に関しては、「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」も「希求」を表す「ぬか(も)」もナ行系統否定辞の「ぬ」プラス「か(も)」であると認められる限り、おそらく後者の考え方のほうが適当ではないかと思う。しかし、一旦成立した両表現としては、やはり別々なものと見るべきで、一方が下敷きになって、他方が派生するというふうには考えてはいけないであろう。

そして、ここでなおさら注目すべきことは、上代において、ナ行系統否定辞の「ぬ」(否定の意をベースに持つもの)が助詞「か(も)」(主に疑問表現と関連するもの)と一緒になった場合、「否定的な詠嘆」か「希求」かのどちらかの表現になることである。これは、第二編で考察するザ行系統否定辞の「ず」(否定の意をベースに持つもの)が助詞「や(も)」(主に疑問表現と関連するもの)と一緒になった場合、「反語」か「他に対する質問」かのどちらかの表現になることとは大きく違うところであろう。もちろん、その中に助詞「か」と助詞「や」の性質の相違も関連していると思うが、どちらの表現においても、助詞「か」や「や」のほかに、否定辞も大きな役割を果たしているということを考えれば、やはり上代におけるナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の相違の一つとして、もっと重視すべきであろうと考えられる。また、平安時代以後、「ぬか(な)」(「ぬか(も)」の変化)の形が「希求」の意を表すことが見られなくなったことも、上代におけるナ行系統否定辞の特質を端的に示しているのであろう。²²⁾

注：

1、本章第一、二節の主な内容は、1987年国語学会春季大会において口頭発表をし、それを修正し、まとめたものは「『ぬかも』の表現について」と題して、『国文論叢』15号(神戸大学、1988)に発表した。修正に際して、二種の「ぬか(も)」の諸特徴を考慮する点において、京都大学川端善明先生に様々なご教示とご批判をいただいた。なお、本稿において更に手を加えたのである。

2、特に「希求」の「ぬか(も)」は既に独立した終助詞乃至助動詞だという説を取る人でも、語源的にはやはり「否定」の「ぬ」プラス「か(も)」と認められている。後掲参考文献134と197などを参照されたい。

3、浜田敦氏（1948、後掲参考文献134）の論文など参照。

4、その1例は万葉集1792番の歌で、

万、1792、…真澄鏡 直目に見ねば 下ひ山 下ゆく水の 上に出でず わが思
ふ情 安虚歟毛

この「安虚歟毛」については、「安からぬかも」の訓のほかに「やすきそらかも」という異訓もある。「安かり」というようなカリ活用の用言が他の「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の用例に見られないもので、上の「やすきそらかも」という訓が有力のように思われる。

5、その9例は万葉集148、149、204、496 1332、2698、2699、3193、3326などである。

6、その傍証として、明らかに否定的な詠嘆と解釈され、しかも前述の文型的な特徴が看取される用例で、万葉集2910番と2932番の「妹に逢はぬかも」などが見られる。

7、異訓があるからといって、「希求」を表す「ぬか（も）」の用例に入れてはいけないというわけではない。確例から得られた特徴と条件に基づいて、それに合ったものは「ぬか（も）」の訓に従った方がよいけれども、それに合わないものは、他の訓に従った方がよいかと思う。

8、希求の「ぬか（も）」に、打消・否定表現の表記によく使われる「不」などで表記されるものがないという事実は早くから本居宣長によって指摘され、「ぬか（も）」を論じる時にたびたび触れられる問題である。しかし、だからといって「希求」を表す「ぬか（も）」の「ぬ」がいわゆる否定にかかわる「ぬ」とは全く無関係だということにもならないと思う。

9、「希求」の「ぬか」が使われる歌は、第二、四句切れのものが多いという指摘は吉田金彦氏『上代語助動詞の史的研究』（1973、後掲参考文献197）にも見られる。

10、「希求」を表す「ぬか」の上接用言に「あり」が多いということは、吉田金彦氏『上代語助動詞の史的研究』（1973）にも指摘されている。

11、この歌の最後の一句を「淵有乞」と取り、「淵に（し）ありこそ」と訓む説もある。本稿は中西進氏の訓みに従った。

12、この事実を最初に指摘したのは佐竹昭広氏である。詳しいことは佐竹氏「上代の文法」（1959、後掲参考文献85）を参照されたい。

13、特徴④は、内容的に細かく二つに分けるべきかも知れないが、用例が少ないので、一括しておいた。

14、主体が示されていない用例は僅か4例（歌として三首、万葉集1953、3867、3875）である。その中の1953番歌は、「ぬか（も）」の句にこそ主体は提示されていないが、前句の中で呼格としてあがっている。

15、「なむ」の発生をいわゆる否定の助動詞（本稿の言うナ行系統否定辞）「ぬ」と関連させて解釈する説（例えば、浜田敦氏、山口佳紀氏など、後掲参考文献134と173を参照）

があることと、平安時代以降「なむ」が「ぬか(も)」(希求)に取って代わることなどを考えれば、両者の関連性や異同を究明することはやはりとても重要なことであろう。

16、この歌の「情有南畝」は「情あらかなも」とも訓まれる。「希求」と解釈される「なも」は、「なむ」の変化と見て本稿は一緒に扱うことにした。なお「ナモ」が「ナム」から変化したものと指摘する論文は山口佳紀氏「上代希望表現形式の成立—ナ行系希望辞をめぐって—」(1981、後掲参考文献173)がある。

17、木下正俊氏「終助詞『なむ』の反事実性」(1974、後掲参考文献63)による。引用中の(?)は原文のものである。

18、注17の文献において、木下氏はこの二点を上げ、「なむ」の反実仮想性を指摘した。

19、1254番歌について、反過去と未来指向の両方の解釈が見られるが、ここでは「めやも」という形式を重視して、反過去風な解釈に従った。

20、反事実性を帯びた「なむ」の用法は中古以降に見ないと、前掲木下氏の論文の中で指摘されている。なお、平安時代の「なむ」については、第三編で古今和歌集を取り上げたときに触れるつもりである。

21、もちろん、「ぬか(も)」の表現の性質からして、その二つの表現になり得るものを内在的に備えていなければならず、本稿で述べた諸特徴はその性質の反映に過ぎないであろう。しかし、現在のところ、特に「希求」を表す「ぬか(も)」の表現のメカニズムについては、筆者は定見を持たず、今後の課題として残されている。

22、平安時代に見られる「ぬか(な)」の表現については、第三編で取り上げるつもりである。

第四章、「ねば」の表現について

ナ行系統否定辞の已然形「ね」に関連する表現で、最も多く見られるのは、「ねば」の表現である。そして、上代の「ねば」の表現に関して、一番問題になるのは、いわゆる逆接風に解釈できる「ねば」の諸例である。この逆接に解釈される「ねば」は後の時代にほとんど見られないものだと言われ、¹⁾上代の否定表現に対する理解にかかわる大きなポイントの一つにもなっていると思う。もちろん、この逆接の「ねば」に対して、上代には後世にも見られる順接確定条件と解釈される「ねば」の表現も一方に存在する。本章においては、この「ねば」の表現について考察することにする。

一、順接の「ねば」

順接の確定条件と解釈される「ねば」の用例は、万葉集に66例、古代歌謡、続日本紀宣命に各1例ずつ得られる。万葉集で見ると、巻1、14、19以外の各巻に見られ、万葉時代を含む上代全般において、一般的な表現であると考えられよう。

万、189、朝日照る島の御門におほほしく人音もせねば（人音毛不為者）まうら悲しも

万、3901、み冬つぎ春は来れど梅の花君にしあらねば（君尔之安良祢婆）招く人もなし

考察の対象になる68例の中、3例について異訓があるほか、他の大部分の用例（49例）は、上に挙げた189番歌のように「不」という正訓字をもって「不…者」「不…波」「不」の形で表記され（「不」ではなく「莫…者」の形が1例ある）、残りの16例は上の3901番歌のように「祢婆」「祢波」「根者」「泥麼」などと万葉仮名で表記されている。

上の例で示されるように、いわゆる順接の「ねば」というものは、つまり「ねば」が使われる前句（倒置の場合は後句）が後句（倒置の場合は前句）に対して順接の確定的な条件を示し、「…ないので」「…ないから」と訳されるように、前句と後句とが一般的に必然的な因果関係にあることを表す条件句である。

上に挙げた例に即して言えば、万葉集189番歌は一般的に「朝日の照っている島の宮だのに、いぶせくも人の物音も聞こえないので、心悲しい」²⁾と解釈されている。

順接の「ねば」が条件句になっている後句（「ねば」が歌の最後に来た場合、倒置的にその前句）の述語を見ると、以下に挙げる用例が示すように、一つの特徴をなす一群が見られる。

紀、30、淡海海瀬田の済に潜く鳥目にし見えねば（梅珥志瀾曳泥麼）憤ろしも
（異枳迺倍呂之茂）

万、4074、桜花今そ盛りと人は云へどわれはさぶしも（我佐不之毛）君としあら

ねば {支美止之不在者}

万、524、むしぶすま柔やが下に臥せれども妹とし寝ねば {与妹不宿者} 肌し寒しも {肌之寒霜}

つまり、いわゆる情意・感覚を表す形容詞がその述語になるものが比較的多く見られる(19例)ということである。

そして、ほかの述語を観察すると、

情意・感覚の形容詞ではないが、同じ形容詞であるもの(6例)、

万、1525、袖振らば見もかはしつべく近けども渡るすべ無し {度為便無} 秋にしあらねば {秋西安良祢波}

いわゆる「気付き」や「確認」の助動詞と言われる「けり」からなるもの(8例)、

万、1214、足代へ行く小為手の山の真木の葉も久しく見ねば {久不見者} 蘿生しにけり {蘿生尔家里}

打消判断を表す「ず」からなるもの(3例)、

万、2388、立ちて坐てたどきも知らず思へども妹に告げねば {妹不告} 間使も来ず {間使不来}

「らむ」や「べし」のような推量判断にかかわるもの(4例)、

万、3982、春花の移ろふまでに相見ねば {相見祢婆} 月日数みつつ妹待つらむそ {伊母麻都良牟曾}

万、2783、吾妹子が如何にとも吾を思はねば {不思者} 含める花の穂に咲きぬべし {穂應咲}

などがあり、そのほかに、「思ほゆるかも {於母保由流香聞}」(万、3979)、「安からぬものを {不安物乎}」(万、534)、³⁾「哭のみし泣かゆ {哭耳思所泣}」(万、3344)のようなものもある。

これらのものは順接必然確定条件を表す「ねば」の後句(或いは前句)に現れる述語の大多数(約67.6%)を占める。そこに共通するものは、最初に挙げた情意・感覚の形容詞が代表するように、話者の主観的な心情にかかわる表現である、ということであろう。

そこで考えられることは、この順接の「ねば」が後句の主観的な心情や判断を表す表現と何らかの関連性乃至必然性があるのではなかろうかということである。考えてみれば、これは極く自然なことであるかもしれない。つまり、話者が自分のある心情、或いはある主観的な判断を人に伝えるには、その心情と判断を引き起こす原因・理由をも同時に明らかにすることは、即ちよりいっそう聞き手に自分の心情・判断を認めてもらうことであり、そのために主観的な心情・判断にかかわる表現が多く現れたのであろう。⁴⁾

それから、順接確定条件とされる「ねば」の句内部に、主格語あるいは対格語を表すものがある場合、その助詞は多く「の」や「が」が使われ、或いは「徒」の形になる。⁵⁾例えば、

万、1119、往く川の過ぎにし人の〔過去人之〕手折らねば〔手不折者〕うらぶれ
立てり三輪の檜原は

万、2360、人の親の少女児据ゑて守山辺から 朝な朝な通ひし君が〔通公〕来ね
ばかなしも〔不來哀〕

万、707、思ひ遣るすべの知らねば〔為便乃不知者〕片埜の底にそわれは恋ひな
りにける

万、457、遠長く仕へむものと思へりし君座さねば〔君不座者〕心神もなし

このことは、つまりこれらの用例では「ねば」でくくる前句の条件句が後句に対して、
従属的な関係にあることを示しているのであり、これらの「ねば」が後句の原因・理由と
なる順接必然確定条件に解される原因もここにあるのではないかとも考えられる。

ところで、この順接確定条件と見なされる「ねば」には次のような用例も幾つか見られ
る。

万、2397、暫しくも見ねば恋しき〔不見恋〕吾妹子を日に日に来れば言の繁けく

万、123、たげばぬれたかねば長き〔多香根者長寸〕妹が髪この頃見ぬに搔きい
れつらむか

万、3634、築紫道の可太の大島しましくも見ねば恋しき〔見祢婆古非思吉〕妹を
置きて来ぬ

万、2992、玉嚢懸けねば苦し〔不懸者辛苦〕懸けたれば続きて見まくの欲しき君
かも

つまり、これらの用例では「ねば」が「～ないので～」或いは「～ないから～」と、い
わゆる順接必然確定条件と解釈されるより、むしろ「～ないと～」と解釈されやすく、一
種順接の恒常的な条件を表していると考えられる。そして、上に挙げた4例を通してみる
と、前の3例は明らかに「ねば」の表現がもう一つの従属句内（いずれも連体修飾句）に
使われており、後の1例も形式的には「苦し」で切れているように見えるが、歌全体の意
味から見れば、「懸けねば苦し」はやはり最後の「君」と関連するものと考えられ、「～
見まくの欲しき〔見巻之欲寸〕」と一緒にあって、「（玉だすき）口にしなければ苦しく、
口にすればつづけて見たくなる、君であることだ」と解釈されよう。⁶⁾

このことは、一方では、上代日本語において、恒常的な条件の表現と順接必然確定条件
の表現との関係を示唆すると同時に、もう一方では恒常的な条件表現の性質をも示してい
るのではないかと思う。「～ので～」のような順接確定条件にしろ、「～けれども～」の
ような逆接確定条件にしろ、前・後件に現れる事柄どうしの客観的な関係によって決まる
ものもあれば、表現者の主観的なとらえ方によって決まるものもあるであろう。それに対
して、恒常的な条件は、前件の条件が備われば常に（或いは必ず）後件のことがらが成立
するというようなもので、いわば表現者の主観的なとらえ方にそれほど左右されない客観
性を持っていると考えられる。このような客観性は文法的に解釈すれば、いわゆる素材性

がそれだけ強いとも考えられ、従って、恒常的な条件を示す意を表す「ねば」が従属句や修飾句内により収まりやすかったのであろうと思われる。⁷⁾

二、いわゆる逆接の「ねば」

いわゆる逆接の意味と解釈される「ねば」の用例は、万葉集に18例、古代歌謡に2例が得られる。万葉集の18例は巻2、4、5、8、10、12の各巻に現れ、万葉時代においては、いわゆる逆接の「ねば」が既にそれほど一般的な表現ではなかった、ということが言えよう。

万、556、筑紫船いまだも来ねば（未毛不来者）あらかじめ荒ぶる君を見るが悲しさ

万、579、見奉りていまだ時だに更らねば（不更者）年月のごと思ほゆる君

紀、127、臣の子の八重の紐解く一重だにいまだ解かねば（伊麻栴藤柯柵波）皇子の紐解く

上の例が示すように、いわゆる逆接と解釈される「ねば」の表現もその大部分が「未…者」（9例）や「不…者」（7例）のように正訓字で表記されており、残りの4例が「柵婆」「泥婆」「柵波」などと万葉仮名で表記されている。

このようないわゆる逆接と解釈される「ねば」が使われる文の前・後句を見ると、前句と後句にはそれぞれ違った主体を持っているというような用例が目につく（9例）。

万、2232、秋山の木の葉もいまだ赤たねば（木葉文未赤者）今朝吹く風は霜も置きぬべく

万、1628、わが屋前の萩の下葉は秋風もいまだ吹かねば（未吹者）かくそ黄変てる

このように前・後句にそれぞれ違った主体を持つことは、言ってみれば、前・後句にそれぞれ別々なことがらが表現されており、両者の間是对立的な関係にあることを意味しているのであろう。前掲万葉集2232番歌に即して言えば、前句は「秋山の木の葉がいまだ赤たぬ」ことを表し、後句は「今朝吹く風が霜を置く」ことを表している。同じように1628番歌も「秋風がいまだ吹かぬ」と「萩の下葉がかくそ黄変てる」とことが別々に表現されている（表出の形式としては「下葉はかくそ黄変てる」が「秋風もいまだ吹かねば」を挟んでいるという違いはあるけれども）。

そして、その二つのことがらの間にはもともと論理的な関係は存在せず、いわば論理以前の関係にあるもので、場合によってはいわゆる反論理的な関係にさえあると考えられる。このときの前句は後句事態成立の場面的乃至時間的な限定をするだけのもので、一種偶然確定的な条件を表しているのである。両句の関係が偶然的であるということから、結果的に逆接とも解釈できる意味が出てきたのであろう。⁸⁾

上に挙げた万葉集2232番歌で言うと「秋山の木の葉もまだ色づかないうちに、今朝吹く風は冷たくて霜も置きそうなことよ」というふうに、前句を後句の時間的な限定表現のように解釈しても決して間違いではあるまい。⁹⁾しかし、そのように結び付けられた前・後句は季節感覚から言うと早過ぎるという気持ちが出て、前後件が表していることは言わば一般的な認識を破った現象になり、結局「秋山の木の葉もまだ紅葉しないのに、今朝吹く風は霜も置かんばかりに」¹⁰⁾という逆接的な表現に受け取られてしまうのであろう。

このような偶然確定条件として理解できる逆接の「ねば」の用例には、「ねば」の条件句内に副詞「いまだ」が使われているという一つ大きな特徴が看取される（13例、全用例の65%を占める）。

万、1434、霜雪もいまだ過ぎねば〔未過者〕思はぬに春日の里に梅の花見つ

万、2071、天の川なづさひ渡る君が手もいまだ枕かねば〔未枕者〕夜の更けぬらく

（前掲万葉集556、579、1628、2232、日本書紀歌謡127などもみなそうである）

この「いまだ」という副詞は文中においてどんな意味を持っているのであろうか。この問題と関連して、ここでは山口堯二氏（1966）の文章から少し引用したい。

「偶然確定は、そのような、後句に対する時間的前後関係の意味を、動詞の作用性によって前句が積極的に表し、それによって、二つの事態が因果関係に立つのみでなく、時間的前後関係をもって継起的に展開したものであることを表そうとするところから成り立ったものではないだろうか。」¹¹⁾

つまり、接続助詞「ば」からなる順接確定条件句の一種類を偶然確定条件として理解するには、前後両件の間に、時間的な前後関係を必要とするのである。このように見ると、順接偶然確定条件をなす「ねば」の句に現れる「いまだ」という副詞はまさにその時間性を引き出し、保証するものではなかろうかと考えられる。そして、この「いまだ」と同じように、逆接に解釈される「ねば」の文に見られる「いくだ」（2例）「いくか」（1例）などの副詞も「いまだ」と似たような役割を果たしているのであろう。

万、804、…少女らが さ寝す板戸を 押し開き い辿りよりて 真玉手の 玉手さし交へ さ寝し夜の 幾許もあらねば〔伊久陀母阿羅拈婆〕手束杖 腰にたがねて か行けば 人に厭はえ かく行けば 人に憎まえ 老男は かくのみならし…

万、1555、秋立ちて幾日もあらねば〔幾日毛不有者〕この寝ぬる朝明の風は手本寒しも

このような時間性が看取されることによって、もう一度、いわゆる逆接と解釈される「ねば」は本質的には順接偶然確定条件に位置づけて理解すべきであるという立場の正当さが裏付けられるのであろう。

この前句の動詞的な時間性と対応して、逆接と解釈される「ねば」の後句には、順接の

「ねば」の場合と違って、主観的な心情や判断を表すものが見られるのではなく、まさに動作・変化そのものの表現がよく見られるのである。例えば、

万、2314、卷向の檜原もいまだ雲居ねば（檜原毛未雲居者）小松が末ゆ沫雪流る
（沫雪流）

万、1477、卯の花もいまだ咲かねば（未開者）霍公鳥佐保の山辺に来鳴き響もす
（来鳴令響）

万、2032、一年に七日の夜のみ逢ふ人の恋も過ぎねば（恋毛不過者）夜は更けゆくも（夜深往久毛）

ところで、いわゆる逆接に解釈される「ねば」を順接偶然確定条件として理解するには、いま一つ重要なことを指摘しなければならない。山口氏（1966）によれば、

「偶然確定の用法は、少なくとも万葉集においては、動詞および動詞の複語尾となっている過去や完了の助動詞に『ば』が付く場合、つまり『何がどうする』型の句を前句とする場合に限られている。形容詞や断定の助動詞『なり』などの已然形に『ば』が付く場合、つまり『何がどんなだ』『何が何だ』型の句を前句とする場合は、恒常的条件を表すのでなければ、すべて必然確定なのである。」¹²⁾

と言われる。この中で注目すべきことは、上代において、偶然確定の用法になるのは「動詞」であり、つまり山口氏の言う「何がどうする型」の句だということである。だとすれば、ナ行系統否定辞の已然形「ね」からなる「ねば」が順接偶然確定条件として成り立つということは、言ってみれば、この時代では「ねば」がある程度山口氏の言う「何がどうする型」の句と同様の性質を持っていることを意味するのであろう。しかし、平安時代になると、「ねば」が逆接に解釈される表現がほとんど見られなくなる。換言すれば、即ち「ねば」が順接偶然確定条件として存在できなくなったことである。山口氏に倣って言えば、「ねば」は「何がどうする型」から「何がどんなだ型」「何が何だ型」に変わってしまったとも言えよう。おそらく、この変化は万葉の時代から既に始まり、従って、万葉時代においても、この順接偶然確定条件をなし逆接に解釈される「ねば」の表現が既に一般的なものではなくっており、順接偶然確定条件として成り立つに必要とする時間性も、しばしば「いまだ」や「いくだ」「いくか」などといった副詞の刺激を必要としたのであろう。しかし、注目されるべきことは、上代において、これらの副詞無しで、即ち「ねば」だけの形でも順接偶然確定条件として解釈できるような用例が存在したということであろう。¹³⁾

万、2145、秋萩の恋も尽きねば（恋裳不盡者）さ男鹿の声い続ぎい続ぎ恋こそ益れ

万、2032、一年に七日の夜のみ逢ふ人の恋も過ぎねば（恋毛不過者）夜は更けゆくも

表5、ナ行系統否定辞の已然形「ね」にかかわる表現の分布

	記	紀	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	宣	古
順 ネ バ	*	1	*	8	3	7 (1)	2	1	3 (1)	4	2	2 (1)	7	4	6	*	1	2	7	3	*	1	1	13
逆 ネ バ	1	1	*	1	*	2	2	*	*	4	*	8	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1
ネ ド モ	*	*	*	*	3	*	*	*	3 (1)	1	2 (2)	4 (1)	4	3	1	2	*	1	1	*	*	*	1 (1)	12
フ コ ソ フ ネ	*	*	*	1	*	*	*	*	1	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	1	*	*	4
ネ ?	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	(2)	(3)	(1)	*	*	*	*	*	*	*	*	*

注：数字は確例の用例数を、括弧の中の数字は異訓のある用例数を、「*」は用例の無いことを示す。

「？」は確例が無いことを意味する。

前頁に示す表5は、「ねば」の表現の、記紀歌謡、万葉集各巻、続日本紀宣命、更に平安時代前期の古今和歌集などにおける分布を示すものである（参考のために「ねど（も）」「～こそ～ね」「ね」などの表現も合わせて示した）。この表を通して、「ねば」表現の消長の一斑が伺われるであろう。

以上、本章において、上代における「ねば」の表現を考察してきた。特に後世の「ねば」にほとんど見られなくなる順接偶然確定条件をなし、逆接に解釈されることがあったということは、やはり上代におけるナ行系統否定辞の特殊性として重要視すべきであろう。また、山口氏が指摘された、上代において偶然確定の表現をなすものは「何がどうする型」の句に限る、という事実を重視して、本編で考察したナ行系統否定辞が参加する他の諸表現と関連すれば、上代において、ナ行系統否定辞がザ行系統否定辞に対して動詞的な活用形式を持つということとも決して無関係ではなかったようにも思われる。

注：

- 1、後世に見られるいわゆる逆接と解釈される「ねば」の表現は非常に僅かで、かなり珍しいものとされている。平安時代前期の表現については、第三編で触れるつもりである。
- 2、『日本古典文学全集万葉集』（小学館）による。
- 3、この「不安物乎」には「くるしきものを」の異訓もあるが、「ものを」の部分は訓みが一致している。
- 4、これはおそらく順接の「ねば」だけでなく、順接必然確定条件を表す条件句一般においても多く見られることであるとも考えられよう。順接確定条件表現の一般については、また別に考察する必要があるが、本稿においてはその余裕がないので、深入りしないことにした。否定表現と関連する「なくに」の表現にも、前後件に順接と逆接に解釈されるものがあるが、その表現においても順接と解釈される「なくに」の前句に禁止・命令・意志・推量・希求などといった主観的な表現にかかわるものが多く見られ、或いはここに述べたこととも関連があるかもしれないと思う。
- 5、もちろん、対格語の場合、対格を示す助詞「を{乎}」（2930番など）或いは「を」の代わりとなる「は{者}」（2299番など）「も{毛}」（1214番など）が使われることもあるが、ここでは対格語の場合でも「の」が使われることがあるということをもっと重視したい。
- 6、『日本古典文学全集万葉集』（小学館）による。

7、もちろん、このことは決して順接必然確定条件或いは逆接確定条件の表現が従属句や修飾句内に収まらないということを意味しない。

8、逆接と解釈される「ねば」を順接偶然確定条件に位置づけて理解する議論は、一見自明のようであるが、実際には「ねば」に対する解釈は様々に行われている。山口堯二氏によれば、それを三種類にまとめることができると言う。(a)、「機縁性」で、つまり順接偶然確定条件法で解釈する説。(b)、「因由性」で、つまり順接必然確定条件法で解釈する説。(c)、順接・逆接の両方の条件関係を表し得た已然形による接続法に関連させて、そのまま逆接条件法と解釈する説。(a)の立場を取るものは、松下大三郎氏に始まるようで、近年には尾上圭介氏「『已然形+ば』(逆接のばあい)」(1978、後掲参考文献37)、鈴木義和氏「いわゆる逆接の『ねば』について—上代語の偶然確定条件法—」(1984、後掲参考文献103)などが見られる。本稿においては、この逆接と解釈される「ねば」を順接偶然確定条件に帰して理解すべき意見に賛同するだけでなく、そのように理解するには、「ねば」の表現において看取されるべき特徴及び、それが注11で挙げる山口堯二氏の論文に言う「何がどうする型」の文に通じる一面を持っているという性質を更に指摘しておいた。なお、いわゆる逆接に解釈される「ねば」が本来順接偶然確定条件をなすもので、結果的にそのように解釈されるものに過ぎないということの傍証として、次のように、純粹に逆接確定条件をなす「ねど(も)」の表現と比べてみることもよっても分かるだろう。つまり、

万、1296、今つくる斑の衣面づきてわれに思ほゆいまだ着ねども(未服友)

万、1348、三島江の玉江の薦を標めしより己がとそ思ふいまだ刈らねど(雖未蒔)

上に挙げた1296番歌と1348番歌のように、「ねど(も)」が純粹な逆接確定条件の表現であるためか、短歌の第五句にも現れ(他に2724番と1113番の2例が見られる)、倒置の形でも意味が読み取れるのであった。それに対して、結果的に逆接に解釈される「ねば」には、短歌の第五句或いは長歌の末句に現れるもの、つまり意味的に逆に前の句と関連して、いわゆる倒置の形と見なされる用例はほとんどないのである。かろうじて、

万、2023、さ寝そめて幾許もあらねば(何太毛不在者)白妙の帯乞ふべしや恋も

過ぎねば(恋毛不過者)

の「恋も過ぎねば」が位置として第五句にあり、意味的にも前句の「白妙の帯乞ふべしや」と逆接的に解釈できるという一例が見られるだけである。しかし、その「白妙の帯乞ふべしや」の前句に更に「幾許もあらねば」があり、両者間の逆接的な意味関係はむしろそちらによって既に明らかになっていると言え、最後に現れた「恋も過ぎねば」は前半の「～幾許もあらねば」に対して更に条件を補足したような存在に過ぎないということが判明する。この位置的な差異を見ても、やはり「ねば」のほうは本来順接偶然確定条件の表現であり、前・後句の間が論理を超えた契機・機縁の関係にあるために、結果的に一種逆接的な意味あいを醸し出した表現であると言えよう。

9、桜井満氏の注釈を改訳したものである。

10、『日本古典文学全集万葉集』（小学館）による。

11、山口堯二氏「接続助詞『ば』の確定条件法」（1966、後掲参考文献176）p510による。なお、注8で挙げた鈴木氏の論文においても、この「いまだ」のことに触れ、「未完了というアスペクチュアルな意味」を「ねば」から引き出しているのだと指摘された。これは筆者にとって啓発される発言である。

12、注11の参考文献p509による。下線は筆者のものである。しかし、残念なことに、山口氏は逆接の「ねば」をこの中に入れず、やはり必然確定条件の一種とされ、特別扱いにしている。それは、「ねば」をいわゆる否定の助動詞「ず」（本稿で言うナ行系統否定辞とザ行系統否定辞を分けないで）の一活用と見て、氏の言う「何がどんなだ」「何が何だ」型の句と見ているから、このように例外として出てきたのであろう。筆者としては山口氏が指摘した事実をもっと重視すべきだと思う。つまり、上代日本語において、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞が別々だったという立場に立つと、むしろ順接偶然確定条件の「ねば」の存在を通して、ナ行系統否定辞の已然形「ね」からなる「ねば」は、ある意味では氏の言う「何がどうする」型の句と通じる一面が見られるのではなかろうかと思う。それが後世にほとんど見られなくなるのは、おそらく、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の統合によって、「ねば」という形式が「何がどうする」型より「何がどんなだ」「何が何だ」型の句に変わってしまったために、上代で見られる逆接と解釈される偶然確定条件をなす「ねば」が姿を消してしまったのではなかろうかと考えられる。

13、平安時代以降になると、逆接に解釈される「ねば」の用例は非常に稀になるのだが、そのような用例はいずれも「～はてねば」の形となっており、つまり、順接偶然確定条件として存在するときに必要な時間性はやはり補助動詞の「はつ」によって刺激され、保証されているのだと言えよう。平安時代前期の表現については、第三編で古今和歌集の用例を取り上げたときにまた触れるつもりである。

第五章、ナ行系統否定辞の上接用言について

前四章では、上代におけるナ行系統否定辞にかかわる幾つかの重要な表現を考察してきた。それらのいずれの表現を通して、上代におけるナ行系統否定辞の性質と、ザ行系統否定辞との違いが看取されていると思う。

上代におけるナ行系統否定辞の性質、特にもう一方のザ行系統否定辞と相異なる性質の反映として、もう一つ本章で考察するナ行系統否定辞の上接用言の問題がある。

結論から言うと、上代においては、ナ行系統否定辞の上接用言は、ザ行系統否定辞に上接する用言と比べると、ある程度制限があったということである。以下実例を交えながら見ていこう。

本編第一章で考察したことによって分かるように、ナ行系統否定辞の連用形「に」の表現は上代において既にかなり限られており、その上接用言は「知る」「～かつ」「飽く」の三つしか見られない。

ナ行系統否定辞の他の二つの形式「ぬ」「ね」になると、後世の否定助動詞の活用形にも見られるだけに、上代の用例から見ても、かなり自由活発な表現が見られる。ここではまず用例数の多い「ぬ」の形に的をしぼって、その上接用言の種類を考察し、そこから上代におけるナ行系統否定辞の上接用言の制限を明らかにしたいと思う。¹⁾

「ぬ」に上接する用言を観察すると、以下のようなものが見られる。

動詞四段活用につくもの

万、194、…玉垂の 越智の大野の 朝露に 玉裳はひづち 夕霧に 衣は濡れて 草枕 旅宿かもする 逢はぬ君ゆゑ {不相君故}

動詞下二段活用につくもの

万、156、三諸の神の神杉夢のみに見えつつ共に寝ぬぬ夜ぞ多き {不寝夜叙多}

動詞上二段活用につくもの

万、408、石竹のその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日は無けむ {不恋日将無}

動詞上一段活用につくもの

万、2042、しばしばも相見ぬ君を {相不見君矣} 天の川舟出早せよ夜の更けぬ間に

動詞カ行変格活用につくもの

万、527、来むといふも来ぬ時あるを {不来時有所乎} 来じといふを来むとは待たじ来じといふものを

動詞サ行変格活用につくもの

万、2912、人の見て言咎めせぬ夢にわれ {事害目不為夢尔吾} 今夜至らむ屋戸閉すなゆめ

動詞ラ行変格活用につくもの

万、892、…しかとあらぬ 鬢かき撫でて（志可登阿良農 比宜可伎撫而） 我
を措きて 人は在らじと 誇ろへど…

動詞ナ行変格活用につくもの

万、3747、わが宿の松の葉見つつ吾待たむ早帰りませ恋ひ死なぬとに（古非之奈
奴刀尔）

形容詞カリ活用につくもの

万、3272、うち延へて 思ひし小野は 遠からぬ その里人の（不遠 其里人之）
標結ふと 聞きてし日より…²⁾

形容動詞ナリ活用につくもの³⁾

万、1345、常ならぬ人国山の（常不人国山乃）秋津野の杜若をし夢に見るかも
等々、動詞・形容詞・形容動詞のすべてにわたって下接している。また、補助動詞的なもの
の下接する用例として、次のようなものが見られる。

補助動詞「得」につくもの

万、461、留め得ぬ命にしあれば（留不得寿尔之在者）敷栲の家ゆは出でて雲隠
りにき

補助動詞「ます」につくもの

万、2295、わが屋戸の田葛葉日にけに色づきぬ来まさぬ君は（不来座君者）何心
そも

補助動詞「かつ」につくもの

万、2297、黄葉の過ぎかてぬ児を（過不勝児乎）人妻と見つつやあらむ恋しきも
のを

補助動詞「あふ」の方言形につくもの⁴⁾

万、4432、障へなへぬ命にあれば（佐弁奈弁奴美許登尔阿礼婆）愛し妹が手枕離
れあやに悲しも

補助動詞「たまふ」につくもの

宣、45、また救ひしく、此の帝の位と云ふものは、天の授け給はぬ人に（天乃授
不給奴人尔）授けては、保つことも得ず、亦変りて身も滅びぬるものぞ
いわゆる助動詞と考えられるものは以下のようなものが見られる。

受身の助動詞につくもの

万、1500、夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は（不所知恋者）苦しきも
のそ

可能の助動詞につくもの

万、632、目には見て手には取らえぬ月の内の楓のごとき（手二破不所取月内之
楓如）妹をいかにせむ

使役の助動詞につくもの

万、3296、父母に知らせぬ子ゆゑ（父母尔不令知子故）三宅道の夏野の草をなづみくるかも

尊敬の助動詞につくもの⁵⁾

紀、56、つのさはふ 磐之媛が おほろかに 聞こさぬ うら桑の木（枳許嗟怒于羅遇破能紀）…

また、いわゆるハ行延言を助動詞に準じて見るならば、それにつくものとして次のような用例が見られる。

万、4465、…天の日嗣と 継ぎて来る 君の御代御代 隠さはぬ 赤き心を（加久左波奴 安加吉許己呂乎） 皇辺に 極め尽して 仕へ来る…

以上、主にナ行系統否定辞の「ぬ」の連体修飾用法に見られる上接用言の種類を考察してきた。このように見てくると、上代において、ナ行系統否定辞の「ぬ」の上接用言は、動詞・形容詞・形容動詞といういわゆる三大用言のほかに、補助動詞及び助動詞の中の受身・可能・使役⁶⁾・尊敬を表すものに限られるという制限が観察される。しかも、この制限は決して「ぬ」の連体修飾用法だけのものではなく、「ぬ」の全用法に、いや上代におけるナ行系統否定辞全体にわたってこの制限が見て取れるのである。

「ぬ」の形に次いで多く見られる「ね」の表現を調べても、その上接用言はやはり、動詞四段活用のもの、下二段活用のもの、上一段活用のもの、カ行変格活用のもの、サ行変格活用のもの、ラ行変格活用のもの、形容詞カリ活用のもの、補助動詞の「得」「ます」「かつ」「たまふ」などに限られているのである。⁷⁾

この制限は、今までいわゆる否定の助動詞一般（本稿で言うナ行系統否定辞とザ行系統否定辞を含めて）の問題として考えられてきたようであるが、しかし、第二編で見るザ行系統否定辞の「ず」には、上に見た「ぬ」に上接する用言のほかに、更に助動詞「べし」、「り」や「たり」（「にたり」を含む）、或いは「けり」（「にけり」を含む）などが上接する用例が見られる。この違いは、やはり上代におけるナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の質的な相違の反映の一つとして重視すべきではないかと思う。⁸⁾

また、この制限は連体修飾句内の問題として片付けられてしまう可能性もある。がしかし、

万、422、石上布留の山なる杉群の思ひ過ぐべき（思過倍吉）君にあらなくに

万、4285、大宮の内にも外にもめづらしく降れる大雪（布礼留大雪）な踏みそね惜し

万、1608、秋萩の上に置きたる（上尔置有）白露の消かも死なまし恋ひつつあらずは

万、4094、葦原の 瑞穂の国を 天降り 領らしめしける（之良志売之家流）皇御祖の…

などの用例が示すように、「べし」「り」「たり」「けり」などの助動詞が連体修飾に参加する用法は決して珍しくないのである。

そうすると、これらの助動詞に下接しないということは、やはりナ行系統否定辞「ぬ」の性質からの選択と言わなければならず、上代におけるナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の相違の一つとして重要視しなければならないであろう。

注：

- 1、筆者の調査によれば、上代において、「ぬ」の用例数はおよそ260例（その内異訓のあるもの19例）ほどあり、それに対して「ね」の用例数はおよそ129例（その内異訓のあるもの14例）ほどである。
- 2、鶴久氏・森山隆氏『万葉集』によれば、この歌にある「不遠」には「まちかき」の異訓もあるようだが、「遠からぬ」の訓に従った。
- 3、この歌について『万葉集大成総索引』では「常」の後に「知」を補読して、「常知らぬ」と訓んでいるが、ここでは他の大多数の注釈書の訓みに従った。「常にあらぬ」の訓みもナリ活用に準じて考えられる。
- 4、『日本古典文学全集万葉集』の頭注によれば、「障へなへぬー未詳。障へニ敢へヌなどの約か。…アフは一般に、～しおおせる、～できる、の意の補助動詞だが、ここは独立した動詞としての用法であろう」と言う。中西進氏は「ア（堪）への訛まり」と見る。
- 5、「聞こす」は「聞かす」の「か」が乙類の「こ」に転じたと考えられる（『時代別国語大辞典上代編』参照）ので、やはり「聞く」という動詞に、尊敬の助動詞「す」が付いたものと考えられる。
- 6、使役の助動詞に下接する点においても、いわゆる使役の助動詞「しむ」に下接しないという現象が見られ、後に考察するザ行系統否定辞の「ず」が「しむ」にも下接するという相違も看取され、上代における両系統否定辞の相違の一つとして注目すべきであろう。
- 7、紙数の関係で、これらのものの用例は省略する。万葉集2934番歌に一例だけ「目者非不飽」が「目には飽かざらね」と訓まれるものがある。しかし、これには「目には飽けども」の異訓もあり、確実な用例とは見られない。なお、発生的に「ぬ」の変化形と考えられる「なく」からなる「なくに」の表現においては、打消の助動詞「ず」のザリ活用に下接した「さ寝ざらなくに〔左衽射良奈久尔〕」（万、3396）や助動詞「り」につくもの（「思へらなくに〔於母敵良奈久尔〕」（万、3942）などが見られるが、これについては、「なくに」表現の特殊性として考えられ、ナ行系統否定辞全般のものとして考えないほう

がよいかもしれないと思われる。また、これらのものを入れても、上代において、ナ行系統否定辞の上接用言とザ行系統否定辞「ず」のそれと比べれば、なお遙かに制限が大きいと言わなければならないであろう。

8、竹内美智子氏「助動詞(1)」(1977、後掲参考文献104)では、「～けらずや」「～たらずや」の問題に触れ、これは「～ずや」という反語表現の問題で、まともな否定用法ではなく、しかも後世にこの用法が見られないという点に注目して、否定表現として扱うべきではない問題だと主張されている。しかし、「～ずや」の反語表現は上代におけるザ行系統否定辞の「ず」にかかわる一表現であり、一度打ち消して、更に問いをかけることによって、反語になるというプロセスからしても、ザ行系統否定辞「ず」の一つのまともな用法だと考えるべきであろう。それが後世に見られなくなる原因は、むしろ上代の「ず」の性質に求めなければならないだろう。「ず」のことについては、第二編で「～ずや」を取り上げたところで、もう少し詳しく述べるつもりである。

第一編のまとめ

本編において、上代におけるナ行系統の否定辞にかかわる諸表現を考察してきた。従来言われているように、ナ行系統否定辞は形態的に活用する活用形（「に・ぬ・ね」）を持っていた。この点は明らかに次編に考察するザ行系統の否定辞と違っている。

しかし、上代において、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の相違は、決してその形態的なものに留まらず、本編で考察した幾つかの表現を通して、両系統否定辞の表現性や使われ方など、より本質的な点にかかわる相違も見られたのである。

同じ連用形と考えられるものでも、ナ行系統否定辞の連用形「に」は、ザ行系統否定辞の連用形「ず」と違って、後句の原因・理由を示す用法を持っていた。しかも、形式用言の力を借りて、係り結びの形になり、助動詞などへ繋ぐ場合、存在詞の「あり」を取るのではなく、代動詞の「す」を選ぶのである。

上代において、ザ行系統否定辞の終止形「ず」に対して、ナ行系統否定辞の側も、終止形的な「ぬ」が確かに存在していたと考えられる。ただし、その終止形が使われる表現から見れば、珍しいほど数が少なく、あまり一般的なものではなかった。

ナ行系統否定辞の「ぬ」が疑問表現にかかわる助詞と一緒に現れた場合、ザ行系統否定辞の「ず」が疑問表現にかかわる助詞と一緒に現れる場合とは違い（もちろん、その助詞に「か（も）」と「や（も）」の違いがあることは無視してはいけないが）、「否定的な詠嘆」と「希求」という独自の表現性を持っていた。

更にナ行系統否定辞全体にわたって言えば、上接項目が動詞・形容詞・形容動詞といういわゆる三大用言と補助動詞及び受身・可能・使役・尊敬を表す助動詞に限る、ということもザ行系統否定辞との違いを示している。

また、通時的に見れば、この時代では、後世の否定助動詞の活用形におさまった「ぬ」「ね」などに見られない特殊な表現が存在していた。

例えば、上にも触れた「ぬか（も）」の形で「希求」を表したことと、已然形の「ね」からなる「ねば」が順接の偶然確定条件句をなし逆接に解釈される意味をも表したことなどは、みな後世に見られないものである。¹⁾

以上のようなことから見れば、上代において、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞とは、形態的にだけでなく、表現性質においても、かなり相違が存在しており、上代におけるナ行系統否定辞は、後世の否定助動詞の活用形におさまった「ぬ」「ね」に見られない独特な性質を持っていたということが言えるであろう。そして、ナ行系統否定辞がザ行系統否定辞に対して、動詞的な活用形態を持っていたことも、或いはもっと積極的な意味があったかもしれないと思う。²⁾

このような、上代におけるナ行系統否定辞の特殊性を少しでも明らかにしようと思って、本編においては、ザ行系統否定辞との違いを意識しながら考察を進めてきただけでなく、

ナ行系統否定辞にかかわる幾つかの重要な表現について、今まで特に指摘されなかった特徴などをも、出来るだけ詳細に記述してきたのである。これらの考察は、上代におけるナ行系統否定辞の性質を知る上で、とても重要なことであると考えているからである。

そこで、ナ行系統とザ行系統の両系統の否定辞における違いを更に見るために、もう一方のザ行系統の否定辞と、それが参加する諸表現を取り上げ、次編の考察に移りたいと思う。

注：

1、逆接に解釈される「ねば」は非常に稀な用例ではあるが、後にも余韻として見られるのである。しかし、本編第四章で述べたように、副詞「いまだ」や補助動詞「かつ」などの刺激や助けがなく、「ねば」の形だけで、順接偶然確定条件句をなし、逆接に解釈される表現はやはり上代に限ると言えよう。

2、もちろん、これはすぐさまナ行系統否定辞が動詞と同じであるということを意味しない。ナ行系統否定辞の活用形式に、一般的な動詞の持つ未然形（周知のように、「なく」は連体形「ぬ」の変形であり、未然形ではない）と命令形が無いということは、動詞一般との違いを示しているのであろう。

第二編、上代におけるザ行系統の否定辞について

第一章、「ずあり（ざり）」の表現について

周知のように、ザ行系統否定辞の「ず」は、連用修飾用法をその基本的な表現法の一つとしている。しかもその修飾はあたかも形容詞連用形に見る連用修飾用法と同じように、一種の状態修飾になっていることも明白である。例えば、

万、3481、あり衣のさゑさゑしづみ家の妹に物言はず来にて（毛乃伊波受伎尔弓）
思ひ苦しも

万、127、遊士にわれはありけり屋戸貸さず（屋戸不借）還ししわれそ（例還吾曾）風流士にはある

上にあげた万葉集3481番歌と127番歌を口語訳にすると、それぞれ「（あり衣の）ざわめきの中に沈んで、家の妻と語らずに来てしまったので、恋しくてたまらない」、「風流人で、やっぱりわたしはあったのだ。泊めもしないで帰したわたしこそ、真の風流人だったのだ」¹⁾になり、つまり、そこに使われている「ず」は、いずれも、「～しない状態で」或いは「～でない状態で」次に来る動詞を修飾する意味を表しているのである。この点は前編で考察したナ行系統否定辞の連用形「に」と大きく異なることでもある。

筆者の調査によれば、この連用形「ず」が次に来る動詞（或いは形容詞・形容動詞）にかかって、連用修飾の役割を果たす用例は（「ず」「ずて」「ずして」「ずに」の四つの形とも含めて）、上代において407例も数えられ、「ず」全用例（953例）の約43%（半数近く）をも占めている。²⁾

ところで、ザ行系統否定辞の連用形「ず」とナ行系統否定辞の連用形「に」の相違が反映される用法として、更に一つ「ず」が用言「あり」（存在詞とも言う）とかかわる表現がある。この表現から、後世の否定助動詞に見られる「ザリ活用」（「ず+あり→ざり」）が生まれたのは恐らく間違いないであろう。

上代において、この「ずあり」（「ざり」の形も含めて）の表現として、いかなるものが存在したかを考察することは、上代におけるザ行系統否定辞「ず」の性質を知る上では、やはり非常に重要なことであろう。

以下、「あり」の活用形式に従って、各活用形のものを考察していきたいと思う。

1、未然形のもの、

まず「～ずあら（ざら）～」で、いわゆる未然形に当たるものだが、この形は上代の「

ずあり」の表現の中で最も多く見られる。

その非融合形式は以下のようなものがある（紙数の関係で、用例数の多いものでも一例しか挙げられない）。

「～ずあらく」の用例（2例）。

万、809、直に逢はず在らくも多く（多陀尔阿波須阿良久毛於保久）敷栲の枕離らずて夢にし見えむ

「～ずあらくに」の用例（1例、異訓あり）。

万、3919、青丹よし奈良の都は古りぬれど本ほととぎす鳴かずあらくに（不鳴安良久尔）

この用例は、原文の「不鳴安良久尔」が示すように「鳴かずあらくに」と訓むには「な」の補読になる。³⁾

「～ずあらなむ」の用例（1例）。

万、1212、足代過ぎて糸鹿の山の桜花散らずあらなむ（不散在南）還り来るまで
「～ずあらば」の用例（5例、うち1例に異訓がある）。

万、3590、妹に逢はずあらばすべ無み（伊毛尔安波受安良婆須敵奈美）石根踏む生駒の山を越えてそ吾が来る

「～ずあらし（を）」の用例（2例、うち1例に異訓がある）。

紀、81、ぬばたまの甲斐の黒駒鞍着せばい及かずあらし（伊志歌孺阿羅磨志）
甲斐の黒駒

もう一例は万葉集436番歌で「恋ひずあらしを（不恋有益雄）」という訓みに対して、「恋ひざらしを」の異訓がある。

「～ずあらませば」の用例（1例）。

万、2505、梓弓引きて許さずあらませば（引不許有者）かかる恋には逢はざらしを

「～ずあらむ」の用例（12例、うち1例に異訓がある）。

万、2020、天の川夜船を漕ぎて明けぬとも逢はむと思へや袖交はずあらむ（袖易受将有）

万葉集1026番歌の「里に去かずあらむ（里尔不去将有）」の訓に対して、「里に去かざらむ」の異訓がある。

「～ずあらめ（かも・やも）」の用例（2例、うち1例に異訓がある）。

万、4371、橘の下吹く風の香ぐはしき筑波の山を恋ひずあらめかも（古比須安良米可毛）

万葉集3081番歌の「恋ひずあらめやも（不恋有目八方）」の訓に対して、「恋ひざらめやも」の異訓がある。

上に挙げたような非融合的な形式の用例は万葉集（20例）、古代歌謡（3例）、続日本

紀宣命（4例）のいずれにも見られる。

一方、融合形式の用例は万葉集（46例）にのみ見られる。それは、次のようなものである。

「～ざらなくに」の用例（3例、うち1例に異訓がある）。

万、3735、思はずもまことあり得むやさ寝る夜の夢にも妹が見えざらなくに（美延射良奈久尔）

万葉集1916番歌の「知らざらなくに（不知有名国）」の訓に対して「知らずあらなくに」の異訓がある。

「～ざらね」の用例（1例、異訓あり）。

万、2934、味さはふ目は飽かざらね（目者非不飽）携り言問はなくも苦しかりけり

この歌の「目者非不飽」について、「目には飽けども」の異訓がある。⁴⁾

「～ざらば」の用例（2例、異訓あり）。

万、3259、かくのみし相思はざらば（相不思有者）天雲の外にそ君はあるべくありける

この歌の「相不思有者」ともう一例、2650番歌の「合はざらば（不合相者）」について、いずれも「あはずあらば」の異訓がある。⁵⁾

「～ざらまくに」の用例（1例、異訓あり）

万、612、なかなかに黙もあらましを何すとか相見そめけむ遂げざらまくに（不遂尔）

この歌の「不遂尔」について、「遂げざらなくに」の異訓がある。

「～ざらましを」の用例（8例、うち2例に異訓がある）。

万、586、相見ずは恋ひざらましを（不恋有益乎）妹を見てもとなかくのみ恋ひばいかにせむ

万葉集173番歌の「荒れざらましを（不荒有益乎）」、万葉集436番歌の「恋ひざらましを（不恋有益雄）」はそれぞれ「荒れずあらましを」と「恋ひずあらましを」の異訓を持っている。

「～ざらむ」の用例（20例、うち14例に異訓がある）。

万、3891、荒津の海潮干潮満ち時はあれどいづれの時かわが恋ひざらむ（吾孤悲射良牟）

異訓のある14例の中、13例が「～ざらむ」の訓に対して、「～ずあらむ」の訓を持っているのである。⁶⁾

「～ざらめやも」の用例（11例、うち6例に異訓がある）。

万、3741、命をし全くしあらばあり衣のありて後にも逢はざらめやも（安波射良米也母）

異訓のある6例は、全部「～ざらめやも」の訓みに対して「～ずあらめやも」の訓みを持っている。

上に見てきた非融合形式と融合形式を合わせてもう一度まとめると、次の表6のようになる。

表6、「ずあり」（「ざり」）表現未然形のもの

	く	なくに	なむ	ね	ば	まくに	まし(を)	ませば	む	めや(か)も	合計
ずあら	2	1(1)	1	0	5(1)	0	2(1)	1	13(1)	2(1)	27(5)
ざら	0	3(1)	0	1(1)	2(2)	1(1)	8(2)	0	20(14)	11(6)	46(27)

注：数字は用例数を、括弧内の数字は用例数の中の異訓のあるものを示す。

2、連用形のもの

次に連用形に当たる「～ずあり（ざり）～」の形だが、これも非融合形式と融合形式の両方が見られる。

非融合形式の用例は次のようなものがある。

「～ずありき」の用例（2例）。

万、854、玉島のこの川上に家はあれど君を恥しみ頭さずありき（阿良波佐受阿利吉）

「～ずありし」の用例（2例、うち1例に異訓がある）。⁷⁾

万、3730、恐みと告らずありしを（能良受安里思乎）み越路の手向に立ちて妹が名告りつ

もう1例続日本紀宣命第十五詔3行目の「…と思へども得為さずありし間に（得不為之間尔）…」について、「…得為さざりし間に…」の異訓がある。

「～ずありせば」の用例（1例）。

風、15、水の江の浦島の子が玉匣開けずありせば（阿氣受阿理世波）又も会はましを

「～ずありける」の用例（1例）。

万、4496、怨めしく君はもあるか屋戸の梅の散り過ぐるまで見しめずありける（美之米受安利家流）

「～ずありこそ」の用例（1例）。

万、845、鶯の待ちかてにせし梅が花散らずありこそ（知良須阿利許曾）思ふ子がため

「～ずありつ」の用例（1例）。

宣、28、また敕はく、悪く、新ましき奴の、政の柄を執りて奉したまふ事を以て諸氏の氏人等をも進めつかはすこと、理の如もあらずありつ（理乃如毛不在阿利都）

このような非融合形式のものは、前項の「～ずあら～」の非融合形式のものと同じように、万葉集（5例）、古代歌謡（1例）、続日本紀宣命（2例）のいずれにも見られる。

それに対して、融合形式のほうは万葉集（13例）にのみ見られる。それは、次のようなものである。

「～ざりき」の用例（4例、うち3例に異訓がある）。⁸⁾

万、538、他辞を繁み言痛み逢はざりき（不相有寸）心あるごとな思ひわが背子「～ざりし」の用例（7例、うち6例に異訓がある）。

万、2105、春されば霞隠りて見えざりし（不所見有師）秋萩咲きぬ折りて挿頭さむ

異訓のある6例のうち、4例までが「～ざりし」に対して「～ずありし」の異訓を持っている。⁹⁾

「～ざりせば」の用例（2例、異訓あり）。

万、1267、ももしきの大宮人の踏みし跡所 沖つ波来寄せざりせば（来不依有勢婆）失せざらましを

もう一例、万葉集67番歌の「聞えざりせば（不所聞有世者）」とあるが、二例とも「～ずありせば」の異訓がある。

上に挙げた連用形の非融合形式と融合形式のものを同じように合わせてまとめると、次の表7のようになる。

表7、「ずあり」（「ざり」）表現連用形のもの

	き	し	せば	ける	こそ	つ	合計
ずあり	2	2(1)	1	1	1	1	8(1)
ざり	4(3)	7(6)	2(2)	0	0	0	13(11)

注：数字の示し方は表6に同じ。

3、終止形のもの

終止形にあたる「～ずあり」は、融合形式の用例が見られず、非融合形式の用例として次の2例が見られる。

記、107、大君の心を緩み臣の子の八重の柴垣入り立たずあり（伊理多多受阿理）

万、2877、何時はなも恋ひずありとは {不恋有登者} あらねどもうたてこのころ
恋し繁しも

4、連体形のもの

次に連体形にあたる「～ずある(ざる)～」の用例を見てみよう。これも非融合形式と融合形式の両様が見られる。

非融合形式の用例は以下のようなものがある。

「～ずある(体言)」の用例(4例)。

万、3054、相思はずあるものをかも {相不念有物乎鴨} 菅の根のねもころごろに
わが思へるらむ

他の3例は続日本紀宣命に見られ、「～ずある」の次に来る体言は「もの」「間」「こと」「故」などで、いわゆる形式体言と見なされるものばかりである。

「～ずある(助詞)」の用例(2例)。

宣、28、夫人として己が先祖の名を興し継ぎひろめむと念はずあるはあらず {不
念阿流方不在}

「～ずあるべき」の用例(1例)。

宣、10、是を以て教へ賜ひ趣け賜ひながら受け賜はり持ちて、忘れず失はず有る
べき {不失可有伎} 表として…

「～ずあるらし」の用例(1例)。

万、3984、玉に貫く花橘を乏しみしこのわが里に来鳴かずあるらし {伎奈可受安
流良之}

「～ずあるらむ」の用例(4例、うち1例に異訓がある)。

万、4075、相思はずあるらむ君を {安必意毛波受安流良牟伎美乎} あやしくも嘆
き渡るか人の問ふまで

もう一例、万葉集1058番歌の「通はずあるらむ {不通有武}」には、「通はざるらむ」
の異訓がある。

上に挙げたような非融合形式の用例は、万葉集(6例)と続日本紀宣命(6例)の両方
に見られるが、それに対して、融合形式の用例は万葉集(15例)にのみ見られる。

「～ざる(体言)」の用例(7例、うち4例に異訓がある)。

万、495、朝日影にほへる山に照る月の飽かざる君を {不厭君乎} 山越に置きて
万葉集2406番歌の「知らざる命 {不知有命}」について「知らずある命」の異訓がある。
「ざる」の次に来る体言を見ると、「わざ」「君」「さき」「命」「こと」「雪」などで
あって、形式体言だけでなく、一般的な体言も現れている。¹⁰⁾

「～ざる(助詞)」の用例(4例、うち2例に異訓がある)。

万、1849、山の際の雪は消ざるを {雪者不消有乎} 水霧らふ川の柳は萌えにける

かも

万葉集102番歌の「成らざるは〔不成有者〕」には「成らずあるは」の異訓がある。¹¹⁾「～ざ(る)らし」の用例(2例、うち1例に異訓がある)。

万、1410、世間はまこと二代は行かざらし〔不往有之〕過ぎにし妹に逢はなく思へば

上の1410番歌の「行かざらし」は、恐らく「行かずあるらし→行かざるらし→行かざらし」というふう融合されたものと考えてよいであろう。¹²⁾ほかに、1138番歌の「聞えざるらし〔不所聞有之〕」には「聞えずあるらし」の異訓がある。

「～ざるらむ」の用例(3例、異訓あり)。

万、3202、柔田津に舟乗りせむと聞きしなへ何そも君が見え来ざるらむ〔所見不來将有〕

他の2例は1058番と2039番だが、3例とも、「～ざるらむ」の訓みのほかに「～ずあるらむ」の異訓を持っている。

上に見てきた連体形にあたる「～ずある(ざる)～」の用例を合わせてまとめると、次に示す表8のようになる。

表8、「ずあり」「ざり」表現連体形のもの

	体言	助詞	べき	らし	らむ	合計
ずある	4	2	1	1	4(1)	12(1)
ざる	6(3)	4(2)	0	2(1)	3(3)	15(9)

注：数字の示し方は表6に同じ。

5、已然形と命令形のもの

最後に、いわゆる已然形と命令形にあたる「～ずあれ(ざれ)～」の用例をあわせて見てみよう。

已然形にあたる形はやはり非融合形式と融合形式の両方が見られる。

非融合形式の用例としては、次の2例がある。

万、522、をとめ等が珠匣なる玉櫛の神さびけむも妹に逢はずあれば〔妹尔阿波受有者〕

宣、14、…萬機密く多くして、御身敢へ賜はずあれ〔御身不敢賜有礼〕、法の随に天日嗣高御座の業は、朕が子王に授け賜ふ…

融合形式の用例は、万葉集に4例が見られ、そのうち、2例が「～ずあれ～」の異訓を

持っている。

「～ざれど」の用例、

万、3775、あらたまの年の緒長く逢はざれど（安波射礼杼）異しき心を吾が思はなくに

「～ざれば」の用例、

万、2272、秋づけば水草の花のあえぬがに思へど知らじ直に逢はざれば（直尔不相在者）

もう一例、785 番歌の「妹に逢はざれば（妹尔不相有者）」には「妹に逢はずあれば」の異訓がある。

「～ざれや」の用例、

万、791、奥山の磐かげに生ふる菅の根のねもころわれも相思はざれや（不相念有哉）

この歌の最後の一句には「相思はずあれや」の異訓がある。

命令形にあたる「～ずあれ（ざれ）」の用例は、続日本紀宣命に2例見られるだけで、しかも、その2例とも「～ずあれ」の訓がある一方、「～ざれ」の異訓も持っている。

宣、28、…今の敕を承け用ゐよ、先に詐りて敕と称ひてある事を、承け用ゐることを得ずあれと（承用 流己止不得止）云ひて…

もう一例は宣命第二十九詔4行目の「帝の位に置くことは得ずあれ（帝乃位仁置許止方不得）」である。

以上、「～ずあり（ざり）～」表現の用例を、各活用形式に従いながら用例を細かくみてきた。その全体をもう一度整理してまとめると、次に示す表9のようになる。

表9、「ずあり」（「ざり」）表現各活用形式の統計表

	ラ	リ	リ	ル	レ	レ	合計
非融合形式	27 (5)	8 (1)	2	12(1)	2	2 (2)	53 (9)
融合形式	46(27)	13(11)	0	15(9)	4 (2)	0	78(49)

注：数字の示し方は表6に同じ。

用例数だけを見れば、上代において既に、融合形式「ざり」に訓まれそうな用例が、非融合形式「ずあり」に訓まれるものより、やや優勢になっているように見えるが、しかし、融合形式の中に異訓（しかも、上に考察してきたように、その大部分が「ずあり」という非融合形式になる異訓）を持つものが多い（用例数の63%を占める）ので、確実な用例と

しては、それほど多くないということになる。一方、非融合形式の用例には、異訓を持つものが少なく（用例数の17%を占める）、むしろ、上代においては、まだ非融合形式の方が「ずあり」（「ざり」）表現の大勢を占めていたと言え、いわゆる過渡期の時代だと言えよう。

意味から見ると、非融合形式の場合は、「あり」が本動詞としての意味が強く、「～ずにいる」「～ずにある」と解釈されやすい。例えば、未然形のことを考察したときに挙げた用例を例にとってみると、万葉集809番歌の「直に逢はずあらくも多く…」は「直接に逢わずにいる年月も多くて…」と、1212番歌の「…桜花散らずあなむ…」は「…桜の花よ、散らずにあってくれ…」と、3590番歌の「妹に逢はずあらず無み…」は「妻に逢わずにいてはたまらなくて…」と、それぞれ解釈されている。¹³⁾ それに対して、融合形式の場合は、「あり」がただの形式用言と見られ、意味的には解釈されない時が多い。例えば、同じく未然形のことを考察したときに挙げた用例を例にとってみると、万葉集586番歌の「相見ずは恋ひざらましを…」は「逢わなかったら恋もしなかつたろうに…」と、3891番歌の「…いづれの時かわが恋ひざらむ」は「…どんな時にわたしが恋しないことがあるか」とそれぞれ解釈されている。¹⁴⁾ しかし、そのようなものも「お逢いしなかつたら恋に苦しまずにいられたでしように…」、「…いつといて恋い焦れないでいる時があるか」などと解釈できないこともない。¹⁵⁾ つまり、意味からしても、「ず」が「あり」を修飾し、「あり」が本動詞と見られることから、「ず」が「あり」の力を借りて、他の助動詞へ繋ぐとか、連体修飾などへ展開し、「あり」が形式用言の役割を果たすことへと過渡する時期であるとも見られよう。

もう一つ特に注目すべきことは、終止形にあたる「ずあり（ざり）」の形式には、融合形式の用例がゼロになっていることである。実例を考察したときに挙げた2例とも非融合形式のものであり、そこに現れている「あり」はいずれも本動詞として使われており、つまり「ず」が本来の連用修飾の用法として解釈した方がよいのであろう。その二首の歌はそれぞれ「皇子の心にしまりがなくて、臣下のわたしの、幾重にも組んだ柴垣の中に入り込めずにいるぞ」（記、107）、「いつとても恋せずにいるということはないけれども、一層この頃は恋心がはげしいことよ」（万、2877）と解釈したほうがよからう。¹⁶⁾

このことについては以下のように考えられよう。つまり、「ずあり」（「ざり」）の表現によって、様々な助動詞・助詞或いは体言がザ行系統否定辞の「ず」につくようになった。これは本来活用しないザ行系統否定辞の「ず」が、「あり」という存在詞（形式用言）の力を借りて、助動詞接続や体言修飾などへ展開するために、見付け出した一つの活路であると言えよう。その意味で「ずあり」表現の他の活用形に現れている存在詞「あり」は、本動詞としての役割があるほかに、次に来る助動詞や体言へ続くための「形式」として存在するだけでも意味があった。しかし、「ず」は本来活用しないけれども、終止形としての終止的な用法はもともと持っていた。¹⁷⁾ 従って、終止形の終止的用法にあたる形式に

においては、次へ展開する必要がないので、「あり」が本動詞として存在する以外は、むしろ意味がないと言える。そのために、「ずあり（ざり）」の表現が発生する当初から、「あり」が単に形式用言として現れる「ざり」の終止形としての用例は、実質的な意味や役割がないものと考えられて、発生しなかったのであろう。

以上のように、「ず＋あり→ざり」といういわゆるザリ活用の形式は、明らかにザ行系統否定辞「ず」のための補助活用として発生したものと見なければならぬ。この活用形式の発生によって、本来活用せず、連用修飾以外に展開しにくい「ず」が、他の助動詞や助詞を下接させたり、体言を修飾したりして、更に展開する方向に向かって、活発に動きだし始めたのである。その意味で、この時代では、未然形の「ざら」、連用形の「ざり」だけでなく、連体形の「ざる」、已然形の「ざれ」ももともと必須なものであったと認めなければならぬと思う。¹⁸⁾

言語というものは、無自覚的に経済性という原則を守っていると言える。一般的に言って、全く同意味・同性質の表現が同時に存在しないのである。ましてや、既に存在している表現形式と全く同意味・同性質のものを新たに作り出すことは、なお更考えられないであろう。もし、ザ行系統否定辞とナ行系統否定辞が最初から全く同意味・同性質のものであるならば、連体形と已然形である「ぬ」と「ね」がありながら、何故に新たに「ざる」「ざれ」という形式を作り出す必要があったのだろうか。しかし、逆に、本来違っている表現形式が、言語の発展する歴史の中で、意味においても、表現性質においても、全く同じになってしまうことは有り得ることである。その時、両者においては、一方が強くなり、もう一方が退くという進退の選択が迫られるか、或いは新たな意味・役割の分担が起こるかのいずれかになるであろう。本来ザ行系統否定辞「ず」の補助活用として発生した「ずあり」（「ざり」）の表現も、ザ行系統否定辞とナ行系統否定辞の統合によって、大きな変化が起こったと考えられる。未然形の「ざら」と連用形の「ざり」は、ナ行系統否定辞に同様な活用形が存在せず、或いは衰退したために、¹⁹⁾ それ自身の役割を引き続き発揮し、大きく成長したのであり、それに対して、連体形の「ざる」と已然形の「ざれ」は、ナ行系統の連体形「ぬ」と已然形「ね」の勢力に押されて、次第に衰え、特別な文体（例えば、漢文調の文体など）以外にはあまり使われなくなっていったのであろう。²⁰⁾

このように、ザ行系統否定辞とナ行系統否定辞が本来別々なものであるが、次第に統合して、後世の否定助動詞として成立したという立場に立つと、従来疑問視されてきた「ざる」「ざれ」という両活用形についても改めて見直すことが出来るのではないかと思う。

以上、本章において、上代における「ずあり」（「ざり」）の表現について、その実態を細かく考察してきた。この考察は、上代のザ行系統否定辞「ず」の性質を知る上で、非常に重要なことであると思う。

同じ連用形ではあるが、ザ行系統否定辞の連用形「ず」は、ナ行系統否定辞の「に」と

は違い、主に後続する動詞に対して、状態修飾をするのであった。そして、その違いはそれだけでなく、形式用言の力を借りて、助動詞などへ繋ぎ、連体修飾に展開するときも、ナ行系統否定辞の「に」と違って、代動詞の「す」を取るのではなく、存在詞の「あり」を選び、しかも、やがていわゆる「ザリ活用」まで成長したのである。この二点はいずれも上代におけるザ行系統否定辞とナ行系統否定辞との相違を示しているのであろう。

注：

- 1、いずれも『日本古典文学全集万葉集』（小学館）の注釈による。
- 2、他に中止法の用例150例余り、全用例の16%を、終止的用法の用例130例余り、全用例の14%を、それぞれ占めている。残りの12%ほどは、「ず」と助詞や文末の反語「ずや」などの用法である。終止的用法の「ず」と「ずや」の用法について、後に取り上げる予定であるが、他の表現は取り扱わないことにした。
- 3、『日本古典文学全集万葉集』（小学館）の頭注によれば、「原文、底本には『不鳴安良久尔』とあるが『奈』の字が落ちたとする『万葉代匠記』の説による」と言う。なお、この訓みに対して、「鳴かずあらくに」の異訓も存在する。
- 4、第一編で考察したように、ナ行系統否定辞の上接用言に制限があることを参考にすれば、本稿は「目には飽けども」の訓に従いたい。
- 5、2650番歌について、原文を「不令相者」に取り、「アハセズハ」「アハサズハ」と訓む注釈書もある。
- 6、残り一例、2500番歌の「見れど飽かざらむ{見不飽}」は「見れど飽かずけむ」の異訓を持っている。
- 7、ここに挙げている「し」と次に挙げる「せば」は「き」の活用形と考えられるが、「～ずあり(ざり)～」に下接する形の種類を重視するため、ここでは分けて挙げたのである。「ざり」の場合も同じである。
- 8、異訓のあるものは、一般的に「思はずき」とも訓まれそうな万葉集601番、609番、2601番の3例である。しかし、「～ずき」の表現は確実に存在したか否かまだ疑問が残るので、この三例はここに位置づけるべきであろう。
- 9、他の2例は、1498番歌の「来ざりし君に{不来之君尔}」に対して「来まさぬ君に」の異訓、2392番歌の「見ざりしよりは{不見有従}」に対して「見ずあらましを」の異訓がある。
- 10、また、万葉集2377番歌の「恋ひざる前に{不恋前}」と4227番歌の「降らざる雪そ{

不零雪曾}」について、それぞれ「恋ひせぬ前に」と「降らぬ雪そ」という異訓が施されている。

11、また、万葉集770番歌の「逢はざるのみそ{不相耳曾}」には「逢はなくのみそ」の異訓がある。

12、『日本古典文学全集万葉集』（小学館）の頭注による。

13、いずれも『日本古典文学全集万葉集』（小学館）の注釈による。

14、注13に同じ。

15、桜井満氏の注釈による。

16、古事記歌謡の解釈は大久保正氏『古事記歌謡全訳注』（講談社）の注釈による。万葉集2877番歌について、多くの注釈書は「いつとても恋しくないわけではないけれども…」と解釈されているが、本文に即してとらえれば、「恋せずにいる」と「あり」を本動詞として解釈したほうがよいかと思う。

17、「ず」の終止的用法については、本編の第二章で考察するつもりである。

18、表9を見て分かるように、上代においては、用例数から見れば、「ずある（ざる）」という連体形の用例は、「ずあり（ざり）」という連用形の用例よりも多く存在するのである。しかも、両者の比率は平安時代になると逆転するのである。また、上代には「ず」の次に体言がくる用例もあるが、しかし、周知のように、「百足らず」や「杖足らず」などの次に来る体言は「五十・八十・八尺・山田」などであり、それらの用法は枕詞としての用法であり、決して「ず」の連体修飾用法とは言えないであろう。次に、「ずあり（ざり）」活用の用例を、非融合形式と融合形式とに分けて整理してみると、非融合形式は、万葉集、古代歌謡などの韻文をはじめとして、続日本紀宣命のような散文にも多くの用例があることに気付く。それに対して、融合形式のもの（特に確実な用例）は、万葉集の歌にしか見られない。これは、「ずあり→ざり」という融合現象はまず韻文—音数律に規制のある文章において、先に起こっているということの意味するのであろう。その融合が頻繁に行われ、遂に後に「ざら・ざり・ざる・ざれ」というように「ザリ活用」の形式が整ったのであろう。このことは、後の平安時代において散文的な文章にも融合形式の「ざり」表現が現れるようになる、ということを通しても見られるのである。

19、第一編で考察したように、ナ行系統否定辞は、本来未然形を持たず、連用形「に」も助動詞下接まで成長しないままに衰退してしまった。

20、この両者の後退については、後に第三編で平安時代における否定助動詞の考察を通して、その一斑が伺われると思う。

第二章、「ず」の終止的用法について

上代におけるザ行系統否定辞「ず」には、前章で考察した連用修飾用法のほかに、終止形としての終止的用法もあった。「ず」の終止的用法の用例は、全部で141例があり、そのうち11例の異訓・異説のあるものを除けば、約130例ほどになる。その用例数からすれば、前編で考察したナ行系統否定辞側の「ぬ」の終止的用法と比べて、かなり頻繁に行われていた用法であると言えよう。しかし、「ず」の全用例（953例）から見れば、この時代では終止形の終止的用法は全用例のなかで14%しか占めてはおらず、後世に多く見られる「ず」の終止的用法と比べると、全用例の中で占める比重はそれほど大きくないということも言えるだろうと思う。¹⁾

この「ず」の終止的用法を考察することは、上代におけるザ行系統否定辞とナ行系統否定辞との相違を知ることと、上代におけるザ行系統否定辞の性質を知る上では、やはり非常に重要なことである。

ザ行系統否定辞「ず」の終止的用法の表現は、異訓と異説のあるものも含めて、万葉集に96例、古代歌謡に15例、続日本紀宣命に30例が得られる。その表記・異訓・異説と関連した分布は次の表10の通りである。

表10、「ず」終止的用法の分布

	仮名 表記	正訓字 異訓無	異訓・ 異説有
万葉集	19	67	10
古代歌謡	15	0	0
宣命	0	29	1

ところで、上代における「ず」の終止的用法について、特にいわゆる「打消意志」「打消推量」の意味を表すとされる助動詞「じ」と関連した場合、「古くは、ジ・ズ殆ど同意に用いられた例がかなり存する」²⁾と指摘されることがある。

そして、万葉集の歌などを見た場合、「ず」の正訓字表記の用例の中には、しばしば「じ」の異訓を持つものがある。例えば、

- 万、784、現には更毛不得言夢にだに妹が手本をまき寝とし見ば
- 万、2573、情さへ奉れる君に何をかも不云言此跡わがぬすまはむ
- 万、2920、死なむ命此者不念ただしくも妹に逢はざる事をしそ思ふ

などの用例の中の「不」は、いずれも「～ず」と「～じ」の両方の訓み方を持っている。
更に、次の日本書紀の歌、

紀、14、みつみつし 来目の子らが 垣下に 植ゑし椒 口びひく 我は忘れず
(和例破滝輸例儒) 撃ちてし止まむ
中の「われは忘れず」は、古事記歌謡の記載になると、明らかに「われは忘れじ」になっている。

記、12、みつみつし 久米の子らが 垣下に 植ゑし椒 口びひく 我は忘れじ
(和礼波和須礼士) 撃ちてし止まむ
そして、この二首の歌は、いずれも「わたしは忘れない」「わたしは忘れはしない」と解釈されているのである。³⁾

助動詞「じ」の議論をする際に、よく主語の人称を区別して「じ」の性質を考察することがある。ところが「ず」に関しては、ほとんどそのような考察がされていないようである。「じ」の場合は、主語の人称別によって、「打消意志」を表すのか「打消推量」を表すのかと意味が峻別できそうなほどはっきり分かれているようだが、「ず」の方は、そのように意識されないために、今までこのような考察が無視されてきたのではないかと思われる。しかし、これについて考察することは、ザ行系統否定辞「ず」、特に上代における「ず」にとっては、無意味なことであろうか。特にその終止形の終止的用法について考察する時は、人称に注目した方が有益なことであろうと考えられる。

そこで、話者自身が主語になる「自主」の文とそれ以外の人物や物事が主語になる「他主」の文とに大まかに分けて考察すると、「ず」終止的用法の表現は、「他主」の文に使われる場合が大多数であるということが分かる。具体的に、表10に示した確例に限ってみると、「他主」の文に使われる用例は、万葉集では51例、古代歌謡では10例、続日本紀宣命では23例であり（「ず」終止的用法の約65%を占める）、それに対して「自主」の文に使われる用例は、万葉集では35例、古代歌謡では5例、続日本紀宣命では6例である（「ず」終止的用法の約35%を占める）。

以下、「他主」の文に使われる用例を挙げておく。

万、170、島の宮勾の池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜かず {池尔不潜}

万、542、常止まず通ひし君が使来ず {使不来} 今は逢はじとたゆたひぬらし

万、1038、故郷は遠くもあらず {遠毛不有} 一重山越ゆるがからに思ひそあが為し

上の3例を見て分かるように、「ず」終止的用法がこのような文に使われたとき、「他者主語」の否定的な状態について、確実性の高い「打消判断」を表しており、後世に見られる「ず」終止的用法の表現とはあまり違わないと言えよう。

ところで、「ず」の終止的用法が、話者自身が主語になる「自主」と考えられる文に使われた場合は、どうなるであろうか。

「自主」と見られる文に使われる「～ず」終止的用法の用例は合計46例ほどあるが、その中で最も多いのは話者自身が「何かが出来ない」という状態にあることを表現するものである(34例)。例えば、

万、1153、住吉の名児の浜辺に馬たてて玉拾ひしく常忘らえず{常不所忘}

万、2752、吾妹子を聞き都賀野辺のしなひ合歎木吾は隠び得ず{吾者隠不得} 間無くし思へば

万、4322、わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れられず{余尔和須良礼受}

上に挙げた例のように、明らかに助動詞や補助動詞をもって、「可能」の意味が顕現されるものもあれば、次に挙げる例のように、形式としてこそ「可能」を意味する助動詞や補助動詞が顕現されていないが、意味的にはやはり「自分が～できない」と表現しているようなものもある。例えば、

万、56、河の辺のつらつら椿つらつらに見れども飽かず{雖見安可受} 巨勢の春野は

万、2315、あしひきの山道も知らず{山道不知} 白樞の枝もとををに雪の降られば

万、3281、…さな葛 後も逢はむと 大船の 思ひたのめど 現には 君には逢はず{君者不相} 夢にだに 逢ふと見えこそ…

万葉集56番歌の表現の中心は「巨勢の春野」であるが、それを見て「満足できない」のはやはり話者自身であり、その意味で、この表現は「自主」を持つ文に使われる「ず」の終止的用法として考えられよう。実際の文表現として、上の3例がそれぞれ「飽かず」「知らず」「逢はず」と使っているが、意味的には、それぞれ「満足できない」「分からない」「逢えない」と「可能」の意味あいが含まれていると言えよう。

上に挙げたような実際の文表現として「可能」の意味を表すものが使われているものにして、或いは文表現として「可能」の意味を表すものが使われておらず意味的に「可能」の意味が含有されているものにして、いずれも話者自身が「何かが出来ない」という状態にあることを表現していると考えられよう。そして、この34例の中では、万葉集56番歌のような「見れども飽かず」のタイプが、最も多く(12例)使われているのである。ここで想起されることは、第一編第三章で考察した、このような讚美的な意味を表す「見れど飽かぬかも」などのような表現である。以下、相似た文環境に使われる両表現の用例を挙げておく。

万、1062、…御食向ふ 味原の宮は 見れど飽かぬかも{雖見不飽香聞}

万、1065、…白沙 清き浜辺は 行き還り 見れども飽かず{雖見不飽}…

万、1711、百づたふ八十の島廻を漕ぎ来れど粟の小島は見れど飽かぬかも{雖見不足可聞}

万、1222、玉津島見れども飽かず（雖見不飽）いかにして包み持ち行かむ見ぬ人のため

万、3926、大宮の内にも外にも光るまで降れる白雪見れど飽かぬかも（見礼杼安可奴香聞）

万、4001、立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず（見礼等母安可受）神からならし

万、2159、影草の生ひたる屋前の夕影に鳴く蟋蟀は聞けど飽かぬかも（雖聞不足可聞）

万、4182、霍公鳥聞けども飽かず（雖聞不足）網取りに獲りて懐けな離れず鳴くがね

「～ど～ぬかも」と「～ども～ず」の両表現において、讚美する場面・対象・方法などが同じような用例だけであっても、上に挙げたように数々の用例が見られる。ほかに、少しずつ違いを見せる用例も少なくない。

この現象を見て単純に考えれば、「～ども～ず」の形式で「ず」が表現しているものには、「～ど～ぬかも」の形式で「ぬかも」が表現しているものと相似ているものがあると言える。「～ど～ぬかも」の形式に現れている「ぬかも」の表現は第一編第三章で考察したように「否定的な詠嘆」の意を表す表現であった。「～ども～ず」の形式が「～ど～ぬかも」の形式と相似た内容を表すことができるということは、言ってみれば、この形式の中で、「ず」一つで、「～ど～ぬかも」の形式の中で、ナ行系統否定辞の「ぬ」プラス疑問・詠嘆の助詞「かも」の合同形式に匹敵するような表現効果を持っているのだということであろう。

そして、「ず」終止的用法が使われる「自主」の文の述語に、以下のようなものがある。

万、1777、君なくはなぞ身装筋はむ匣なる黄楊の小櫛も取らむとも思はず（将取跡毛不念）

万、2586、人言を繁みと君に玉梓の使も遣らず（使不遣）忘ると思ふな

万、3132、な行きそと帰りも来やと願みに行けど帰らず（雖往不帰）道の長道を

万、4207、…遥々に 鳴く霍公鳥 わが屋戸の 植木橘 花に散る 時を未だしみ 来鳴かなく そこは怨みず（曾許波不怨） しかれども…

前に触れた、古代歌謡の中で、同じ歌が、日本書紀（14前出）の方は「われは忘れず」と記録され、古事記（12前出）の方は「われは忘れじ」と記録されいながら、歌の意味としてはあまり変わらないもの、及び「ず」と「じ」という両方の訓みを持つ他の用例はこういったものである。

以上、ザ行系統否定辞「ず」の終止的用法に関して、それが使われる文の主語を「他主」と「自主」に分けて考察してきた。特に「自主」の文に使われた場合、一部の用例においては、何らかの表現効果が加わっているように思われる。このことは、上代におけるザ行

系統否定辞「ず」の性質を究明する上で参考になる重要な事実であると考えられる。

上代におけるザ行系統否定辞「ず」の終止的用法について、もう一つ重要な特徴が見られる。つまり、万葉集を通して、「～ずと」の形で使われる用例は一例もないということである。⁴⁾しかし、平安時代になると、後に取り上げる古今和歌集だけでも「～ずと」の用例が8例も見られる。「と」という助詞が一般的に引用の助詞と言われるように、その前に現れるものは引用の内容であり、言わば、文法上終止的なものであるばかりでなく、話法上でも終止的であるものの可能性がある。上代において、「～ずと」の形が積極的に避けられたということは、「ず」の終止的用法の性質が一面から反映されているのではなかろうか。⁵⁾もちろん、このことは一つの傍証に過ぎないが、しかし、四千五百首あまりの歌もある上代の万葉集に、「～ずと」の形がたったの一例も見ないのに対して、一千百首くらいの歌しかない平安時代前期の古今和歌集になると、「～ずと」の形が八例も見られるようになるという事実は、やはり上代におけるザ行系統否定辞「ず」の性質について、何かを物語っているのではなかろうかと思う。⁶⁾

以上、本章において、上代におけるザ行系統否定辞の「ず」の終止的用法について考察してきた。

上代において、ザ行系統否定辞「ず」の全用法における比重から見れば、「ず」の終止的用法はまだそれほど主流的な用法ではないようだが、前編で見たナ行系統否定辞「ぬ」の終止的用法と比べれば、かなり一般的な用法であると言わなければならない。これは上代における両系統否定辞の相違の一つとして重要視されるべきであろう。

注：

- 1、後に第三編で取り上げる古今和歌集では、「ず」終止形の終止的用法が「ず」全用例の中で占める比率は44%に増加している。詳しいことは第三編で述べるつもりである。
- 2、奥村三雄氏「打消の推量・古典語・じ」（1964、後掲参考文献31）による。ほかに、小路一光氏『万葉集助動詞の研究』（1980、後掲参考文献72）や万葉集の諸注釈書にも、同主旨の指摘が時々見られる。
- 3、『日本古典文学大系古代歌謡集』（岩波書店）と大久保正氏『古事記歌謡全訳注』『日本書紀歌謡全訳注』（講談社）による。
- 4、古代歌謡を含んで通観しても「～ずと」になるものは次に挙げる1例しかない。
記、61、つぎねふ 山代女の 木鉄持ち 打ちし大根 根白の 白腕 枕かずけ
ばこそ 知らずとも言はめ（斯良受登母伊波米）

同じ歌は日本書紀歌謡（58番）にも再録されているが、1例のみと考えられる。

5、それに対して、純粹に「打消意志」と「打消推量」を表すとされる助動詞「じ」には、「～じと」の形が多く（50例近く）見られる。

6、上代の文献で、続日本紀宣命に「～ずと」の用例が5例ほどあるが、初見は第十三詔（1例）で、その後第二十六詔（1例）、第四十四詔（1例）、第四十五詔（1例）、第五十四詔（1例）とある。周知のように、第十三詔は天平勝宝元年（西暦749年）のものであり、万葉区分で言えば、かなり末期の時代にあたる。その頃の言語事情は既に奈良時代の言語から平安時代の言語へと変わりつつあるのであろう。平安時代に見られる「～ずと」の表現については、第三編でもう少し触れるつもりである。

第三章、「ずや（も）」の表現について

上代のザ行系統否定辞「ず」にかかわる表現として、いま一つ、この章で見る「ずや（も）」の表現がある。¹⁾同じように否定の意味をベースに持つものに主に疑問表現にかかわる助詞が加わった表現として、第一編で考察したナ行系統否定辞の「ぬ」からなる「ぬか（も）」の表現があった。その「ぬか（も）」の表現は「否定的な詠嘆」と「希求」の意味を表していた。では、ここで見るザ行系統否定辞の「ず」からなる「ずや（も）」の表現はどんな意味を持っていたのであろうか。

一、「ずや（も）」表現の意味

この種の表現は、万葉集に12例、古代歌謡に1例が見られる。その表記の仕方は「受也」「受夜」「受屋」などのような万葉仮名表記のもの（7例）もあれば、「不…哉」「不…八」「不…八方」などのような正訓字と音仮名の混合表記のもの（6例）もある。

この「ずや（も）」の表現13例の中、12例がいわゆる反語として解釈されている。例えば、

万、224、今日今日とわが待つ君は石川の貝に交りてありといはずやも（有登不言八方）

仏、20、雷の光の如きこれの身は死の大王常に偶へり畏づべからずや（於豆閤可良受夜）

このような「ずや（も）」は、いずれも「～（の）ではないか」という疑問の形式を取りつつ、実際にはその表現と相反する話者の言いたい積極的な主張を表している。これがいわゆる反語表現である。現代日本語でもそうだと思うが、この種の反語表現の成立は、その背後に、話者と聞き手（読み手も含めて）の間に了解されている歴然とした事実と、話者が置かれている社会・環境の中で成立している社会的通念乃至常識と言えるような世間的尺度が存在しているからであり、表現されている疑問形式がこれらの事実や常識にぶつけられることによって、その反動の力で逆（反対）のことが主張されるようになるのであると考えられる。²⁾

上の二首の歌に即して言えば、万葉集224番歌は、その題詞によると「柿本朝臣の死し時に、妻の依羅娘子の作れる歌」とある。つまり「柿本人麿が死んだ」という歴然とした事実があり、彼の妻がその「死」という事実に対して、「あなたが石川の貝に交じって倒れている（死んでいる）と言わないだろうか」と問いを發し、その動かし難い事実からはねかえされた反動によって、「いや、人々が皆言うのではないか」という反語表現が成立するのである。

仏足石歌20番の歌は、仏法の無常観を詠み込んだ歌である。その仏法の観念としては「

死」は「大王」に譬えられ、強力で人間の力ではどうにもならないものとされている。しかも、その「死王」は免れぬものであり、人間にはいつも連れたっていて、なんという「畏」るべきものであろう。従って、一所懸命に仏道に勤めなければならないと論しているのである。こういった仏教観念が存在しているからこそ、その発問である「畏づべからずや」が反語の「恐るべきことではないか」として成立するのであろう。

このような、反語の成立を支えている歴然とした事実、或いは社会的な通念・常識は、言わば既に存在し、完了していることがらであり、或いは人々に認められ、確認されていることがらであると考えられよう。それをわざわざ打ち消した形にし、更に問いをかけ、その問いがぶつかった動かし難い事実や通念・常識にはねかえされる反動によって、話者の言いたいことがいっそう強く主張されるのであろう。

まさに、その「既存」「完了」「確認」が文表現的に現れているように、上代の「ずや（も）」の反語表現には、いわゆる「既存」「完了」「確認」の意を持つ助動詞「ぬ」「たり」「けり」とかかわるものが多く見られるのである。

「～にけらずや」3例、

万、221、妻もあらば採みてたげまし佐美の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや（過去計良受也）

万、817、梅の花咲きたる園の青柳は蘂にすべく成りにけらずや（奈利尔家良受夜）

万、912、泊瀬女の造る木綿花み吉野の滝の水沫に咲きにけらずや（開来受屋）

「～にたら（てあら）ずや」2例、

万、4080、常人の恋ふといふよりは余りにてわれは死ぬべくなりいたらずや（奈里尔多良受也）

万、829、梅の花咲きて散りなば桜花継ぎて咲くべくなりにてあらずや（奈利尔互阿良受也）

「～けらずや」1例、

万、1457、この花の一枝のうちは百種の言持ちかねて折らえけらずや（所折家良受也）³⁾

このように、「～ずや（も）」の反語表現において「ず」に打ち消されている事態が「既存」「完了」「確認」されている事態であると、文表現的に助動詞「ぬ」「たり」「けり」などによって表現されているようなものは、上代の「ずや（も）」表現の半数に見られるのである。このことは、反語を表す「や」が一般的に活用語の已然形に付くということと考え合わせると、「～ずや（も）」の表現に見られる現然性と確定性がいっそうはっきりするのであろう。

万、3604、妹が袖別れて久になりぬれど一日も妹を忘れておもへや（和須礼互於毛倍也）

万、791、奥山の磐かげに生ふる菅の根のねもころわれも相思はずあれや（不相念有哉）⁴⁾

上に考察したように、形式的に「～にけり」「～にたり」「～けり」と表現されている既存の事実、或いは社会的な承認を得ている通念・常識に対しても、ザ行系統否定辞「ず」が、それを一度打ち消すことが出来るというところに、「～ずや（も）」の反語表現として成立する要因の一つがあるのではなかろうかと考えられる。当然、本章の最初に見た万葉集224番歌、仏足石歌20番及びその他（万葉集20番、160番、424番、3250番）など文表現的に「ぬ」「たり」「けり」が見られないものについても同じように解釈されるべきであろう。そして、これはまた上代におけるザ行系統否定辞「ず」の性質を知る上において、重大な事実の一つでもあろう。

反語表現の議論をする時、ともすれば、論者の視点が文末終助詞の「や」と「か」に集中するきらいがあるようである。⁵⁾これは当然反語表現を議論するとき不可欠な視点ではあるが、しかし、上代において、打消とかかわる反語表現は、決して「や」一つで成立するものではなく、必ず「ずや（も）」の形でなければならないという事実から見ても、ザ行系統否定辞「ず」が果たしている役割を一段と重視すべきではないかと思う。⁶⁾

ところで、「～ずや」の形で、反語表現にならないものが、万葉集に1例ある。

万、2706、泊瀬川速み早瀬を掬ひ上げて飽かずや妹と（不飽八妹登）問ひし君はも

この歌では「飽かずや妹と」の後に「問ひし（問師）」と使われているので、「飽かずや妹」というのは、その「問ひ」の内容にほかならない。つまり、この「ずや」は、「他に対する質問（他問）」を表していると言えよう。この「飽かずや」は、直訳すると「飽くことはないか」ということになり、意識すると「もっと欲しいか」ということになる。つまり、相手が「飽かない」状態にあると話者が判断し、その事実を相手に示して、「そうでしょうか」と確認風に聞いている表現であると言えよう。⁷⁾確認風の質問表現と反語表現との関係をいっそう明らかにする必要があると思われるが、本稿の主旨から離れてしまうのでそれ以上深入りしないことにする。

二、「ずや（も）」の表現を通してザ行系統否定辞上接用言の幅を見る

この「ずや（も）」の表現を通して、上代におけるザ行系統否定辞とナ行系統否定辞とのもう一つの相違を見ることが出来る。

第一編の考察によって分かるように、上代におけるナ行系統否定辞の上接用言は、動詞・形容詞・形容動詞の三大用言と補助動詞及び受身・可能・使役・尊敬を表す助動詞に限られていた。これらの上接用言は、当然ザ行系統否定辞においても同じように見受けられる。以下それらの用例を簡単に示しておく（紙数の関係で「ず」が使われる部分だけを示

し、他の部分は省略することにした)。

動詞四段活用につくもの「妻をも枕かず{都麻乎母麻可受}」(万、4331)、動詞下二段活用につくもの「われには告げず{吾尔波都気受}」(万、4011)、動詞上二段活用につくもの「一日もおちず{一日毛於知受}」(万、3756)、動詞上一段活用につくもの「見ず久にして{美受比佐尔指天}」(万、3547)、動詞カ行変格活用につくもの「今年来ずとも{許登之許受登母}」(万、3406)、動詞サ行変格活用につくもの「物思もせず{毛乃母比毛世受}」(万、4425)、動詞ラ行変格活用につくもの「秋にあらずとも{安吉尔安良受得物}」(万、4126)、動詞ナ行変格活用につくもの「命死なずは{命不死者}」(万、504)、形容詞カリ活用につくもの「命も惜しからず{寿母不有惜}」(万、785)、形容動詞ナリ活用につくもの「直ならずとも{多太奈良受等母}」(万、4295)、補助動詞「得」につくもの「数へ得ず{可蘇倍衣受}」(万、4094)、補助動詞「ます」につくもの「待てど来まさず{雖待来不益}」(万、3280)、補助動詞「あふ」につくもの「寄りも肯へず{不肯縁}」(万、2822)、補助動詞「たまふ」につくもの「女は治め賜はず{女不治賜}」(宣、13)、受身の助動詞につくもの「人に知らえず{人尔不知所}」(万、1018)、可能の助動詞につくもの「世に忘れず{余尔和須良礼受}」(万、4322)、「常忘れず{常不知所}」(万、2711)、「寝ねらえず{宿不知所}」(万、2593)、使役の助動詞につくもの「風に遇はせず{風尔不令遇}」(万、1021)、「安眠寝しめず{安寐不令宿}」(万、4177)、⁸⁾尊敬の助動詞につくもの「妹は逢はさず{妹相佐受}」(万、1692)、ハ行延言の「ふ」につくもの「障まはず{都都麻波受}」(万、4331)、などがある。

そして、ザ行系統否定辞「ず」の上接用言は、上に挙げたもののほかに更に幾つか見られるのである。それは前節で「ずや(も)」の意味を考察するときに既に見られた、助動詞「べし」「たり」(「にたり」を含む)「けり」(「にけり」を含む)が「ず」の上に来るものである。前節において用例を示したので、ここでは簡単に再掲しておく。「畏づべからずや{於豆間可良受夜}」(仏、20)、「なりにたらずや{奈里尔多良受也}」(万、4080)、「過ぎにけらずや{過去計良受也}」(万、221)、「折らえけらずや{所折家良受也}」(万、1457)などである。なお、ザ行系統否定辞においては、「ず」の上に助動詞「り」が来る用例も以下のようなものが見られる。

万、2282、長き夜を君に恋ひつつ生けらずは{不生者}咲きて散りにし花にあらましを

これらのものはいずれもナ行系統否定辞の上接用言に見られないもので、しかも後世の否定助動詞の活用形におさまった「ず」にもない用法であるから、⁹⁾上代におけるザ行系統否定辞の、ナ行系統否定辞と相異なる特殊性として考えられるべきであろう。¹⁰⁾

以上、本章において、上代におけるザ行系統否定辞の「ず」からなる「ずや(も)」の

表現について考察してきた。

上代において、ザ行系統否定辞の「ず」（否定の意をベースに持つもの）が助詞「や（も）」（主に疑問表現と関連するもの）と一緒にした場合、第一編で考察したナ行系統否定辞の「ぬ」（否定の意をベースに持つもの）が助詞「か（も）」（主に疑問表現と関連するもの）と一緒にした場合とは違い、「否定的な詠嘆」や「希求」を表すのではなく、「反語」ないし「他に対する質問」を表すのである。もちろん、その中に助詞「や」と助詞「か」の性質の相違も関連していると思うが、上代におけるザ行系統否定辞とナ行系統否定辞の相違の一つとして、やはり重視すべきであろうと考える。

更に、ザ行系統否定辞の上接用言から見れば、ナ行系統否定辞の場合にも見られた、動詞・形容詞・形容動詞の三大用言と補助動詞及び受身・可能・使役・尊敬を表す助動詞のほかに、更に助動詞「べし」「り」「たり」「けり」なども見られるのである。これはまた、第一編で考察したナ行系統否定辞の上接用言に上代においても既に制限があったということと、違いを示しているのであろう。

注：

1、一般的には、助詞「や」が活用語の終止形に付くと考えられているようだ。例えば、
万、3268、…大口の 真神の原ゆ 思ひつつ 帰りにし人 家に到りきや（家尔
到伎也）

従って、「ずや（も）」の表現の「ず」も一般的に終止形に準じて考えてもよいかと思うが、本稿では、上代におけるザ行系統否定辞「ず」が基本的に活用形を持たないという立場を取っているので、「ず」の何形にこだわる必要がないと思い、また、ナ行系統否定辞の「ぬか（も）」の表現との対照を考えて、独立して扱ったわけである。

2、現代日本語の反語表現について、筆者は修士論文『現代日本語の疑問表現についての研究』（昭和60年1月神戸大学大学院文学研究科に提出）において考察を行ったことがあり、同じように説明すべきであると考えた。

3、鶴久氏・森山隆氏『万葉集』によれば、この歌の最後の一句を「をれにけらずや」と訓む説もある。

4、この歌の最後には「～ずあれや」（「どれや」の異訓もある）と使われており、そこから「ずあれや」（「ず」プラス形式用言「あり」の已然形からなる表現）と「ずや」（「ず」一つからなる表現）との関連性が伺われるのも興味深いものである。

5、例えば、佐伯梅友氏「『や』『か』について」（1928、後掲参考文献77）、澤瀉久孝

氏「『か』より『や』への推移」（1940、後掲参考文献30）、阪倉篤義氏「反語についてーヤとカの違いなど」（1958、後掲参考文献92）、酒井秀夫氏「万葉集の『や』（一）ー已然形につく『や』ー」（1968）、「万葉集の『や』（二）」（1969）（後掲参考文献88、89）などが皆そうである。

6、実は東歌であって、用例に出すには控えるべきものであるかもしれないが、万葉集には、解釈の違いはあるものの、「反語表現」として解釈される「ずかも」の表現も1例ある。

万、3572、何と思へか阿自久麻山のゆづる葉の含まる時に風吹かずかも〔可是布可受可母〕

この歌の最語の一句にある「可是布可受可母」の「受」について、「敬語」の「す」と解釈する説もあるが（「敬語」に解釈されるものとして、武田祐吉氏の『万葉集全註釈』、『日本古典文学大系万葉集』などがある）、「打消」の「ず」と解釈する説もある。そして「打消」と解釈される時、「風が吹かないといえようか」「どうして風が吹かないことがあるか」「風が吹かずにおうか」などと「反語」風に説明されるものが多い（「打消」で「反語」と解釈されるものとしては、雅澄の『万葉集古義』、鴻巣の『万葉集全釈』、『日本古典文学全集万葉集』、澤瀉久孝氏の『万葉集注釈』、中西進氏の『万葉集全訳注』、桜井満氏の『現代語訳対照万葉集』などがある）。それが「反語」として解釈できるのは、やはり打消判断を表す「ず」に、疑念を表す「かも」をかけることによって成り立っているからであろう。第一編で考察したナ行系統否定辞「ぬ」に「か（も）」がついても（「ぬか（も）」の形で）「希求」や「否定的な詠嘆」表現にはなるものの、決して「反語」表現にはならない、ということと照らし合わせれば、なおのこと反語表現におけるザ行系統否定辞「ず」の果たす役割が分かるであろう。

7、現代日本語でも「ありませんか」と否定形式を取った質問が、単に「ありますか」という質問より、確認の気持ちが強いように感じられる。このことについて、筆者は注2で挙げた修士論文で考察したことがある。上代の「ずや」が質問に使われた場合も、同じように感じられるのではないかと思う。

8、第一編でナ行系統否定辞の上接項目を考察したとき、使役の助動詞「す」に下接するものが見られたが、「しむ」に下接するような用例は見られなかった。

9、第三編で触れることだが、「べからず」の用法は上代以降にも見られるものである。

10、第一編第五章の注8のところでも触れたが、竹内美智子氏（1977、後掲参考文献104）では、「～けらずや」などの表現を取り上げ、一般の否定表現と見るべきではないと述べた。確かに、反語表現はそれだけの特殊性があるが、しかし、本稿で考察しているように、「ずや（も）」がザ行系統否定辞「ず」の一表現であるということは否定できないと思う。更に、「ずは」などの表現において、助動詞「り」に下接する事実などに関連して考えれば、やはり上代におけるザ行系統否定辞の特殊性として重視すべきであると思う。

第四章、「ずは」の表現について

ザ行系統否定辞「ず」にかかわる上代特殊表現の問題として、「ずは」の表現がある。「ずは」（或いは「ずば」）の形そのものは、後の時代の中世・近世にも見られるが¹⁾、上代の特殊な意味特性を持ついわゆる一種の「ずは」の表現は後世に見られない。この問題は日本国語学史上において、古典的な問題とも言え、研究の歴史も長く、それに取り組んだ学者も少なくない。その研究史の概観について、ここでは山崎馨氏の文章から引用させていただく。

『万葉集』には打消助動詞「ず」の連用形に係助詞「は」が伴われて「ずは」となる形が幾つも見えている。これは古くから「ずば」（打消助動詞「ず」の未然形＋接続助詞「ば」）と訓まれて、近世の学者にもいろいろな説があり、難解の語法として問題になっていたが、本居宣長が『詞の玉緒』において「…せんよりは」の意味であると説くに及んで、はじめて統一的な解釈が与えられ、以後は多くの学者がこれに従ってきた。その間、「ずば」の「ば」が明らかに清音の仮名で示されている例（5・八六四、20・四四四一）もあるところから、これを「ずは」と訓む説も出ていた。このような諸説の後に、語形としては「ずは」であるべきこと、意味としては「…ずしては」であるべきことを説かれたのが橋本進吉博士であった（『上代語の研究』－引用者注）。しかし、橋本博士の明快な論証があったにも拘らず、その意味については依然として不動の定説とはならなかったようで、その後にもなお慎重な発言をする学者が跡を絶たないのである（林大「万葉集の助詞〈万葉集大成6〉」、大岩正伸「奈良朝語法の一解」〈国語と国文学17・3〉、鈴木一彦「打ち消して残るところ」〈国語学50〉、鈴木義和「ずは」論再考〈国語学130〉－引用者注）。それは要するに、橋本博士が却けられた「仮定条件として解くこと」を、場合によっては認めてよいのではないかと考えさせるような例（2・八六、15・三六三〇）が存在するところにかかっているものと思われるのである。²⁾

引用が長くなったが、この概観を通して、「ずは」の問題に関する歴史の深さ、研究層の厚さが分かると同時に、この問題はいまだにすっきりした解決が見られないということもよく分かる。³⁾

特に、近年来、いわゆる一種の「ずは」と普通の順接仮定条件とされる「ずは」を統一的に解釈しようとする研究が目立ち、「ずは」の研究に係助詞「は」の研究と結び付けて、「ずは」の表現をすべて再分類し、その意味的なバラエティに係助詞「は」が持っている意味特質から導き出そうとする試みが見られている。⁴⁾

このような研究方向は、もちろん「ずは」の本質を明らかにすることにとって、極めて重要な視点であると思われる。しかし、今日まで研究されてきた結果から見れば、係助詞「は」は、上代から後世まで、それほど質的な変化が見られないと考えられているようで

ある。⁵⁾もし、上代における「ずは」の形式が持つ意味的なバラエティを、すべて係助詞「は」の性質に背負わせてしまえば、後世において係助詞「は」があまり変質していないのに、何故上代以後にいわゆる一種の「ずは」が消滅したのか、という問題をかえって解釈しにくくするきらいがあるのではないかと思われる。そして「ずは」の表現は「ず」と「は」からなるものであるから、そこで、解決の手掛かりとして、「は」にだけ注目するのではなく、上代におけるザ行系統否定辞「ず」の特殊性にその表現性を求める方向もあるのではないかと思うのである。

尾上圭介氏がかつて、あらかじめ「ずは」に「選択」や「仮定条件」の意味があるのではなく、「もともと前句と後句の間に潜在していた意味関係が『は』によって顕在化し、自覚されるのである」と指摘されたことがある。⁶⁾この性質は、恐らく上代の「ずは」に限らず、後世に見られる「ずは」の表現に関しても原理的に言えることであろう。問題は、上代において、何故後世に見られない一種の「ずは」の表現が存在したのか、「ずは」が使われる上代の表現においては、その前後句がどんな潜在的な意味関係を持っていたのか、ということであり、それを明らかにすることは、上代におけるザ行系統否定辞「ず」の性質を知ることにとっても、非常に重要なことである。

一、普通の順接仮定の「ずは」

「ずは」の表現を、取りあえず従来の分類の仕方に従って、普通の順接仮定とされる「ずは」と、いわゆる一種の「ずは」とに分けて考察していきたい。

まず、普通の順接仮定条件と解釈される「ずは」の用例は万葉集から34例、古代歌謡から1例が得られる。その中の3例に異訓があり、確実なものは32例ほどになる。以下実例を挙げておく。

万、94、玉くしげみむまど山のさなかづらさ寝ずはつひに（佐不寐者遂尔）あり
かつましじ

万、3401、中麻奈に浮き居る船の漕ぎて去ば逢ふこと難し今日にしあらずは（家
布尔思安良受波）

万、951、見渡せば近きものから石隠りかがよふ珠を取らずは止まじ（不取不已）

表記の方は、大部分のもの（22例）が万葉集94番歌のように「不…者」の形で表記され、6例が万葉集3401番歌のように「受波」と完全に万葉仮名表記になっており、また4例が万葉集951番歌のように正訓字「不」だけで表記されている。

ところで、この32例のものを通観すると、大まかに順接仮定条件と言われるが、一例一例細かくチェックすれば、それほど均一的に解釈できるようなものでもなさそうである。一口に順接仮定条件とはいっても、その内実は必ずしも同じではないようなものが含まれているのである。

まず、「ず」でくくる前件と後件の主語が同一であると考えられるグループ（18例）と、前後件の主語が異なると考えられるグループ（14例）とに分けられる。

前後件の主語が異なると考えられるグループの用例について見れば、今までのように極く普通の順接仮定条件として解釈されるものがある。

万、2484、君来ずは〔君不来者〕形見にせむとわが二人植ゑし松の木君を待ち出でむ

万、2929、夕夕にわが立ち待つにけだしくも君来まさずは〔君不来益者〕苦しかるべし

万、3841、仏造る真朱足らずは〔真朱不足者〕水たまる池田の朝臣が鼻の上を掘れ

これらの用例における前後件の関係は、前件のことが行われなければ（行われなかったら）、後件のことが起こるだろう（「～しよう」意志、「～しなさい」命令なども含まれる）という最も論理的に（「現代人にとっては」と付け加えるべきかもしれない）考えやすい順接仮定条件の意味関係になっている。このようなものはおよそ10例ある（他に万葉集269、2632、2773、3282、3401、3859、4408など）。

ところで、前後件の主語が異なると考えられるグループの用例の中には、更に次のようなものが見られる。

万、1770、三諸の神の帯ばせる泊瀬川水脈し絶えずは〔水尾之不断者〕われ忘れめや

万、2883、外目にも君が姿を見てばこそわが恋止まめ命死なずは〔命不死者〕

このようなものは、従来やはり普通の順接仮定条件の「ずは」として説明されてきた。しかし、その意味を解釈する時は、「～しなければ」或いは「～しなかったら」と解釈しにくい一面があるようで、上の二首の歌も、それぞれ「三諸の神が帯となされる泊瀬川の、流れが絶えぬかぎり、わたしは君を忘れようか」（1770）⁷¹と「遠目にでも君の姿を見た時こそわたしの恋も静まるだろう。命さえ絶えないかぎり」（2883）⁸¹と解釈したほうが、よりいっそう詠み手の気持ちにぴったりするように思われる。

つまり、そこに使われている「ずは」は「～しなければ」と普通の順接仮定条件に解釈されるのではなく、「～ないかぎり」と解釈されて始めてその歌の本当の意味が読み取れるのであった。このようなものはおよそ4例ある（他の2例は万葉集3014、4003である）。

それでは、この前後件異主語という同グループの中での二つの違ったタイプにはどういふ違いがあるのであろうか。

実は両者においては、前件の「ず」によってくくられていることからの性質が違うのである。最初に触れたタイプでは、「～ず」までの前件は「君が来る」「仏を造る真朱が足りる」というような普通にありうることを打ち消した形で条件にするのであり、それに対して、後のタイプでは、「水脈が絶える」「命が死ぬ」というような普通で考えれば、ほ

とんどありえない、或いはありえても可能性が非常に薄い（「死ぬ」こともそう簡単なことではない）ことを打ち消した形で条件にしたものである。⁹⁾

次に、前後件に主語が同一なもの、つまり主語が変わらないと考えられるグループのものを調べてみる。実はその中にもやはり上の前後件異主語のグループと同じように二つのタイプが見られる。

一つは、「ず」でくくる前件は普通にありうることが打ち消されているものである。

万、3250、…末つひに 君に逢はずは {君丹不会者} わが命の 生けらむ極
恋ひつつも われは渡らむ…

万、950、大君の境ひたまふと山守すゑ守るとふ山に入らずは止まじ {不入者不
止}

このようなものは凡そ14例（歌13首）ある（他に万葉集94、411、951、1117、1317、1893、2640、2834、3711、4039、琴歌譜8など）。これらのものの前件の「ずは」はやはり「～しなければ」或いは「～しなかったならば」と普通の順接仮定条件に解釈される。この中で特に950番歌のような「～ずは～じ」の形が多く（9例）、一種成句的な表現のようになっている。¹⁰⁾

そして、「ず」でくくる前件は普通にありえないことが打ち消されているものは3例ある。

万、4441、立ちしなふ君が姿を忘れずは {和須礼受波} 世の限りにや恋ひ渡りな
む

万、504、君が家にわが住坂の家道をも吾は忘れじ命死なずは {命不死者}

万葉集4441番歌は「ずは」の問題で一躍有名になったとさえ言える歌である。かつて橋本進吉博士が、この歌の「ずは」を「ずして」と解釈し、一種の「ずは」をすべてこれに準じて律しようとしたのである。ところが、それ以後の学者は、しばしばこの歌を問題にし、一種の「ずは」と相入れないものとして、普通の順接仮定条件のグループに戻すべきだと主張されてもきた。¹¹⁾しかし、普通の順接仮定条件に戻したところで、橋本博士が最初に指摘したように、歌中の「忘れずは」を「忘れなければ」と解釈すれば、歌の意味としてはしっくりしないのである。実は、この歌はやはり「～しないかぎり」と解釈されるべきものである。その解釈については、米山敬子氏（1983）の説を引用させてもらう。

この歌は、朝集使大原真人今城に対する餞である。別れに際しての言葉には先の（56）

「忘れぬや」（本稿前掲万・1770—引用者注）がある。「忘れぬ」は、確信を持って発する誓約であろう。そこには「忘れる」ことへの不安は微塵もないであろう。「忘れずは」は、「忘れる」ことを不安に思っている言葉ではないし、「忘れる」ことへの不安から逃れようと願う歌では勿論ない。この歌の趣旨は「世の限りにや恋ひ渡りなむ」にある。上京する朝集使に対して、「あなたのことを忘れぬ限りは、この世限りあなたを恋い続けることでしょうよ。」という、媚態を含んだ別れの挨拶である。「忘れ

ずは」は「忘れぬ限りは」の意であろう。¹²⁾

このような「～しない限り」は当然一種の意識だが、「ずは」がそこで果たしている役割は、やはりほとんどありえない、或いは不可能なことを打ち消した形で後件の条件にする、ということである。

万葉集504 番歌では、先に見た前後件異主語の用例に見られる「命死なずは」が使われている（もう1例は万葉集3066番歌である）。

ところで、前後件同一主語であると考えられるグループに、いま一つ違ったタイプになるものが1例ある。

万、586、相見ずは（不相見者）恋ひざらましを（不恋有益乎）妹を見てもとな
かくのみ恋ふるはいかにせむ

この歌に「～ずは～ましを」が使われていることから分かるように、一種の反実仮想を表す表現だと言える。意味として「もし～しなかったら…しない（する）のに」というふうに解釈される。歌の後半に「かくのみ恋ふる（如此耳恋）」と使われているのを見れば分かるように、現実として詠み手は「恋している」に違いない。そうすると、前件はつまり、後件で表現されている現在の事実を引き起こす原因・理由になると考えられることがらを敢えて打ち消した形で条件にするのであり、それが、この「ずは」が果たしている役割であると言えよう。「～したから～現在…している（しないでいる）、もし～しなかったら～現在…しない（する）のに」というような意味構成になっているのであろう。

このような意味での反実仮想の表現は、当然上代に限らず、後世においても、次の古今和歌集の歌が示すように同じく見られる。

古、678、あひみずは恋しきこともなからまし音にぞ人をきくべかりける¹³⁾

それでは、上代においてこのような後世にも見られる反実仮想の前件になる「ずは」の用例は上の一例だけであろうか。私見によると、しばしば、いわゆる一種の「ずは」の用例と見なされる次の2例も同類のものとして考えるべきではないかと思う。¹⁴⁾

万、620、初めより長くいひつつ（長謂管）たのめずは（不令侍者）かかる思に
逢はましものか（相益物歎）

万、3630、真楫貫き船し行かずは（布衾之由加受波）見れど飽かぬ麻里布の浦に
やどりせましを（也杼里世麻之乎）

特に万葉集620 番歌の前句に「いひつつたのめずは」と使われているためか、ややもすると、いわゆる一種の「ずは」によく現れる「恋ひつつあらずは」とまったく同類視しがちになるのであるが、しかし、後句を読めば分かるように、「かかる思に逢はましものか（如是念二相益物歎）」とあって、詠み手は現在「かかる思」（こんなにひどくつらい思い）をしているのであり、従って、この歌の本意は、やはり「最初から、いつまでもなどと頼りにさせるようなことを言わなかったら、こうした嘆きに会うまいものを」¹⁵⁾と解釈されるべきで、普通の反実仮想の表現と考えられよう。

万葉集3630番歌では、歌だけで見るなら詠み手の現実にある状態がよく分からないが、題詞を読めば、「周防国の玖河郡の麻里布の浦を行きし時に作れる歌」とあり、詠み手が乗っていた船は麻里布の浦に止まらずに過ぎ去ったということが分かる。つまり、いくら見ても飽きない麻里布の浦を眼前に見ながら止まらなかったという現実を踏まえて詠んだのがこの歌であると考えられるから、この歌はやはり「梶を通して、舟さえ行かなかったら、見飽きない麻里布の浦に仮寝をしように」¹⁶⁾と普通の反実仮想の表現に解釈されるべきであろう。

以上のように、普通の順接仮定条件とされる「ずは」の前件と後件の内実を見ると、それほど均一的なものではないということが分かった。「ずは」でくくる条件句は、少なくとも、(a)、普通にありうることを打ち消して条件にする、(b)、普通にありえないことを打ち消して条件にする、(c)、後件で言う現実を引き起こす原因・理由となることを打ち消して条件にする、という三種類に分けられる。それぞれの前後件の意味は、結局「～しなければ」、「～しないかぎり」、「もし～しなかったら」、と別々に解釈されてこそびったりするかもしれないが、これらの意識は前後件のことごとの間に潜在的に存在している意味関係を翻訳したものに過ぎず、「ずは」という言語形式が果たしている役割（「ず」があることがらを打ち消し、「は」がそれを後句に結び付けて両句の潜在的な関係を顕在化すること）はみな同じである。そして、第三種類の反実仮想と解釈されるものの中の二例（万葉集620番と3630番）がしばしば一種の「ずは」に見なされることが示されるように、これらのものの表現性質には、次節に見るいわゆる一種の「ずは」と連続するものもあるであろう。

二、一種の「ずは」

さて、次にいわゆる一種の「ずは」の方を取り上げてみる。前節のように、橋本博士が「ずして」と解釈される万葉集4441番歌を「～しないかぎり」と解釈し、橋本博士以後の学者がしばしば一種の「ずは」と見なした万葉集620番歌と3630番歌を後世にも見られる普通の反実仮想の意味と解釈すれば、残りのいわゆる一種の「ずは」の用例は、万葉集から28例、古代歌謡から2例が得られて、合計30例になる。¹⁷⁾

これらのものは果たして均一的に解釈されるであろうか。そして、今まで特殊視されてきたその特殊性は一体どんなものなのだろうか。「ずは」が使われる前後件の間にどんな関係が見られるのであろうか。

万、86、かくばかり恋ひつつあらずは（恋乍不有者）高山の磐根し枕きて死なましものを

万、734、わが思ひかくてあらずは（如此而不有者）玉にもが真も妹が手に巻かれむを

万、2282、長き夜を君に恋ひつつ生けらずは（不生者）咲きて散りにし花にあら
ましを

この中で特に万葉集86番歌のように「恋ひつつあらずは」と使われるものが最も多く、歌中のものと歌末のものを合わせると18例もある（他に歌中のものには万葉集115、120、544、722、726、2693、2765、2913、3205、4347、歌末のものには万葉集1608、2254、2256、2258、2636、2646、2733などがある）。これらのものは歌中にあるにしろ、歌末にあるにしろ、「ずは」と呼応する後（前）句の述語表現を見ると、「～ずは～ましを」（6例）、「～ずは～ましものを」（4例）、「～ずは～む」（4例）、「～ずは～まし」（2例）、「～ずは～べきを」「～ずは～てしかも」（1例ずつ）などとなっている。¹⁸⁾このような前後句の関係は、前節の最後で見た反実仮想の表現と相似た形式をなしていると言える（これはまた、学者によっては前節で考察した万葉集620番と3630番をしばしば一種の「ずは」と同類視して論じられる原因なのであろう）。

しかし、一口に反実仮想的とはいっても、ここに見る反実仮想的な表現と前節に見た反実仮想の表現とは決して全く同じものではない。先にも述べたように、前節に見た3例の反実仮想の表現は、詠み手がいる現実に対して、その現実のことを引き起こす原因・理由になると考えられることを打ち消し、それを仮に条件にして、後句と結び付けているような反実仮想の表現である。それに対して、ここに見る反実仮想的な表現と言えるものはどうであろうか。

万葉集86番歌に「かくばかり（如此許）恋ひつつあらずは」とあることによって分かるように、詠み手がいる現実、やはり現在「このように恋に苦しんでいる」のである。ただし、前節に見た反実仮想の表現と違うところは、詠み手がいる現実を引き起こす原因・理由になることがらを打ち消して前件にするのではなくて、まさにその現実のことそのものを打ち消して後件に結び付けるということであり、それがこの反実仮想的な表現の特殊性と言えよう。¹⁹⁾

「恋ひつつあらずは」以外に挙げた万葉集734番歌の「かくてあらずは」の中の「かくて」と2282番歌の「生けらずは」の中の「ら」（助動詞「り」の未然形）は、いずれも詠み手が直面している現実を打ち消しているのだということを形式的に保証しているものであろう。この特徴が、前に見た普通の反実仮想の表現と大きく違うところである。その意味で、ここに見られる表現を特殊な反実仮想的な表現ととりあえず呼んでおこう。

そして、形式的に「かく」とか「つつ」とか「り」などが見られない一種の「ずは」のそのほかの用例についても、やはり皆それらに準じて解釈すべきであろう。

万、864、後れ居て長恋ひせずは（那我古飛世殊波）御園生の梅の花にもならましものを

万、343、なかなか人にあらずは（人跡不有者）酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ

万、1515、言しげき里に住まは {里尔不住者} 今朝鳴きし雁に副ひて去なまし
ものを

万葉集864 番歌では、歌の前に長い書簡文が添えられている。それを読めば分かるように、歌の作者は遠方に行っている恋人に恋心を寄せているのである。「しかし筑紫と奈良の間には、青海原が地を分かち、白雲が天を隔てています。むなしくもひたすらお慕っているばかりで、どのようにしてこの苦しい胸中を慰めたものでしょう。」²⁰⁾と作者は手紙の中で訴えている。従って、歌の中で歌っている「後れ居て長恋ひ」することは、まさに作者が直面している現実そのものだと言える。

万葉集 343 番歌の「人とあらずは」も言うまでもなく、詠み手がこの世に生まれてきた「人」であるから、「人とあらずは」は、つまりこの「人である」という現実を打ち消して、それを後句に結び付けているのである。万葉集1515番歌も詠み手が実際に「言しげき里に住」んでいることが「～ずは」の打ち消している内容になっているのであろう（このようなものは他に1515<一は云はく>、2743、2743<或る本の歌に曰く>、3086などがある）。

ところで、このような特殊な反実仮想的な表現のように、前件において、現実にあることを打ち消した形で、それを後句に結び付けることになれば、前後件の意味関係にはどんなことが起こるのであろうか。

普通の反実仮想の表現においては、後件が表す現実そのものは定まっており、前件において、その現実のことを引き起こす原因・理由となることを打ち消しても、定まっている現実が変わるわけがないから、結局「もし～しなかったら～する（しない）のに」、しかし、「～したから～現在～している（していない）のだ、なんと不本意だ」という正に反実仮想そのものの意味関係が成立する。

しかし、一種の「ずは」で見られる多くの特殊な反実仮想的な表現では、定まっている現実そのものが前件において打ち消されているのである。そのような現実が打ち消されて、後件に何か定まるようなことが想定できるかということ、決してそうではないのである。この定まっている現実を打ち消すことによって、後件にはむしろ定まらない選択可能なことがらが無数に出てくると予想される。

一種の「ずは」の中で一番多く使われる「恋ひつつあらずは」と呼応する後件（それが後句に使われた場合、それと呼応する前件）を並べてみると、「高山の磐根し枕きて死ぬ」「追ひ及く」「秋萩の咲きて散りぬる花にある」「紀伊の国の妹背の山にある」「石木にもなる」「君が家の池に住むとふ鴨にある」「朝に日に妹が履むらむ地にある」「刈薦の思ひ乱れて死ぬ」「死ぬ」「田子の浦の海人なる」「汝が佩ける大刀になりても斎ふ」「秋萩の上に置きたる白露の消かも死ぬ」「秋の穂をしのに押し靡べ置く露の消かも死ぬ」「秋萩の枝もとををに置く露の消かも死ぬ」「剣刀諸刃の上に行き触れて死ぬ」「泛子の緒の浮かれ去ぬ」「島の荒磯にある」などとある。

文献に残る歌の数には限りがあるので、以上のように後件（或いは前件）の選択は限られているようにも見えるが、想像しようと思えば、恐らくより多く多種多様に想像できるであろう。このように後件（或いは前件）に現れ得る定まらない、いわば選択可能なことの中から、詠み手たちがそれぞれ自分の気持ちに一番合うことがらを決めて歌い挙げているのであろう。このように選択可能な、いわば無数のことの中から詠み手が一つ選んで前件と結び付けているのだから、結び付けられた前後件には結局一種の「選択」の意味が生じたのではなからうか。²¹⁾

つまり、いわゆる「選択」と解釈される意味は、何も「ずは」という形式が予め持っているのではなく、その歌に現れている前後件のことさらに、潜在的に含まれている意味が、条件と結果のように結び付けられたことによって、結果的に帯びた意味に過ぎない。「ずは」という言語形式自身が果たしている役割は、相変わらず、あることがらを打ち消し（「ず」の役割）、それを後件に結び付けて両句の間に存在する潜在的な関係を顕在化する（「は」の役割）ということである。それを反実仮想風に解釈すれば「もしこの苦しい現実のことを打ち消すことができるならば～（いろいろ可能性があるが、私は）～したいのに」というふうにも解釈できるが、しかし、現実やはり現実で、それを打ち消すのはあくまでも詠み手の理想に過ぎず、それを打ち消したところで、実際の現実が変わるわけではない。そこで結局「～（気持ちとしてこの苦しい現実を打ち消したいが、それができなくて、本当は）こうするよりは～（いろいろ可能性があるが、私は）～したいのに」という本居宣長のように「～よりは～」というふうにも訳しうるのである。²²⁾しかし、橋本博士を初め、諸先学が指摘されたように、それは、ただ一種結果的な意識に過ぎず、決して文法的な解釈ではあるまい。文法的には「ずは」の役割は上に述べたように少しも変わっていないと思われる。

ところで、いわゆる一種の「ずは」とされる用例には、また次のような3例がある。

万、338、駿なき物を思はずは {物乎不念者} 一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし

記、38、いざ吾君 振熊が 痛手負はずは {伊多互淤波受波} 鴉鳥の 淡海の 海に 潜きせなわ

紀、29、いざ吾君 五十狭茅宿祢 たまきはる 内の朝臣が 頭椎の 痛手負はずは {伊多氏於破孺破} 鴉鳥の 潜きせな

この3例を上に見た特殊な反実仮想的な表現と解せる他の一種の「ずは」の例と比べた時、どこかが違うということに気が付く。²³⁾つまり、「ずは」の「ず」で打ち消した部分は、今現在詠み手が直面している現実とは必ずしも言えないのである。

万葉集338番歌については、現実的に「つまらない物思い」をしていること、その現実を打ち消して云々、と一応解釈も出来ないこともないが、これからそういう「つまらない物思い」をしないつもりなら、一杯の酒を飲むのがよい、と解釈した方がもっと歌の意味

としてすっきりするようである。

記紀歌謡の歌になるとなおさらそうである。現実としては、決して既に「痛手を負って」いるわけではない。古事記の歌の後にある「と歌ひて、即ち海に入りて、共に死せたまひき」という記述を読んで分かるように、その歌に出ている「ずは」は、今まで見てきた他の一種の「ずは」が使われている用例のように、現実にもうあることを敢えて打ち消した形で、それを後件に結び付ける、というふうには説明できない。

では、この3例の「ずは」はどういうものであろうか。これは恐らく鈴木義和氏のように「～しないつもりなら～」と解釈したほうがよいのではないかと思われる。万葉集338番歌と記紀の歌はそれぞれ「つまらない物思いをしないつもりなら、一杯の濁り酒を飲むのがよろしかろう」「さあ君、振熊のために傷を負わないつもりなら、鴉鳥のいる淡海にもぐってしまおうよ」と解釈されよう。

つまり、「ず」が前件において、「～しないつもり」と訳されるような意味を表現し、「は」が他の「ずは」の「は」と同じように、「ず」でくくる前件を後件のことがらと結び付け、前後件に潜在している意味関係を顕在化するという役割を果たしているのであると思う。

以上、一、二節に分けて、上代における「ずは」の表現を、その前件で「ず」によって打ち消されたことがらの性質に注目しながら、再分類し、考察してきた。それをもう一度分かりやすく表にまとめると次頁に示す表11のようになる。

表11、上代における「ずは」の表現性

前 件	後件述語の特徴	
「～しないつもり」の意を 後句に結び付ける表現	な (3例)	上代特殊
	べくあるべし	
現実にあることを打ち消し た形で後句に結び付ける特 殊な反実仮想的な表現	ましを・ましものを・まし む・てしかも・もが べきものを (27例)	反実仮想
	後件の現実を引き起こす原 因・理由となることを打ち 消した形で後句に結び付け る普通の反実仮想の表現	
普通には有り得ないことを打 ち消した形で後句に結び付 ける表現	(前後件) む・じ (3例) (同主語)	假定条件
	(前後件) む・めや (4例) (異主語) 体言	
普通には有り得ることを打ち 消した形で後句に結び付け る表現	(前後件) じ・む・ず (14例) (同主語) ましじ	假定条件
	(前後件) む・べし・じ・命令 (10例) (異主語) 形・めやも	

[ず]
が
表
し
て
い
る
範
疇

註：「命令」は動詞の命令形を、「形」は形容詞を意味する。

この表を見て分かるように、「ず」でくくる前件のことがらの内実は種々あるが、そこに共通していることは、「ず」があることを打ち消して、「は」がそれを後句と結び付けることである。そのことがらがありうることがらであろうが、ありえないことがらであろうが、また未然のことがらであろうが、現然のことがらであろうが、話者にとってはすべて「ず」一つで打ち消すことが出来たのが、上代の「ずは」の表現の特殊性であり、同時に上代におけるザ行系統否定辞「ず」の特殊性ではないかと思われる。特に現然な事実についても、それを打ち消して、一文の前件条件にすることが出来るということは、後世には見られないものである。その現然性は、形式的には一種の「ずは」が使われる文に見られる「～つつあらずは」「～ら（完了の助動詞「り」の未然形）ずは」などとして看取される。この

ことは、前章で考察した反語表現の「～けらずや」「～たらずや」などに関連してみれば、上代におけるザ行系統否定辞「ず」の性質が反映されているのではないかと考えられる。

注：

- 1、宮地幸一氏「ずは・なくは考(5)～(9)」(1982～1986、後掲参考文献158～162)による。
- 2、山崎馨氏「万葉のことば(2)」(1985、後掲参考文献187) p141による。文中に触れた具体的な文献出典は、同論文の最後に掲げた参考文献に基づいて、筆者がつけ加えたものである。
- 3、このような重大な問題に挑むには、大きな勇気と、国語学に関する広い見聞と研究実績が必要とされると思うが、筆者としては前者の勇気はあるものの、その他のものはいまだ道遠しと自覚している。しかし、「上代日本語の否定辞に関する研究」というテーマを取り上げた以上、やはりこの問題を避けて通るわけにはいかない。従って、ただただ勇気を振るい立たせ、自分の拙劣な見解を述べ、諸先生方のご批判を乞うしかない。しかしこの問題を通しての研究こそが、上代日本語におけるザ行系統否定辞「ず」の本質に迫るものではないかともひそかに思っているのであり、それが私に勇気を与えてくれた源である。
- 4、米山敬子氏「上代の『ずは』」(1983、後掲参考文献200)、大野晋氏「万葉集のズハの解釈－助詞ハの機能から見る」(1983、後掲参考文献20)などがそのようなものと思われる。
- 5、係助詞「は」については、現代語の「は」も含めて一貫して解釈される議論が多いようである。上代には、後世にあまり見ない、いわゆる感動・強調を表すとされる「は」の用法があるが、それについても、助詞「は」が根源的に持っている「二分結合」という分説性で統一的に説明できるようである。特に、上代から平安時代にかけては、係助詞「は」は決して大きな変化を見せていないという見方が現在の一般的な考え方のようである。なお、本稿における助詞「は」に対する理解は、基本的に後に掲げる尾上圭介氏の諸論に負うものである。
- 6、尾上圭介氏「古代語発掘ずは」(1977、後掲参考文献36)による。
- 7、『日本古典文学全集万葉集』(小学館)の注釈による。
- 8、同じ『日本古典文学全集万葉集』(小学館)の注釈によるが、最後の一句を改訳した。小学館の頭注では、この歌の「命死なずは」を仮定条件ととらえた上で、「第四句の内容に『ただし、それまでに恋死しなかったら、の話です』とただし書をつけて、恋人の来訪

を促したもの」と記してある。

9、「～ないかぎり」と解釈される諸例を取り上げ、特別に論じるものとして、管見に入るかぎり、注4に挙げた米山氏、大野氏の論文が最初である。米山氏の論文では本稿後に取り上げる万葉集504番、3066番、4441番も含めて、提題の「ずは」とし、大野氏の論文では同じ7首の歌を氏の言う第3類の「ずは」とし、「ズハの上に現在の状態から推して、予想できない事態が来るものである」と指摘されている。両氏のこれらの歌に対する注目と新たな解釈は、筆者も大いに賛成するが、ただし、米山氏のように、係助詞「は」にすべての意味を負わせるような分類に対する説明には必ずしも賛同できない。本稿は、一般の反実仮想の用例との関係を考えて、その七例を更に前後件同一主語と異主語のグループに従って、両方に分けてみたのである。なお、2883番のような「わが恋」と「命」はいずれも詠み手自身のものという意味で、後に取り上げる前後件同一主語のものとも考えられるが、ここでは、前後件において実際の形として出ている主語「わが恋」と「命」を重視して異主語のものとして取り扱った。

10、これらのものについての注釈は、多く「～ないで（は）～ないつもりです」「～ないで（は）～まい」と解釈されているが、それは小路一光氏『万葉集助動詞の研究』（1980、後掲参考文献72）に指摘されるように、橋本博士の「ずして」説の影響を受けていると思われる。その実質は明らかに下句に対して仮定の条件句をなし、「～しないならば」と訳すのが正常である。ある意味で、現代語の「～しなければ～ない（或いは「～しなければ～するまい」）」の表現と相似た一面があると言えよう。

11、例えば、浅野信氏「『（あら）ずは』考説」（1973、後掲参考文献1）、小路一光氏（1980、後掲参考文献72）などがそうである。

12、注4で挙げた米山氏の論文p43による。この歌に関する解釈には賛成だが、注9で断ったように、このような「ずは」を「提題のズハ」という米山氏の議論には必ずしも賛意を表せない。

13、本稿における古今和歌集の本文は基本的に片桐洋一氏訳注『古今和歌集』（1980、創英社）による。否定辞や問題にする部分は太字で示す。

14、例えば注11に挙げた浅野氏の論文ではこの2例を一種の「ずは」として扱っている。小路一光氏（1980）においても、一応一種の「ずは」との異質性を断りながら、一種の「ずは」用例群の中に入れていた。もちろん、この2例は橋本博士の論文では普通の順接仮定条件のものとして扱われていたし、他に、それを一種の「ずは」に入れない学者もいる。しかし、学者によってそれを一種の「ずは」と同類視したり、しなかったりするという揺れから見ると、この種の「ずは」は、反実仮想という面において、一種の「ずは」と見なされるものの一部と連続するところがあると考えられ、ただ異なるところは、反実にする部分の内実が違っただけであると考えられる。

15、『日本古典文学全集万葉集』（小学館）の注釈による。

- 16、『日本古典文学全集万葉集』（小学館）の注釈による。その頭注に「このズハは反事実の仮定を表す。自由にならぬ公の旅なのでいう」と記してある。
- 17、これらの歌は橋本進吉博士を始め、幾多の学者が取り上げてきたために、その訓については恐らく異議をとらえるところがないと思われるので訓みと表記の記述を省略した。
- 18、一種の「ずは」と呼応する後（前）句に、特に「まし」などが多いということは、早くから吉沢義則氏や大岩正伸氏などに指摘され、この問題を取り上げるとき、必ず触れる特徴になっている。詳しいことは、後掲参考文献10、100、197などを参照されたい。
- 19、これらの表現の前件が表していることは「現在の事実の否定」である、というような指摘は鈴木義和氏「『ずは』論再考」（1982、後掲参考文献101）に見られる。しかし、「ずは」を全て仮定条件法として理解する鈴木氏の議論には、筆者は必ずしも賛同してはいないのである。
- 20、『日本古典文学全集万葉集』（小学館）の注釈による。
- 21、ある極端を打ち消した場合、その反対の極端と同時に、中間も残り、選択の可能性が生まれる、といった主旨の議論は鈴木一彦氏「打消して残るところ—否定表現の結果」（1962、後掲参考文献100）に見られる。しかし氏がこの理論で「ずは」のすべてを解釈するところは本稿と違う。本稿は、定まっている現実が打ち消された時に、初めて定まらない選択の可能性が生まれ、一種の「ずは」の表現にあるように、選択の意味あいを含んだ解釈ができるような意味関係が成立するのだと考えるのである。
- 22、本居宣長のように「～よりは～」と訳すと、その歌に限ってみれば、「AよりはB」のように二者択一の選択に読み取られてしまうが、しかし、「ずは」が持っている選択の意味は、むしろ、現実を打ち消した結果、生じた定まらない選択多数の事柄の中から、話者の気持ちに合ったものを一つ選び出すというような選択であると思う。
- 23、この三例を特別に扱った議論として鈴木義和氏「『ずは』論再考」（1982、後掲参考文献101）がある。後に掲げる歌の訳文も同文献のものを借りている。氏はこの三例を「非完了性未然仮定」のタイプとして、仮定条件法に準じて解釈しようとしているが、その説明には、筆者は必ずしも賛同してはいない。
- 24、注6に掲げた尾上氏の論文による。

第二編のまとめ

本編において、上代におけるザ行系統の否定辞にかかわる諸表現を考察してきた。従来言われているように、ザ行系統の否定辞は、前編で考察したナ行系統の否定辞と対照して、「ず」という形が中心になり、本来活用しないという性質を持っている。

しかし、前編でも見られたように、上代において、両系統の否定辞に存する相違は、決してその形態的な相違に留まらず、この形態的な相違と並行して、両系統における表現性や使われ方など、より本質的な点にかかわる相違も、本編で考察した幾つかの表現を通して、いま一度見られたのである。

同じ連用形と考えられるものでも、ザ行系統否定辞の連用形「ず」は、ナ行系統否定辞の連用形「に」と違って、専ら後続する動詞に対して、状態修飾をする用法を持ち、後句の原因・理由を示す用法を持っていないのである。それだけでなく、また、形式用言の力を借りて、助動詞などへ繋ぎ、或いは連体修飾へ展開する場合も、ナ行系統否定辞の「に」とは違い、代動詞「す」を取るのではなく、存在詞「あり」を選び、しかも後世の「ザリ活用」と言われるほどの補助活用形式を生み出したのである。

ザ行系統否定辞「ず」の終止形の終止的用法は、ナ行系統否定辞「ぬ」の終止的用法と違って、上代から既にかなり一般的な表現であった。

ザ行系統否定辞の「ず」が疑問表現にかかわる助詞と一緒になった場合、ナ行系統否定辞の「ぬ」が疑問表現にかかわる助詞と一緒に現れる場合とは違い（もちろん、その助詞に「や（も）」と「か（も）」の違いはあるが）、「否定的な詠嘆」や「希求」を表すのではなく、「反語」と「他に対する質問」を表すのである。

そして、上代におけるザ行系統否定辞「ず」の上接項目に現れるものには、動詞・形容詞・形容動詞や補助動詞および受身・可能・使役・尊敬を表す助動詞に限らず、助動詞「べし」「り」「たり」「けり」などもっと広がりが見られる。この点も、前編で考察した上代におけるナ行系統否定辞とは大きく違い、後世の否定助動詞とも異なるものである。

また、通時的に見れば、上代のザ行系統否定辞には、後世の否定助動詞の活用形に現れる「ず」が持たない特殊な表現も存在していた。

例えば、本稿で取り扱ったいわゆる一種の「ずは」と呼ばれる表現、また一般的に認められている「ず」に直接「けり」「けむ」乃至「けば」が下接した表現などは、みな後世に見られないものである。¹⁾

以上のようなことから見れば、上代において、ザ行系統否定辞とナ行系統否定辞とは、形態的にだけでなく、表現性質においても、かなり相違が存在しており、また上代におけるザ行系統否定辞は、後世の否定助動詞の活用形におさまった「ず」に見られない独特な性質を持っていたのではないかと言えるであろう。そして、ザ行系統否定辞がナ行系統否定辞に対して、基本的には活用形式を持たず、形態的により形容詞に似ていたことも、或

いはもっと積極的な意味があったかもしれないと思うのである。²⁾

このような、上代におけるザ行系統否定辞の特殊性を少しでも明らかにしようと思って、本編においては、ナ行系統否定辞との違いを意識しながら考察を進めてきただけでなく、ザ行系統否定辞にかかわる幾つかの重要な表現について、今まで特に指摘されなかった特徴などをも、出来るだけ詳細に記述してきたのである。これらの考察は、前編において行った、ナ行系統否定辞にかかわる諸表現に対する考察とともに、上代における相異なる両系統の否定辞の性質を知る上では、いずれもとても重要なことだと考えているからである。

注：

1、「ずけり」「ずけむ」「ずけば」の問題について本稿では取り扱わなかった。それは「ずけば」の「けば」に対する定見が得られないためである。「ずけば」の「け」を助動詞「き」の未然形と解釈する説もあるが、一方、「ずき」の確実な用例は見当たらない。これらの問題も含めて、今後の課題として残されたのである。

2、もちろん、このことはすぐさまザ行系統否定辞「ず」が形容詞と全く同性質なものであることを意味しないのである。なお、「ず」が動詞に対して状態修飾をし、「あり」を下接させた「ザリ活用」を持つ点だけでなく、ほかに「ずて」のような形式を持つことなども、形態的に形容詞に似ているということは、つとに橋本進吉博士によって指摘されたのである。

第三編、平安時代に見る両系統否定辞の変化

— 『古今和歌集』 を中心に —

第一・二編においては、上代におけるナ行系統否定辞とザ行系統否定辞にかかわる諸表現を考察してきた。その考察を通して、両系統の否定辞において、それぞれ相異なる特殊性や上代にしか見られない特別な表現が存在したということが分かる。その意味で、上代においては、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の存在は、単に形態上の違いがあるのではなく、両者の使われ方や表現性において、つまり、より本質的な点においても、かなり相違が存在していたということが看取され、両者が別々な系統に属するというところに、もっと積極的な意味があったのではないかと考えられる。

ところで、平安時代になると、両系統の否定辞が結局一つの否定助動詞に統合されているのも自明なことである。本編では、既に統合されたと考えられる、平安時代の否定助動詞について考察し、第一・二編で考察した、上代におけるナ行系統否定辞とザ行系統否定辞にかかわる諸表現と対照しつつ、上代から平安時代にかけて、否定辞がいかに変化したかを考察することにした。この変化を通して、上代における否定辞の性質がよりいっそうはっきりと伺われるのではないかと考えているのである。

ただし、平安時代の全容にわたる否定助動詞についての考察は、一つの大きなテーマであり、資料的にも上代に比べて膨大な数に増えているために、本稿の考察を超えているものである。従って、本編においては、平安時代前期の言語状況の縮図として、『古今和歌集』を取り上げ、その中に見られる否定助動詞にかかわる表現を中心に、考察を行いたいと思う。

古今和歌集の成立時期について、その所載歌が延喜13年（西暦913年）3月13日『亭子院歌合』の歌を最後とすることによって、完成奏上は延喜13年3月～同14年8月の間になると一般的に認められているようである。¹⁾この成立時期と、所載歌に万葉集の「歌と同一（二首）もしくは類似する古歌や、奈良時代から平安時代にかけての過渡期の作が含まれる」²⁾ということからして、本稿の考察にとって適宜な資料であると思う。また、上代の言語資料は基本的には和歌が主要なものであった。その意味で古今和歌集を通して、同じジャンルの資料における変遷過程が見られるし、同時に、古今和歌集にある「仮名序」や「詞書」「左注」などは散文的な資料としても観察される。³⁾

第一・二編で、上代における否定辞についての考察を行った際に、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞とに分けて考察してきた。その変遷過程を考察する本編では、その変化をなるべく明らかにするために、やはり同じように、平安時代に見られる否定助動詞の中のもの、取りあえずナ行系統に属するものと、ザ行系統に属するものとに分けて、上代の表

現と対照させながら、考察を行っていきたいと思う。

注：

1、『日本古典文学大辞典』（1986、岩波書店）「古今和歌集」項目（久曾神昇氏・藤岡忠美氏執筆）による。

2、注1に同じ。

3、もちろん、平安時代における他の言語資料について、全く顧みないというわけではない。その全般的な状況を把握するときには、特に山田孝雄氏の『平安朝文法史』（1952、後掲参考文献191）を参考にしたことが多く、それに負うところが大きい。

第一章、ナ行系統から見た変化

本章では、まずナ行系統に属するものについて考察を行いたい。考察は主に第一編で考察した上代ナ行系統否定辞にかかわる諸表現と関連させて進めたいと思う。

一、原因・理由を示す「に」が消滅する

第一編の第一章で考察したように、上代において、ナ行系統否定辞の連用形である「に」が既に非常に限られた用法しか見られなくなっているが、しかし、その「に」が文中に使われて後句と関連した場合、後句の原因・理由を示すという性質はほとんどの用例を通して見られるのであった。

平安時代に入ると、「に」の用法の固定化がいつそう進み、ほとんど「～がてに」の用法しか存在しないようになったのである。

古今和歌集では「～がてに」の用例が7例見られる。それは以下のようなものである。

「～がてに」が直接動詞にかかるもの（1例）

古、154、夜や暗き道やまどへる時鳥わが宿をしも過ぎがてに鳴く¹⁾

「～がてに」が他の助詞を介して動詞にかかるもの（1例）

古、120、わが宿に咲ける藤波立ちかへりすぎがてにのみ人の見るらむ

「～がてにする」の形のもの（4例）

古、75、桜散る花の所は春ながら雪ぞ降りつつ消えがてにする

「～がてにして」の形で後に続くもの（1例）

古、388 詞書、山崎より神なびの森まで、送りに人々まかりて、帰りがてにして別れをしみけるによめる

そして、この形式的な形骸化よりもっと注意すべきことは、上代の「に」に見られる「後句の原因・理由を示す」意味がこれらの用例には既になく、いずれも「～にくそうに～」や「～することが堪えられなさそうに～」という意味で、後続の動詞に対して状態修飾の役割を果たしているということである。

例えば、上に挙げた154番の歌を例にとると、この歌は一般的に「夜が暗いからだろうか。道に迷っているからなのだろうか。ほととぎすは、まさしく我が家の上を通り過ぎにくそうに鳴いているよ」と解釈されているのである。²⁾

このような「がてに」の用法では既に本来の「かて+に」という意識が薄れてしまい、いよいよ完全に「～難し」という表現と混同されてしまうようである。³⁾

このように見てくると、本来の意味でのナ行系統否定辞の連用形「に」が既に消滅し、形骸化された「がてに」の中にある「に」は、もはや否定辞の「に」とは言えず、「がてに」全体が後続する用言に対して状態修飾をする一つの連語に変わっていると言わなければ

ばならない。その連語が更に独立して恰も一独立語のように用いられる珍しい用法も生じてくるのである。

古、550、淡雪のたまればかてにくだけつつわが物思ひのしげきころかな

上の古今和歌集550番歌の「かてに」のところは、上代の用法であれば「たまりかてに」となるはずのところであるが、「かてに」だけが使われている。このような用法は「かてに」の固定化と形骸化の極限を示しているのであろう。⁴⁾

二、単純終止の「ぬ」がなくなる

上代においては、ナ行系統否定辞の「ぬ」に、係助詞の結びとしての曲調終止になる終止的な用法のほかに、「～かてぬ」という非常に珍しい、非一般的な単純終止の終止形的な用法が存在していた。

ところが、古今和歌集に見られる「ぬ」の終止的な用法の用例は、いずれも係助詞の結びになる曲調終止と言われるものである。例えば、

「～ぞ～ぬ」の用例（3例）、

古、83、桜花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ

古、636、長しとも思ひぞはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば

「～なむ～ぬ」の用例（1例）、

古、仮名序、そのはじめを思へば、かかるべくなむあらぬ

「～や（は）～ぬ」の用例（19例）、

古、747、月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

古、395、ことならば君とまるべくにほはなむ帰すは花のうきにやはあらぬ

などがそうである。さもなければ、この時代になって多く現れる、いわゆる連体止めとなっているようなものばかりである。

連体止めの「ぬ」の用例（5例）⁵⁾、

古、327、みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

古、574、夢路にも露やおくらむ夜もすがら通へる袖のひちてかはかぬ

上の例が示すように、これら連体止めの「～ぬ」の句内に主体などを示す助詞が使われるとき、いずれも助詞「の」である。

このように見てくると、上代に僅かに見られた単純終止のように解釈できる終止形的な用法に使われた「ぬ」が完全に姿を消してしまったのであり、「ぬ」の否定助動詞の一活用形式である連体形としての役割がますます完全なものになっているのだと言えよう。⁶⁾

ところで、「ぬ」の係り結び用法と関連して、もう一つの変化が注目されるべきだと思う。それは「～やは～ぬ」（10例）の形による反語表現の増加である。

古、82、ことならば咲かずやはあらぬ桜花見る我さへに静心なし

古、385、もろともに鳴きてとどめよきりぎりす秋の別れは惜しくやはあらぬ

古、161、郭公声もきこえず山彦は外に鳴く音をこたへやはせぬ

古、1037、ことならば思はずとやは言ひはてぬなぜ世の中の玉だすきなる

そして、その用法のほとんどが用言の連用形に下接し、「～やはあらぬ」（7例）「～やはせぬ」（2例）の形になる。これは上代の万葉集に1例しか見ない「松反りしひてあれやは〔四臂而有八羽〕三栗の中上り来ぬ〔中上不来〕麻呂といふ奴」（万、1783）のような、二句の間に「やは」が入り、「やは」が前句用言の已然形に下接する用法とはやや趣が変わっていると言える。⁷⁾

本稿第二編で考察したように、上代においては、否定・打消の表現とかかわる反語表現は、ザ行系統否定辞の「ず」からなる「ずや（も）」がその主役を担っていた。ここで見られる「～やは～ぬ」の形による反語表現の増加は、ある意味で、上代における「打消（ず）＋疑問（や<も>）→反語」の主流をなした「ずや（も）」の表現に取って変わる勢いを見せているのだと解釈できよう。⁸⁾

三、「ぬか（な）」の形で「希求」の意を表現できなくなる

上代において、ナ行系統否定辞に関連した「ぬかも（否定的な詠嘆）」と「ぬか（も）（希求）」の表現があった。特に「希求」の意を表す「ぬか（も）」の表現は上代特有のものとしてされている。

上代の「かも」が「かな」に変わり、古今和歌集に「～ぬか（な）」の表現が幾つか見られる。しかし、それらの用例には、いわゆる「希求」と解釈されるものがなく、いずれも「否定的な詠嘆」か、単なる「否定的なことがらに対する疑問」かのどちらかに解釈されるものばかりである。

「否定的な詠嘆」と解釈されるもの（3例）⁹⁾

古、774、今は来じと思ふものから忘れつつ待たるることのまだもやまぬか

古、426、あなうめにつねなるべくも見えぬかな恋しかるべき香はにほひつつ

古、1043、いでてゆかむ人をとどめむよしなきに隣の方に鼻もひぬかな

前の二例に見られる「まだやまぬかな」と「見えぬかな」は、いずれの注釈書においても「いまだ止まないのだなあ」や「見えないなあ」などと解釈され、特に問題がないようであるが、後の一例にある「鼻もひぬかな」については、「出ていこうとしている人を止める方法がなくて困っているのに、隣の家ではくしゃみひとつしてくれないよ」と「否定的な詠嘆」の意に解釈する注釈書が見られる一方、¹⁰⁾「出て行こうとするお方をとどめる理由も今はないのだが、隣の方で、誰かくしゃみでもしてくれないかしら」と「ぬかな」を「希求」の意のように解釈する注釈書も見られる。¹¹⁾

ところが、本稿の第一編第三章で上代の「希求」を表す「ぬか（も）」の文的条件を考

察したときに明らかにしたように、「希求」を表す「ぬか（も）」の文中に提示されるのは、いずれも動作の対象ではなく、常に希求される事態の中の主体であるという特徴が、「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」と区別して、看取された。つまり、「希求」を表す「ぬか（も）」の表現は、基本的に希求される事態の主体を中心に据える表現だと考えられるのであった。それに対して、「否定的な詠嘆」を表す「ぬかも」の表現は、常に動作の対象を中心にするという特徴も見られた。そのような特徴をもって、この古今和歌集の用例を律すれば、「鼻もひぬかな」の中で中心にされている「鼻」は、明らかに動作「ひる」の対象であると考えられ、従って、この「～ぬかな」の用例については、やはり詠嘆説に従ったほうが適切であろうと思う。

上の3例のほかに「～ぬか」の用例は「～かあらぬか」の形になるものが3例ある。

古、159、去年の夏鳴きふるしてし郭公それかあらぬか声のかはらぬ

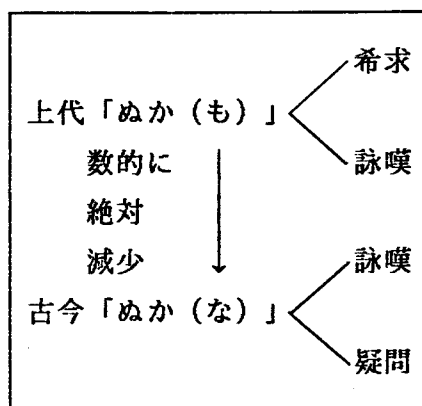
古、272、秋風の吹きあげにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

古、731、かげろふのそれかあらぬか春雨のふるひとなれば袖ぞぬれぬる

この3例はいずれも「～なのか（だろうか）～でないのか（ないのだろうか）」のように解釈され、大きく疑問の表現に帰属することができよう。

こうして見ると、上代の「ぬか（も）」の表現から平安時代前期の古今和歌集に見られる「ぬか（な）」の表現との間に、形態的な変化（「か（も）」から「か（な）」に）が見られるだけでなく、意味的にも次の図1が示すような変容が見られるのである。

図1、「ぬか（も）」から
「ぬか（な）」への変化



つまり、上代においては、ナ行系統否定辞「ぬ」が疑問表現にかかわる助詞「か（も）」と一緒に現れた場合、「希求」と「否定的な詠嘆」の意味を表していたが、古今和歌集になると、同じナ行系統に属する「ぬ」が疑問表現にかかわる助詞「か（な）」と一緒になった場合、「否定的な詠嘆」と単なる「否定的なことがらに対する疑問」を表すようになったのである。言い換えると、形式的に同じ「ぬ」プラス「か（も）」（「か（な）」）であるにもかかわらず、上代では「希求」の意味を表し得たのに対して、古今和歌集の時

代になると、「希求」の意味を表すことが出来なくなったのである。これは注目すべき大きな変化と言わなければならないであろう。¹²⁾

ところで、上代には「ぬか(も)」で「希求」の意味を表す表現が見られるほかに、いま一つ「なむ」という「希求」を表す表現形式が、「希求」を表す「ぬか(も)」の表現と関連して見られるのであった。この「なむ」は平安時代において大いに発展したと思われるのである。

古今和歌集に「希求」と解釈される「なむ」の用例は32例にもものぼる。

このように大きく前進した「なむ」の表現に一つ大きな変化として、上代の「なむ」に見られる、「べしや」「ましを」「べきものか」「めやも」などと共存する現象が見られなくなり、その代わり、以下に挙げる用例が示すように、専ら「む」(5例)「べく」(2例)などと共存するようになったのである。

「む」と共存する用例、

古、114、をしと思ふ心は糸によられなむ散る花ごとにぬきてとどめむ

「べく」と共存する用例、

古、394、山風に桜吹きまき乱れなむ花のまぎれに君とまるべく

「べしや」「ましを」「べきものか」「めやも」などとの共存がなくなるということは、つまり、上代における「なむ」において指摘される「反実仮想性」がなくなっていることを意味するのであろう。そして「む」「べく」などは上代において「希求」を表す「ぬか(も)」と共存する要素であった。「なむ」が専らそのようなものと共存するようになるということは、言ってみれば、「なむ」が上代の「ぬか(も)(希求)」と同等な表現性を持つようになることであらう。¹³⁾ 希求を表す「なむ」に見られるこの変化は、恐らく上に見た、この時代になって、「ぬか(な)」の形では「希求」の意味を表現できなくなったこととは無関係ではないように思われる。

四、逆接に解釈される「ねば」は余韻としてしか残らない

上代においては、「ねば」の形で順接必然確定条件になるものと、順接偶然確定条件を通して逆接に解釈されるものという両様の表現が観察された。

ところで、古今和歌集で集められる「ねば」の用例14例は、そのほとんど(13例)が順接必然確定条件に解釈されるものである。例えば、

古、1025、ありぬやとところみがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ恋しき

古、870、日の光やぶしわかねばいそのかみふりにしりに花も咲きけり

このような「ねば」の表現は上代のものと変わらない。後句に話者の主観的な心情にかかわる表現が多く現れる点においても上代と同じである。そして、この中に、順接恒常条件「～ないと」「～ないでいると」と解釈できそうな用例も見られる。例えば、

古、760、あひ見ねば恋こそまされみなせ河なににふかめて思ひそめけむ

上のような順接必然確定条件や順接恒常条件になる「ねば」が多くあるのに対して、次のような1例だけ逆接条件ふうに解釈できる歌がある。

古、177、天の河浅瀬白波たどりつつ渡りはてねば明けぞしにける

この歌の「渡りはてねば」と後句との関係は「渡り切らないのに夜が明けてしまった」といわゆる逆接のように解釈できる。¹⁴⁾ この歌は、当然上代に見られる、いわゆる逆接の「ねば」の諸例と同じように「天の川の浅瀬がどこかを知らないで、川の白波をかき分けてうろうろしながら行ったものだから、川を渡りきらないうちに夜は明けてしまいましたよ」¹⁵⁾ というふうに一種の機縁性による「偶然確定条件」として理解すべきである。そして、そのように理解するために必要な時間的な、乃至アスペクチュアルな意味は、「～はつ」という補助動詞の刺激によって引き出されていると考えられよう。

このような順接偶然確定条件に帰属できる「ねば」の用法がわずかながら存在するということは、つまり上代の「ねば」用法の余韻がまだ少し残っているとも言えよう。¹⁶⁾ しかし、副詞の「いまだ」などや補助動詞「はつ」がなくて、「ねば」の形だけで順接偶然確定条件をなし、逆接に解釈される用法は、後世において完全に姿を消してしまったのであり、これはやはり上代から平安時代にかけて、ナ行系統否定辞の一つの大きな変化として注目すべきであろう。

以上、本章において、上代におけるナ行系統否定辞の諸表現と関連させながら、古今和歌集の用例を通して、平安時代における否定助動詞の中のナ行系統に属するものにかかわる諸表現について考察してきた。この考察を通して、上代から平安時代にかけて、ナ行系統否定辞に関する変化は幾つか見られた。

まず、上代において、後句と関連した場合、後句の原因・理由を示す用法を持っていた連用形「に」の表現と、上代でも用例が僅かしか見られず、しかも非一般的ではあるが、しかし確かに存在していたと言える「ぬ」の単純終止としての終止的な用法などが消滅したのである。

次に、形式的には見られるものの、表現性において変化したものとして、「ぬか(な)」の形では「希求」の意味を表すことが出来なくなったことと、「ねば」の形で順接偶然確定条件を通して逆接に解釈されるものがほとんど姿を消してしまうこと、などがある。

上のような消滅或いは後退の変化に対して、反語表現の中で、「～やは～ぬ」の形式の増加と、連体形「ぬ」の準体用法としての形式が増えるなどといった前進も見られるのである。¹⁷⁾

上代から平安時代にかけて、否定助動詞においていかなる変化が見られるかということをもっと詳しく知るために、次章の、ザ行系統に属するものについての考察に移りたいと思う。

注：

1、古今和歌集の本文は基本的に片桐洋一氏訳注『古今和歌集』（1980、創英社）による。意味解釈の場合は、『日本古典文学全集古今和歌集』（1971、小学館）と佐伯梅友氏校注『古今和歌集』（1981、岩波書店）なども参考にした。引用中、否定辞に関連する部分及び特に問題にする部分は太字で示す。以後同じである。

2、片桐洋一氏訳注『古今和歌集』（1980、創英社）による。

3、「～かてに」と「～難し」との混同はおそらく上代の末期（或いは「がてに」が「難」という文字で表記されるとき）から既に始まっていると考えられる。それが具体的に何時から始まったのかについては、管見の及ぶ限り、定説が見られないようである。なお、上代における「がてに」の表記については本稿第一編第一章を参照されたい。

4、古今和歌集に用例を見ないが、山田孝雄氏『平安朝文法史』（1952、後掲参考文献191）によれば、平安時代には「に」の用法とされる「えに」の用例が見られる。例えば、

言へばえに言はねば胸に騒がれて、…（伊勢物語、34）

言へばえにかなしうおもへるごまを、…（源氏物語、須磨）

意味的には「出来ず」「出来ないで」を表しているので、「に」の用法と考えられるが、ただし、そのいずれも「言へばえに」という慣用的な形であることと、上代には同様な用法が見られないことなどから見れば、やはり形骸化した一種の「連語」として生まれたものであると考えられよう。

5、この5例の中に含まれる551番歌の「奥山の菅の根しのぎ降る雪のけぬとかいはむ恋のしげきに」にある「雪のけぬ」については「完了・確認」の「ぬ」と取る異説もある（例えば『日本古典文学全集古今和歌集』がそうである）。

6、「ぬ」の連体形的な役割の増加ということと関連して、古今和歌集においては、上代には見られない、「ぬ」の次に断定を表す助動詞「なり」（2例）や係助詞「ぞ」（1例）が来るような、以下の用例が見られるようになる。

古、837、さきだたぬ悔いのやちたびかなしきは流るる水のかへりこぬなり

古、448、空蟬のからは木ごとにとどむれどたまのゆくへを見ぬぞかなしき

7、意味的にも、上代の1例は「松の緑が変わるように身体が役に立たずになったのでしょうか、そうでもないのに三栗の中上りして来ない。麻呂という奴は」（中西進氏の注釈）と解釈され、「や」のこもっている反語の気持ちは前句に集中し、それを逆転するようなものだと考えられ、平安時代に見られる「～やは～ぬ」がそのことから全体を逆にする（重見一行氏「『やは』における反語機能の成立」後掲参考文献97参照）ということと違うのである。

8、このことに関しては、当然「やは」という助詞について深く追究すべきであるが、本稿の主旨から離れてしまうので、深入りしないことにした。なお、「ずや(も)」の表現については、本編第二章のところで、もう少し触れるつもりである。

9、ここに挙げる3例のほかに、いま一例、392番歌について「夕ぐれのまがきは山と見えぬかな夜は越えじとやどりとるべく」のような異伝があると言われ、しかもその「ぬかな」が「希求」の意と解釈されている。しかし、現在の古今和歌集の刊行本を見ると、どの刊行本においても、この歌はみな「夕ぐれのまがきは山と見えななむ夜は越えじとやどりとるべく」となっているので、「ぬかな」の用例とはしにくい。

10、『日本古典文学全集古今和歌集』(小学館)による。その頭注には「くしゃみさえもしないなあ」と記してある。また、佐伯梅友氏校注『古今和歌集』も同じような解釈を取っている。

11、片桐洋一氏訳注『古今和歌集』による。

12、山田孝雄氏の『平安朝文法史』(1952、後掲参考文献191)で見ると、平安時代全体においても、「ぬか(な)」の形で「希求」を表す用法がないようである。

13、もちろん、この変化は平安時代に入ってから初めて現れるのではなく、第一編第三章で上代の「ぬか(も)」の表現と関連させて、上代の「なむ」を考察したときに触れたように、万葉後期の作品と考えられる歌には、既に「む」や「はやも」「なほも」などの表現と呼応するような現象が見られ始めたのであり、この変化は徐々に完成したのであると考えられよう。なお、浜田敦氏「上代に於ける希求表現について」(1948、後掲参考文献134)においても、「ぬか(も)」による「希求表現」は平安朝に入ると、姿を消し、「なむ」に位置をゆずると指摘されている。

14、佐伯梅友氏校注『古今和歌集』はこのような解釈を取っている。

15、注釈は『日本古典文学全集古今和歌集』(小学館)による。そして、その頭注には、「『ば』は、ここでは逆接」と記してある。

16、この余韻が何時まで残ったかということについては、定かな論議がないようである。山崎馨氏「(万葉集の文法)動詞・形容詞の問題点」(1966、後掲参考文献182)によれば、平家物語にも次のような珍しい用例が見られると指摘されている。

其後西にむかひ、高声に十念となへ、「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」
との給もはてねば、六野太うしろよりよ(ッ)て薩摩守の頸をうつ(平家物語・巻九、忠度最期)(原文は『日本古典文学大系平家物語』による)

この用例にも補助動詞「はつ」が使われていることが注目されるべきであろう。なお、山田孝雄氏の『平安朝文法史』においては、平安時代における「ねば」の用例で、逆接と解釈されるものについての記述が見られない。

17、紙数の関係で、「ぬ」の準体用法形式の増加についてはあまり詳しく述べる余裕が無かった。上の注6を同時に参照してもらいたい。

第二章、ザ行系統から見た変化

本章では、前章に引き続き、平安時代前期における否定助動詞の中のザ行系統に属するものにかかわる表現について、考察を行いたいと思う。考察は、主に第二編で考察した上代ザ行系統否定辞にかかわる諸表現と関連させて進めていきたいと思う。

一、「ザリ活用」が安定化する

上代のザ行系統否定辞「ず」の表現には、実質的には一種の連用修飾用法と考えられる「ずあり→ざり」というような「ザリ活用」と言われる用例が、既に数多く見られたが、その中に非融合形式の「ズアリ」と融合形式の「ザリ」の両方が存在する。しかも、訓みの確実な用例を見ると、非融合形式の数は融合形式のそれを上回っているということが第二編の考察によって分かった。平安時代に入ってからどうであろうか。

古今和歌集に「ザリ活用」の用例が36例ほど観察される。それらはみな融合形式のものである。以下各活用形の用例数を示し、実例を挙げておく。

未然形「～ざら～」の用例（14例）

古、49、今年より春知りそむる桜花散るといふことはならはざらなむ

古、465、春霞なかしかよひ路なかりせば秋くる雁は帰らざらまし

古、457、かぢにあたる浪のしづくを春なればいかがさきちる花と見ざらむ

連用形「～ざり～」の用例（18例）

古、62詞書、桜の花のさかりに、ひさしくとはざりける人の来たりける時によみける

古、1003、…九重の なかにては 嵐の風も きかざりき…

古、643、今朝は霜おきけむ方もしらざりつ思ひいづるぞきえて悲しき

連体形「～ざる～」の用例（4例）

古、93、春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ

古、433、かくばかり逢ふ日のまれになる人をいかがつらしと思はざるべき

古、762、玉かづら今は絶ゆとや吹く風の音にも人の聞えざるらむ

以上に挙げた諸例が示すように、歌だけでなく、詞書のような散文的な文章にも、「ざり」の融合形式が確実に見られるようになった。その意味では、融合形式の「ザリ活用」は既に安定し、一つの活用体系として整っていると言えよう。

ただし、ここで注目すべきことは、終止形になる「ざり」の表現が上代に引き続き見られないことと、連体形の「ざる」と已然形の「ざれ」が大きく後退したことである。本稿の第二編第一章で考察したことによると、上代においては、「ざり」連用形と「ざる」連体形の数は、連用形が非融合形式の8例（異訓1例）と融合形式の13例（異訓11例）で、

合計21例であるのに対して、連体形が非融合形式の12例（異訓1例）と融合形式の15例（異訓9例）で、合計27例である。つまり、数字的には連体形がむしろ連用形をうわまっていたのであり、しかも、体言を修飾する連体形の用例は、修飾されるものが形式体言と体言であるものを合わせれば、11例（形式体言5例、体言6例）もあるのである。それに対して、古今和歌集では、連用形「ざり」と連体形「ざる」の比率は18例対4例に逆転し、連体形の用例が連用形の用例より遥かに少なくなっているだけでなく、その上、体言を修飾する連体形の用例は僅か1例しかないのである。そして、上代において、已然形が非融合形式の2例、融合形式の4例（異訓2例）が見られたのに対して、古今和歌集では已然形の用例は皆無である。¹⁾

この連体形「ざる」と已然形「ざれ」の後退は、当然、「ぬ」と「ね」というナ行系統に属する連体形と已然形に押されたためであると考えられよう。

ところで、「ザリ活用」の安定化によって、上代において、かつて「ず」の下に直接に接することのあった「けり」なども、「ザリ活用」の連用形「ざり」に下接するようになり、上代特殊表現とされている「ずけり・ずけむ・ずけば」の表現が存在しなくなるのである。²⁾

- 古、458、かの方にいつからさきに渡りけむ浪路はあとも残らざりけり
- 古、1106、けふ人を恋ふる心は大堰河流るる水におとらざりけり
- 古、868、紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける
- 古、706、おほぬさの引く手あまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ

二、「ず」終止的用法の増加

上代のザ行系統否定辞「ず」の終止形を考察した際に、その終止的用法が、「ず」全用例の中で占める割合の低かった（上代「ず」全用例の14%を占める）こと、それと関連するかどうか分からないが、形式的には「～ずと」（文法的にも話法的にも終止していると考えられる形式）がほとんど見られないこと、という二点の特徴が看取された。平安時代に入ってから、「ず」による終止的用法は、どうなっているのだろうか。

古今和歌集で見える限り、終止的用法に使われる「ず」が50例ほどあり、古今和歌集から採集される「ず」全用例（113例）の約44%も占めており、上代語の同パーセンテージより3倍強も増えているということになる。³⁾しかも、この中に「～ずと」の形で使われている用例も観察されるのである。以下実例を挙げておく。

- 古、338、わがまたぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず
- 古、835、寝るがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をもうつつとは見
ず
- 古、仮名序、いま、このことをいふに、官位高き人をば、たやすきやうなれば入

れず

古、1039、思へどもおもはずとのみ言ふなればいなやおもはじ思ふかひなし

古、966 詞書、親王の宮のたちはきに侍りけるを、宮仕へつかうまつらずとて、
とけて侍りける時によめる

上の例を見て分かるように、「ず」の終止的用法は、第三人称者主語の文（338 番歌）に使われた場合はもちろんのこと、第一人称者主語の文（835 番歌、仮名序）に使われた場合でも、いずれも確実性のある打消判断の表現になっているのである。

それに、上代の万葉集に一例も見なかった「～ずと」（文法上も話法上も終止と考えられる用法）の用例は、古今和歌集において8例にも上るのである（他の6例は、74、157、422、630、666、1037などである）。⁴⁾

三、「ずや」による反語表現の後退

本稿第二編第三章で考察したように、上代において、否定・打消にかかわる反語表現は、「ずや（も）」の形がその主流をなしていた。平安時代になると、「ずや」の表現はどうかなるのであろうか。

「ずや」の表現は古今和歌集に次の4例が見られる

古、233、つま恋ふる鹿ぞ鳴くなる女郎花おのがすむ野の花と知らずや

古、533、あしがものさわぐ入江の白浪の知らずや人をかく恋ひむとは

古、仮名序大伴黒主歌、思ひいでて恋しき時は初雁の鳴きてわたると人は知らず
や

古、957、今更になにおひいづらむ竹の子のうき節しげき世とはしらずや

この4例とも「知らずや」の形になって、用語の偏りが見られる。しかも、反語というより、「～ないのか」「～ないのかしら」「～ないのだろうか」といったように疑問や質問風な表現に解釈されやすい。その意味で、「ずや」の形が反語表現から大きく後退したと言えよう。⁵⁾このことは恐らく前章で見た「～やは～ぬ」という反語形式の増加とは反比例をなしていると言えるであろう。

上代の「ずや（も）」の表現と関連して、いま一つ注目すべきことは、上代の反語表現に見られる「～けらずや」「～にけらずや」「～にたらずや」の用法が中古に入ってから存在しなくなるということである。⁶⁾

このような表現が見られなくなることは、つまりザ行系統の「ず」の上にも、上接項目の制限が、上代に比べて厳しくなったということであり、ある意味では、上代のナ行系統否定辞の上接項目と同じになったのだということが言えよう。この変化は、ザ行系統否定辞における大きな変化として、重要視すべきであると思う。

四、いわゆる一種の「ずは」の表現が消滅する

上代において、「ずは」の用法としては、普通の順接仮定条件と言われるものがあるほかに、いわゆる一種の「ずは」と呼ばれる表現があった。本稿の第二編第四章では、それらのものを再分類して、それぞれの「ずは」が使われる前後句の関係を捉え直し、いかなる「ずは」の表現においても、「ずは」という言語形式が果たしている役割は変わりがなく（「ず」が打消を表し、「は」がそれを後句と結び付けて、両句の間に潜在的に存在している関係を顕在化すること）、ただ前句において、「ず」が表している「打消」の内実がそれぞれ違うために、結局様々に解釈できる「ずは」の表現が成立したのであろうと述べた。

平安時代前期になるとどうなのであろうか。古今和歌集に「ずは」の用例が8例見られる。それらを内容的に吟味すると、順接仮定条件と解釈されるもの（4例）といわゆる反実仮定の前件と解釈されるもの（4例）とがある。

「順接仮定条件」の用例、

古、96、いつまでか野辺に心のあくがれむ花し散らずは千代もへぬべし

古、483、片糸をこなたかなたによりかけてあはずはなにを玉の緒にせむ

古、485、かりこもの思ひみだれてわが恋ふと妹知るらめや人し告げずは

古、693、君来ずはねやへも入らじ濃紫わがもとゆひに霜はおくとも

これらの「ずは」と共存する後句（倒置の場合その前句）に見られる「べし」「む」「らめや」「じ」なども上代の順接仮定条件となる「ずは」の場合と変わらない。

「反実仮定の前件」の用例、

古、63、今日来ずは明日は雪とぞ降りなましきえずはありとも花と見ましや⁷⁾

古、678、あひみずは恋しきこともなからまし音にぞ人をきくべかりける

古、679、いその神ふるのなか道なかなかに見ずは恋ひしとおもはましやは

古、903、老いぬとてなどかわが身をせめきけむ老いずは今日にあはましものか⁸⁾

これらはいずれも後件の事態を引き起こす原因・理由となることを打ち消して条件にする一般的な反実仮定の用法である。そして、後句には反実仮定の文型に現れる「まし」「ましや」「ましやは」「ましものか」などが使われている。つまり、いわゆる上代特殊な一種の「ずは」の表現が見られなくなったのである。⁹⁾

五、連用形「ず」の居体言としての性質が強まる

上に考察してきたものは、いずれも第二編で考察した、上代ザ行系統否定辞にかかわる諸表現と関連したものである。これらの表現以外に、平安時代前期における否定助動詞のザ行系統に属するものには、上代ザ行系統否定辞と比べて、以下のような変化も見られる

のである。

つまり、連用形の「ず」には、上代ザ行系統否定辞の「ず」にほとんど見られない次のような用法もあるのである。

古、1003、…越の国なる 白山の 頭は白く なりぬとも おとはの滝の 音に
きく 老いず死なずの 葉もが…

古、353、いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君にはじめむ

古、935、雁のくる峯の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ

古、965、ありはてぬ命待つ間のほどばかりうきことしげく思はずもがな

1003番歌では「ず」の下に連体助詞「の」が来て後の体言「葉」を限定・修飾する用法である。353番歌では「ずは」の形になっているが条件句をなす「ずは」ではなく、そこに使われている「は」は後続する動詞「知る」内容（対格語）を示す「は」であり、「ありきあらずは知らねども」は「あったことか無かったことかは知らないけれども」の意味である。¹⁰⁾ 935番歌では「はれず」があたかも体言のように副助詞「のみ」の限定を受けているのである。¹¹⁾ 965番歌では主に体言を受けて実現を希望する意味を表すとされる「もがな」が「思はず」に下接する用法である。

これらの用法に見られる共通点は、連用形「ず」が居体言としての性質が強まっているということである。この点は、この時代になって、連用形「ず」が後続する用言とかかわるとき、「～ずなり」という（断定の助動詞「なり」に下接する）表現が多くなる（古今和歌集に7例）こととも関連するのであろう。例えば、

古、989、風のうへにありかさだめぬちりの身はゆくへも知らずなりぬべらなり

古、973 左注、…昔、男ありける女の、男とはずなりにければ、難波なる三津の
寺にまかりて、尼になりて…

このような「～ずなり」は「～しないものになる」或いは「～しないようになる」などと解釈されている。

つまり、平安時代前期における否定助動詞の連用形「ず」からなる表現は、上代におけるザ行系統否定辞の連用形「ず」からなる表現のように動詞に対して状態修飾をするほかに、文中において、あたかも体言のように、連体助詞「の」を下接したり、助詞「は」に提示されたり、直接体言にかかって複合語を作ったり、断定の助動詞「なり」の前に立ったりするなど、居体言としての用法が更に強まったのでありと見えよう。

以上、本章において、主に上代におけるザ行系統否定辞の諸表現と関連させながら、古今和歌集の用例を通して、平安時代前期における否定助動詞の中のザ行系統に属するものにかかわる諸表現について考察してきた。この考察を通して、上代から平安時代前期にかけて、ザ行系統否定辞に関する変化は幾つか見られた。

まず、上代において、ザ行系統否定辞「ず」の上接項目には、助動詞「り」「たり」「

けり」などが現れることもあったが、平安時代になると、それらのものが「ず」の上にも現れなくなり、「ず」の上接項目も、動詞・形容詞・形容動詞、補助動詞、受身・可能・使役・尊敬を表す助動詞と助動詞「べし」に限られてしまった。

次に、形式的には見られるものの、表現性において変化したものとして、「ずは」の形はいわゆる一種の「ずは」としての表現が出来なくなり、「ずや」の形も反語表現から大きく後退してしまうなどのことがある。

更に、ザ行系統否定辞の補助的な表現手段として生まれた「ザリ活用」が基本的に安定化するものの、連体形「ざる」と已然形「ざれ」が大きく後退してしまった。また、上代に見られた「ずけり」などの表現が消滅し、「けり」も他の助動詞と同じように、「ザリ活用」の連用形につくようになる。

上のような消滅或いは後退の変化に対して、「ず」終止的用法の増加、その終止的用法が話法的にも終止であると考えられる「～ずと」の形でも頻繁に使われるようになること、連用形「ず」の居体言としての用法の強化、及び「ザリ活用」形式の安定、などといった前進も見られたのである。

注：

1、山田孝雄氏『平安朝文法史』には、「ざる」連体形の体言を修飾する用例も、古今和歌集93番歌が採用されている。已然形「ざれ」の用例として、片桐洋一氏訳注『古今和歌集』に「心こそうたてにくけれ染めざればうつろふこともをしからましや」（796番歌）と1例あるが、他の刊行本によると、いずれも「染めざらば」になっており、山田孝雄氏も『平安朝文法史』で、「已然形の用例は未発見せず」（p158）と記しておられるので、已然形「ざれ」の用例がこの時代では存在しなかったと考えられよう。

2、もちろん「ざりけり」の表現も平安時代になってから初めて現れるのではなく、万葉集後期には既に次のような用例が見られるのである。

万、4496、怨めしく君はもあるか屋戸の梅の散り過ぐるまで見しめずありける（
美之米受安利家流）

「ずあり」は「ざり」の非融合形式であるから、「ずありけり」は「ざりけり」の先駆的な表現であると考えられよう。なお、古今和歌集には「ざりけむ」の用例が見当たらず、山田孝雄氏の『平安朝文法史』にも「ざりけむ」に関する記述が見られない。後世には「けば」の表現がなく、当然「ざりけば」の表現が存在しないのである。

3、この中には「題しらず」（97例）「読み人知らず」（129例）の用法が含まれていな

い。もし、それらも一種の終止的用法と見るならば、「ず」終止的用法が「ず」全用例の中で占める割合は更に81%に上がる。

4、もちろん「～ずと」の表現が平安時代に入ってから急に増えたのではなく、第二編第二章の注のところで述べたように、奈良時代後期に作られた続日本紀宣命には既に「～ずと」の用法が徐々に現れているのである。

5、第二編第三章で考察したように、上代において「ずや(も)」の表現が13例見られるが、そのうち、質問と解釈されるものは1例だけである。

6、この事実は早くから報告されている。ただし、従来では否定助動詞全体の変化として捉えられるか、反語表現の特殊性として見られていたのである。筆者の考えでは、上代には見られていた「～らずは」(助動詞「り」の未然形に「ずは」がつく用法)が平安時代に見られなくなることなどとも関連して考えれば、この変化はやはり上代から平安時代にかけての、ザ行系統否定辞の変化と見るべきであると思う。なお、山田孝雄氏『平安朝文法史』によれば、「ず」が助動詞「べし」に下接する用例は、源氏物語に見られる。「このりの命一二日をも惜まずばあるべからず」(源氏物語・手習)。

7、この歌の後半にある「きえずはありとも～」の「ずは」は係助詞「は」が「ずありとも」の間に割り込む用法であり、条件句を作る「ずは」の用法ではない。

8、片桐洋一氏訳注『古今和歌集』によると、この歌の「老いずは」は「老いずば」に表記されている。つまり「ずは」が「ずば」になる過渡期の表記と言えるが、他に「老いずは」と表記する注釈書もある(例えば、『日本古典文学全集古今和歌集』と佐伯梅友氏校注『古今和歌集』がそうである)。本稿では「老いずは」に従った。

9、今までも諸先学に指摘されたことがあるように、いわゆる一種の「ずは」は、古今和歌集に見られないだけでなく、上代以降全般に見られなくなったのである。

10、上代において、これに似た用法としては、「杖策きも衝かずも{杖策毛不衝毛}～」(万、420)「かからずもかかりも{可加良受毛可賀利毛}～」(万、904)「折りも折らずも{折毛不折毛}～」(万、1652)などがあるが、いずれも助詞「も」が使われており、このような「は」で「～ず」を提示する表現は見当たらない。

11、上代においては、万葉集4312番歌にも「秋草に置く白露の飽かずのみ相見るものを{安可受能未安比見流毛乃乎}月をし待たむ」という「～ずのみ～」の用法が見られるが、しかし、それは明らかに「飽かず相見る」という連用修飾用法の間に助詞「のみ」が割り込んだ形で、古今和歌集に見る「はれずのみ」の用法とは趣旨が違うと言わなければならない。

第三編のまとめ

本編では、古今和歌集を資料にして、平安時代前期における否定助動詞にかかわる諸表現を考察し、特に上代の否定辞にかかわる諸表現と比べたとき、いかなる変化が見られるかという点に重きを置きながら調べてきた。考察の中で、上代との比較を便利にするために、ナ行系統に属するものとザ行系統に属するものとに分けて考察を行った。ここでは、その変化をもう一度まとめてみたいと思う。

まず、連用形では、後句と関連した場合、後句の原因・理由を示す用法を持っていたナ行系統の連用形「に」が消滅し、従ってザ行系統の連用形「ず」一つに統一されることになる。この「ず」は、依然として後続する動詞に対する状態修飾の用法を基本とするが、¹⁾その上、居体言としての用法が強化する。活用語連用形に付く助動詞が下接する場合、ザ行系統の補助活用として生まれた「ザリ活用」の連用形「ざり」に付くという統一が見られ、それによって、上代に見られた「ずけり」などの表現も姿を消す。

終止形では、上代でも用例が僅かしか見られず、しかも非一般的ではあるが、しかし確かに存在していたと言えるナ行系統の「ぬ」の単純終止としての終止的な用法が消滅し、ザ行系統の「ず」の終止的用法が更に増えて確立される。そして、この終止的用法は、話法的にも終止であると考えられる「～ずと」の形でも頻繁に使われるようになる。しかし、反語を表す「～やは～ぬ」の形式に押されたためか、上代で反語表現の主流をなしていた「ずや(も)」の表現が後退する。

連体形では、ナ行系統の連体形「ぬ」に押されて、ザ行系統の補助活用として生まれた「ザリ活用」の連体形「ざる」が大きく後退する。一方、ナ行系統に属する連体形「ぬ」に、準体用法の増加及び「～やは～ぬ」の形で反語表現への前進なども見られるものの、「ぬか(な)」の形で、「希求」の意を表現できなくなるという大きな変化も見られる。

已然形では、ナ行系統の已然形「ね」に押されて、ザ行系統の補助活用として生まれた「ザリ活用」の已然形「ざれ」が消えてしまう。しかし、ナ行系統の「ね」が大きく前進したものの、上代において「ねば」の形で、順接偶然確定条件を通して逆接に解釈されるような表現がほとんど出来なくなる。

そのほかに、ザ行系統の補助活用として生まれた「ザリ活用」の安定化(基本的に融合形式で現れること)によって、否定助動詞において、未然形「ざら」が確立されることになる。一方、上代から見られる「ずは」の形はいわゆる一種の「ずは」としての表現が出来なくなり、順接仮定条件や、一般的な反実仮想の前件としてしか表現できなくなった「ずは」は、他の活用語に準じて(特に「ずば」の表記が出てくると関連して)考えれば、一種未然形的な役割を果たしているとも言える。

更に、上代における否定辞と比べて、いま一つ大きな変化が見られる。つまり、上代では、否定辞の上接項目を見ると、ナ行系統否定辞の場合、動詞・形容詞・形容動詞という

表12. 平安時代前期の
否定助動詞の活用表

	主 活用	補活 助用
未然形	ず	ざら
連用形	ず	ざり
終止形	ず	
連体形	ぬ	(ざる)
已然形	ね	

注：括弧内のは
矮小化したもの
を意味する。

いわゆる三大用言のほかに、補助動と受身・可能・使役・尊敬を表す助動詞に限るという制限が見られるのに対して、ザ行系統否定辞の場合は、更に助動詞「り」「たり」（「にたり」を含む）「べし」「けり」（「にけり」を含む）なども「ず」に上接することがあった。しかし、平安時代になると、ナ行系統に属するものの場合でも、ザ行系統に属するものの場合でも、否定助動詞の上接項目に助動詞「り」「たり」「けり」などが来ることがなくなったのである。²⁾

以上のように、平安時代前期の否定助動詞を、上代における否定辞と比べてみると、様々な変化が見られた。表12は平安時代前期における否定助動詞の活用表である。この表に示されている活用形は既に後世の否定助動詞とほとんど変わらない形をなしている。³⁾本編の考察によって分かるように、上代の否定辞からこのような活用体系にまで整えるには、ナ行系統否定辞にしろ、ザ行系統否定辞にしろ、いずれも大きな変化を成し遂げたと言える。活用表に上がっている活用形から見れば、ザ行系統に属するもの（補助活用の「ザリ活用」も含めて）が大きな比重を占めることになっているが、本編の考察で分かるように、上代におけるザ行系統否定辞と比べれば、ザ行系統に属するものもかなり変化しており、上代におけるザ行系統否定辞が持っていた表現性などを失ってしまったところも少なくない。一方、ナ行系統に属するものの変化がより大きなものではあったが、上代におけるナ行系統否定辞が持っていた表現性を残しているところもある。

その意味で、平安時代前期に見られる否定助動詞は、まさに上代におけるナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の表現性を一部ずつ合わせ持って成立したものであり、両者の統合によるものであるということが言えるのであろう。

注：

- 1、当然「ず」にも上代から中止用法が見られ、古今和歌集の時代以降も引き続き存在す

る。これは明白なことであるため、本稿において特に取り上げないことにした。

2、もちろん、この変化は助動詞「り」「たり」「けり」などの側から検討する必要もあるが、本稿の主旨から離れてしまうので、触れないことにした。

3、山田孝雄氏『平安朝文法史』によれば、「ザリ活用」の終止形となる「ざり」は、平安時代前期には例を見ないが、「後の今昔物語などに見ゆ」と言う（p157）。こうして見ると、時代が下がれば、「ザリ活用」のもう一度の前進が見られるということになる。その場合、今昔物語のような和漢混合文に現れるということも注目すべき事実であろう。

結 び

三編にわたって、上代日本語における否定辞の問題について考察してきた。

上代の否定辞には形態的にナ行系統に属するものとザ行系統に属するものが存在するという事は早くから確認されていることである。しかし、両系統のものには、その形態的な相違に並行して、使われ方や表現性などにおいて一体どんな違いが見られるか、後世の否定助動詞と比べてみたとき、いかなる変化が見られるか、などのことについては、今までは必ずしも明確にされていないように思われる。

本稿の第一・二編の考察を通して、上代において、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞には、次のような違いが見られる。

同じ連用形と考えられるものでも、ナ行系統否定辞の連用形「に」は、後句の原因・理由を示す用法を持っており、形式用言の力を借りて、係り結びの形になり、助動詞などへ繋ぐ場合、存在詞の「あり」を取るのではなく、代動詞の「す」を選ぶ。それに対して、ザ行系統否定辞の連用形「ず」は、専ら後続する動詞に対して、状態修飾をする用法を持ち、また、形式用言の力を借りて、助動詞などへ繋ぎ、或いは連体修飾へ展開する場合、代動詞「す」を取るのではなく、存在詞「あり」を選び、しかも後世の「ザリ活用」と言われるほどの補助活用形式を生み出したのである。

上代において、ナ行系統否定辞の側も、終止形的な「ぬ」を持っていた。ただし、その終止形が使われる表現から見れば、珍しいほど数が少なく、あまりにも非一般的なものであった。それに対して、ザ行系統否定辞「ず」の終止的用法は、上代から既にかなり一般的な表現であるが、ただし、後世の否定助動詞の終止形におさまった「ず」の終止的用法と比べて、全用例の中で占める比重がそれほど大きくないようである。

ナ行系統否定辞の「ぬ」が疑問表現にかかわる助詞と一緒に現れた場合、「否定的な詠嘆」と「希求」という独自の表現性を持っていた。それに対して、ザ行系統否定辞の「ず」が疑問表現にかかわる助詞と一緒になった場合、「反語」や「他に対する質問」を表すのである（もちろん、その助詞に「か（も）」と「や（も）」の違いがあることは無視してはいけない）。

このような相対立する相違が存在するほかに、両系統の否定辞は、それぞれ後世の否定助動詞に見られない、上代特殊な表現を持っていた。

ナ行系統否定辞の已然形「ね」からなる「ねば」は、上代において、順接必然確定条件を表すほかに、順接の偶然確定条件句をなし、逆接に解釈される意味をも表した。ザ行系統否定辞「ず」からなる「ずは」の表現は、上代において、順接仮定条件や一般的な反実仮定の表現の前件になるだけでなく、いわゆる一種の「ずは」と呼ばれる表現性を持っていた。また、「ず」に直接「けり」「けむ」ないし「けば」が下接した表現などは、みな

表13、橋本博士の相接順位表 後世に見られないものである。

I	す さ し す む
II	る ら る
III	た し
IV	ぬ り
V	た* り
VI	つ
VII	ず ざ* り
VIII	べ べ* ま ま し か じ じ り かり
IX	め* り
X	け* き り
XI	ら ら け む ま じ し む む し

更に、後世「ザリ活用」と呼ばれるものは、本来基本的に活用形を持たないザ行系統否定辞のために生じた補助的な活用手段と見られるべく、上代においては、未然形「ざら」、連用形「ざり」が存在する必要があっただけでなく、連体形「ざる」、已然形「ざれ」も、ナ行系統否定辞の連体形「ぬ」と已然形「ね」と対立して存在していたと考えられ、数字的に連体形「ざる」が連用形「ざり」をも上回っていることと、已然形「ざれ」の用例も確実に見られることなどが、そのことを物語っているのであろう。

いま一つ大きな違いは、上代において、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の上接項目には相違があった。ナ行系統否定辞の場合は、基本的に上接項目が動詞・形容詞・形容動詞といういわゆる三大用言と補助動詞及び受身・可能・使役・尊敬を表す助動詞に限られていた。¹⁾ それに対して、ザ行系統否定辞「ず」の上接項目に現れるのは、動詞・形容詞・形容動詞や補助動詞および受身・可能・使役・尊敬を表す助動詞に限らず、助動詞「り」「たり」「べし」「けり」などもっと広がりが見られるのである。

表13は橋本進吉博士が作った助動詞相接の順位表である。²⁾ これは後世に見られる文語一般の表現に基づいて作ったものであり、当然、そこでは、否定助動詞に関して、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞とに分けていないと思われる（もちろん、そのように分ける必要もなかったであろう）。

そこで、もし上代における否定辞の上接項目に注目しながら、相接順位表を作るならば、恐らく、ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の表中における位置は別々になるのではないかと思う。次頁に掲げる表14はそのような違いを示す対照表である。

表14、上代におけるナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の上接項目の対照表

動詞	動詞
す る ((さ ら す る))	し す る ((さ ら む す る))
[り]	り
ナ行系統 否定辞	た り
	べ し
	け り
	ザ行系統 否定辞

注：〔〕の中は用例が僅かであることと特殊性があることを示す。なお、同じ使役の助動詞でも、この時代において「しむ」がザ行系統否定辞の上に見られるが、ナ行系統否定辞の上に見られないのも注目されるべき事実であろう。

以上のようなことから見れば、上代に存在していたナ行系統とザ行系統というような系統の相異なる否定辞は、本来別々なものであったと言えよう。両者には、単に形態上の相違があっただけでなく、使われ方や表現性など、つまりより本質的な点においても、かなり違った性質が存在していたと考えられる。そして、その異質性が示されるように、形態的には、ナ行系統否定辞が動詞的な活用形態を持ち、ザ行系統否定辞が基本的に形容詞のように活用形式を持たないという相違が見られることも、或いはもっと積極的な意味があったかもしれないと思う。

ところで、平安時代前期になると、後世に見られるような否定助動詞が成立したのである。その活用形には、ナ行系統に属するものもあれば、ザ行系統に属するものもある。本稿第三編で考察したように、それらのものを、上代の両系統の否定辞と比べてみた場合、様々な変化が見られるのである。

まず、連用形では、後句と関連した場合、後句の原因・理由を示す用法を持っていたナ行系統の連用形「に」が消滅し、ザ行系統の連用形「ず」一つに統一される。この「ず」は、依然として後続する動詞に対する状態修飾の用法を基本とするが、その上、居体言としての用法が強化する。活用語連用形に付く助動詞が下接する場合、ザ行系統の補助活用として生まれた「ザリ活用」の連用形「ざり」に付くという統一が見られ、それによって、上代に見られた「ずけり」などの表現も姿を消す。

終止形では、上代でも用例が僅かしか見られず、しかも非一般的ではあるが、しかし確かに存在していたと言えるナ行系統の「ぬ」の、終止形としての単純終止的な用法が消滅し、ザ行系統の終止形「ず」の終止的用法が更に増えて確立される。そして、この終止的用法は話法的にも終止であると考えられる「～ずと」の形で頻繁に使われるようになる。しかし、反語を表す「～やは～ぬ」の形式に押されたためか、上代で反語表現の主流をなしていた「ずや（も）」の表現が後退する。

連体形では、ナ行系統の連体形「ぬ」に押されて、ザ行系統の補助活用として生まれた「ザリ活用」の連体形「ざる」が大きく後退する。一方、ナ行系統に属する連体形「ぬ」に、準体用法の増加及び「～やは～ぬ」の形で反語表現への前進なども見られるものの、「ぬか（な）」の形で、「希求」の意を表現できなくなるという大きな変化も見られる。

已然形では、ナ行系統の已然形「ね」に押されて、ザ行系統の補助活用として生まれた「ザリ活用」の已然形「ざれ」が消えてしまう。しかし、ナ行系統の「ね」が大きく前進したものの、上代において「ねば」の形で、順接偶然確定条件を通して逆接に解釈されるような表現がほとんど出来なくなる。

そのほかに、ザ行系統の補助活用として生まれた「ザリ活用」の安定化（基本的に融合形式で現れること）によって、否定助動詞において、未然形「ざら」が確立されることになる。一方、上代から見られる「ずは」の形はいわゆる一種の「ずは」としての表現が出来なくなり、順接仮定条件や、一般的な反実仮定の前件としてしか表現できなくなった「ずは」は、他の活用語に準じて（特に「ずば」の表記が出てくると関連して）考えれば、一種未然形的な役割を果たすようになるとも言える。

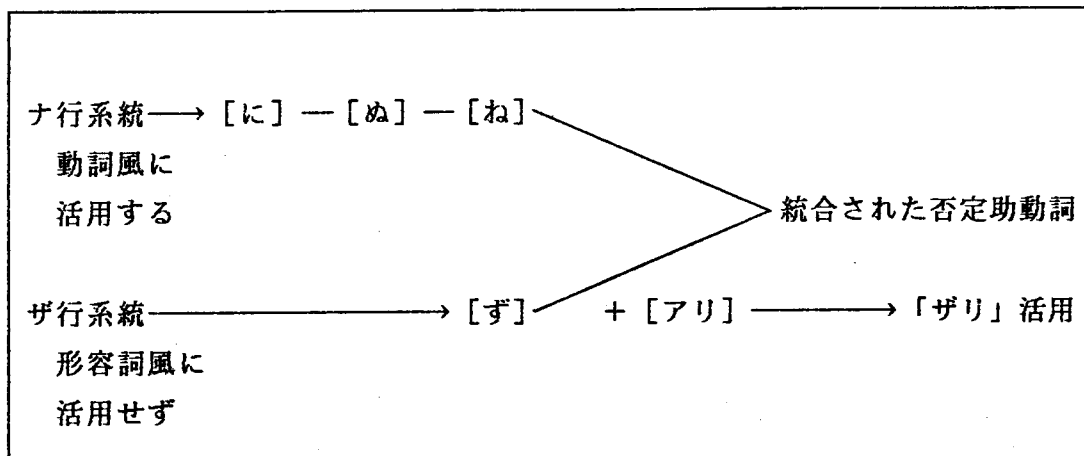
更に、上代において、ナ行系統否定辞の上接項目には、動詞・形容詞・形容動詞といういわゆる三大用言のほかに、補助動詞と受身・可能・使役・尊敬を表す助動詞に限るという制限が見られるのに対して、ザ行系統の場合は、更に助動詞「べし」「り」「たり」「けり」なども「ず」に上接することがあったが、しかし、平安時代になると、否定助動詞の上接項目に助動詞「り」「たり」「けり」などが来ることがなくなったのである。

この変化の中で、ナ行系統否定辞もザ行系統否定辞も、それぞれ上代特殊表現を失うほど大きく変化した。しかし、多少の差はあるものの、両方とも本来持っていた性質を残しているところもある。³⁾平安時代に成立した否定助動詞は、上代におけるナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の性質を、一部ずつ合わせ持っているものであると言える。その意味で、

上代から平安時代にかけての否定辞の変化は、まさに上代におけるナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の統合によるものであると言わなければならないであろう。

本稿の考察を通して、上代における否定辞の関係、及び平安時代前期に見る否定助動詞の成立までの変化について、改めて次のように主張できるのではないかと思う。

図2. 上代から平安時代にかけて否定辞の成立と変化



つまり、上代日本語に見られるナ行系統の否定辞とザ行系統の否定辞とは、その形態的な相違が示しているように、本来別々な表現であった。両者の間には、形態的にだけでなく、使われ方や表現性においても相異なる性質がかなり存在していたということについては、本稿の考察によって明らかになっているであろうと思う。しかし、このように相異なる両系統の否定辞は、何時からか統合する方向に向かって発展し、それによって成立したのが平安時代に見られる否定助動詞であると考えられよう。⁴⁾

勿論、出来得るならば、上代におけるナ行系統否定辞とザ行系統否定辞との間に見られる様々な相違の本質とは何か、そして、後に起こった統合はいったいどんな原因によるのか、などの問題をも究明しなければならないと思ったが、筆者の力不足で、それらの問題は今後の研究課題として残されてしまったのである。

本稿の考察が少しでも今後の上代日本語の研究に資することができれば幸いだと思いつつ、小論を閉じたいと思う。

筆者の未熟な論について、諸先学や専門家のご指導、ご叱正を心から待ち望んでいる。なお、この小論の執筆に際し、山崎馨先生から暖かいご指導とご教示、および尾上圭介先生から厳しいご批判をいただいたことに深く感謝し、また、親切なご助言をいただいたほかの先生方及び引用論文から多大なご啓発をいただいた方々に、あわせて感謝の意を表したいと思う。

注：

1、第一編第五章の注でも触れたように、「ぬ」の「ク語法」形式から生まれた「なくに」の表現に、助動詞「り」に下接する一例が見られる（「松の花数にしもわが背子が思へらなくに〔於母徹良奈久尔〕もとな咲きつつ」万、3942）が、それは僅か一例しかないことと、「なくに」の特殊性などを考えに入れると、ナ行系統否定辞一般のものとして見ないほうがいいかもしれないと思う。また、仮にそれをナ行系統否定辞の上接項目の一種類として考えても、ザ行系統否定辞と比べた場合、やはり制限があると言わなければならない。

2、橋本進吉氏「助動詞の研究」（1969、後掲参考文献131）p253による。表中の「*」印は再び上に帰ることがあることを示す。

3、両系統を比べてみれば、ナ行系統否定辞よりザ行系統否定辞のほうが、上代に持っていた使われ方や性質をより多く残していると思われる。このことは、後世の否定助動詞の性質に対して大きな影響を及ぼしているだろうと考えられる。

4、平安時代に見られる否定助動詞は、本来別々なものが統合して成立したものではないかという考えは、橋本進吉博士の「助動詞の研究」（1969）にも見られる。

おもふに、この助動詞は、ややちがつた語源のものが、一つの活用になつたもので（クレイナークレイダと同様に）、連用形のは、両系統のものが共にのこつてゐるのであるが、後には「に」が滅びてしまったものであらう。（後掲参考文献131、p329）

しかし、残念なことに、博士の論点がそれ以上展開されなかったために、両系統の相違及び両者がいかに統合されたかについて、博士がどのように考えられたかということ、今は知る由もない。後に、否定助動詞に見られる両系統のものについて、むしろナ行系統のものが古く、ザ行系統のものが新しいという説が主流になり、特に「にす→ず」の説が出されてから、より広がったように思われる。本稿で繰り返し広げている論は橋本博士の説の統制にはならないが、博士の指摘はやはり筆者に大きなヒントと勇気を与えてくださったのである。もちろん、一つの言語的な変化は決して一朝一夕で成し遂げたものではない。上代から平安時代にかけての否定辞の変化も同じように、徐々に完成したのであらう。その意味で、上代においても、両系統の否定辞が既に統合していると思われる言語現象もかなり見られるが、しかし、両系統の否定辞の間に、或いは後世の否定助動詞と比べて、本稿で明らかにした様々な相違が見られることは、やはりもっと重視すべきであらうと思う。

なお、吉田金彦氏が『上代語助動詞の史的研究』で、「打消」の「ぬ」が「打消」の「ず」（決定的打消）に対して「柔らかで弱い」、この「柔軟性のために『ず』よりもはるかに多く意味の派生や特殊な慣用語化傾向がある」（後掲参考文献197、p244）と述べておられる。ナ行系統否定辞とザ行系統否定辞の相違の本質とは何かを見極めようとする氏の視点には同意するが、それを「決定的打消」と「柔軟性」に帰してしまうのはよいのだろうかと筆者は疑問に思うところがあるのである。

参考文献一覧

論文・著書の部（五十音順）

- 1、浅野信「『（あら）ずは』考説」（1973『今泉博士古希記念国語学論叢』）
- 2、石田春昭「『イ』は格助詞にあらず」（1937、『国語国文』7-11）
- 3、石田春昭「コソケレ形式の本義（上）」（1939、『国語と国文学』2月号）
- 4、石田春昭「コソケレ形式の本義（下）」（1939、『国語と国文学』3月号）
- 5、石田春昭「動詞変格活用成立論」（1956、『国語学』25）
- 6、泉井久之助「否定表現の原理—一つの意味論的分析—」（1953、『国語国文』22-8）
- 7、井手至「ク語法（加行延言）アク説は悪説か—ク語法研究の展開—」（1964、『国文学解釈と鑑賞』10月号）
- 8、上原良明「上代の『形容詞語幹+ミ』について—『山を高む』のか—」（1978、『薩摩路』21）
- 9、小沢久子「助詞『や』について」（1985、『学習院大学国語国文学会誌』28）
- 10、大岩正伸「奈良朝語法ズハの一解」（1942、『国語と国文学』3月号）
- 11、大坪併治「過去（回想）／完了・古典語・ぬ」（1964、『国文学』9-13）
- 12、大坪併治「過去（回想）／完了・古典語・つ」（1964、『国文学』9-13）
- 13、大野晋「日本語の動詞の活用形の起源について」（1953、『国語と国文学』6月号）
- 14、大野晋「万葉時代の音韻」（1955、『万葉集大成・6・言語篇』）
- 15、大野晋「日本古典文法—その一、係り結び—」（1955～1957、『解釈と鑑賞』1955、12月号～1957、3月号）
- 16、大野晋「推量の助動詞—じ・む・らむ・らし・めり・べし—」（1963、『国文学解釈と鑑賞』6月号）
- 17、大野晋「動詞の活用の研究はどんな価値があるか」（1964、『国文学解釈と鑑賞』10月号）
- 18、大野晋「係り結びの起源はどんなことか」（1964、『国文学解釈と鑑賞』10月号）
- 19、大野晋『仮名遣と上代語』（1982、岩波書店）
- 20、大野晋「万葉集のズハの解釈—助詞ハの機能から見る—」（1983、『国文学解釈と鑑賞』48-14）
- 21、大野晋「日本語の構文(1)—係助詞の役割（一）—」（1984、『文学』52-12）
- 22、大野晋「日本語の構文(2)—係助詞の役割（二）—」（1985、『文学』53-3）
- 23、大野晋「日本語の構文(3)—係助詞の役割（三）—」（1985、『文学』53-5）
- 24、大野晋「日本語の構文(4)—係助詞の役割（四）—」（1985、『文学』53-7）
- 25、大野晋「日本語の構文(5)—係助詞の役割（五）—」（1985、『文学』53-9）

- 26、大野晋「ハとガの源流」(1986、『国語と国文学』2月号)
- 27、大野晋・丸谷才一『日本語で一番大事なもの』(1987、中央公論社)
- 28、大野透「ベン・ベカラズ・マシジ・マジについて」(1956、『国語学』25)
- 29、岡山進「上代希求表現『…も…ぬか(も)考』(1978、『薩摩路』21)
- 30、澤瀉久孝「『か』より『や』への推移」(1940、『万葉の作品と時代』)
- 31、奥村三雄「打消の推量・古典語・じ」(1964、『国文学』9-13)
- 32、奥村三雄「打消の推量・古典語・まじ(付・ましじ)」(1964、『国文学』9-13)
- 33、奥村三雄「打消の推量・現代語・まい」(1964、『国文学』9-13)
- 34、尾上圭介「文核と結文の枠」(1973、『言語研究』63)
- 35、尾上圭介「語列の意味と文の意味」(1977、『松村明教授還暦記念国語学と国語史』)
- 36、尾上圭介「古代語発掘・ずは」(1977、『万葉集を学ぶ』2)
- 37、尾上圭介「古代語発掘『已然形+ば』(逆接の場合)」(1978、『万葉集を学ぶ』4)
- 38、尾上圭介「助詞『は』研究史に於ける意味と文法」(1979、『三十周年記念論集神戸大学文学部』)
- 39、尾上圭介「『は』の係助詞性と表現的機能」(1981、『国語と国文学』58-5)
- 40、尾上圭介「文の基本的構成・日本語」(1982、『講座日本語学・10』)
- 41、尾上圭介「不定語の語性と用法」(1983、『副用語の研究』)
- 42、尾上圭介「主語・主格・主題」(1985、『日本語学』10月号)
- 43、尾上圭介「感嘆文と希求・命令文-喚体・述体概念の有効性-」(1986、『松村明教授古希記念国語研究論集』)
- 44、柏原司郎「『焼けない前』と『焼けぬ先』と」(1974、『語文・文学』10)
- 45、春日和男「助動詞『けり』の二面性-竹岡説に思う-」(1964、『国文学言語と文芸』34)
- 46、金田弘「打消・現代語・ない・ぬ(ん)」(1964、『国文学』9-13)
- 47、川端善明「形容詞文」(1958、『国語国文』27-12)
- 48、川端善明「助詞『し』の説-係機能の周辺-」(1962、『万葉』45)
- 49、川端善明「助詞『も』の説-文末の構成-」(1963、『万葉』47)
- 50、川端善明「助詞『も』の説-二、心もしのに鳴く千鳥かも-」(1963、『万葉』48)
- 51、川端善明「文論の方法」(1965、『口語文法講座、1』)
- 52、川端善明「名詞の活用」(1966、『国語国文』35-5)
- 53、川端善明「已然形の成立-述定と装定と並列-」(1969、『国語国文』39-5)
- 54、川端善明「用言」(1976、『岩波講座日本語・6・文法I』)
- 55、川端善明「文の構造と種類-形容詞文-」(1983、『日本語学』2-5)
- 56、北原保雄「<終止なり>と<連体なり>-その分布と構造的意味-」(1966、『国語と国文学』9月号)

- 57、北原保雄「『なり』の構造的意味」(1967、『国語学』68)
- 58、北原保雄「『む』はなぜ未然形につくのか」(1970、『月刊文法』6月号)
- 59、北原保雄「芭蕉『佐渡によこたふ』の自他一いわゆる破格的語法の論理一」(1970、『月刊文法』7月号)
- 60、木之下正雄「『けり』について」(1964、『国文学言語と文芸』34)
- 61、木下正俊「二つの『賀』から」(1962、『万葉』46)
- 62、木下正俊「『なくに』覚書」(1972、『万葉集研究(一)』所収)
- 63、木下正俊「終助詞『なむ』の反事実性」(1974、『国文学(関西大)』50)
- 64、工藤美紗子「『も』という助詞の意味」(1963、『文学』12)
- 65、蔵中進「禁止表現における否定辞『な』について」(1959、『国語学』32)
- 66、桑田明「『ぬ』『つ』の意味」(1976、『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』)
- 67、桑田明「『ぬ』『つ』三考」(1981、『就実語文』2)
- 68、桑田明「『ぬ』『つ』四考『き』『けり』再考」(1982、『就実語文』3)
- 69、桑田明「上代語“一種の『ずは』”の解明—『は』『も』の意味・職能の考察と関連させて—」(1984、『言語と文芸』95)
- 70、桑田明「係りの『は』『も』の意味・職能」(1986、『就実語文』7)
- 71、後藤和彦「『ましじ』から『まじ』への推移」(1969、『万葉』70)
- 72、小路一光『万葉集助動詞の研究』(1980、明治書院)
- 73、此島正年「已然形に係助詞『や』の附く形式」(1964、『人文社会』30)
- 74、此島正年『国語助詞の研究・助詞史素描』(1966、桜楓社)
- 75、此島正年『国語助動詞の研究・体系と歴史』(1973、桜楓社)
- 76、此島正年「『なくに』小考」(1977、『浅野信博士古希記念国語学論叢』)
- 77、佐伯梅友「『や』『か』について」(1928、『万葉語の研究』所収)
- 78、佐伯梅友「『不知』の訓について」(1932、『万葉語研究』所収)
- 79、佐伯梅友「『も』の或る場合」(1934、『万葉語研究』所収)
- 80、佐伯梅友「『淀むとも』考」(1936、『万葉語研究』所収)
- 81、佐伯梅友「動詞・形容詞」(1955、『万葉集大成・6・言語篇』)
- 82、佐伯梅友「文の構成」(1955、『万葉集大成・6・言語篇』)
- 83、佐川誠義「日本語の否定の範囲」(1976、『言語研究』70)
- 84、佐治圭三「“～のだ”の本質」(1981、『日語学習と研究』3)
- 85、佐竹昭広「上代の文法」(1959、『日本文法講座・3・文法史』所収)
- 86、佐竹昭広「古代日本語に於ける色名の性格」(1955、『国語国文』24-6)
- 87、佐藤喜代治「未然形に続く助動詞」(1957、『解釈と鑑賞』11月号)
- 88、酒井秀夫「万葉集の『や』(一)—已然形につく『や』—」(1968、『金城学院大学論集』31)

- 89、酒井秀夫「万葉集の『や』(二)」(1969、『金城学院大学論集』37)
- 90、阪倉篤義「万葉集における語詞の構成」(1955、『万葉集大成・6・言語篇』)
- 91、阪倉篤義「文法論の課題」(1956、『国語学』24)
- 92、阪倉篤義「反語についてーヤとカの違いなどー」(1958、『文章と表現』所収)
- 93、阪倉篤義「条件表現の変遷」(1975、『文章と表現』所収)
- 94、桜井茂治「回想の助動詞『き』と連体形『し』ーアクセント史からみた活用形の成立」(1961、『国語研究』14)
- 95、桜井光昭「『じ』は『む』の否定か」(1970、『月刊文法』6月号)
- 96、桜井光昭「推量の助動詞」(1972、『品詞別日本文法講座・7』)
- 97、重見一行「『やは』における反語機能の成立」(1985、『たまらゆ』17)
- 98、白石大二「係助詞ーは・も・こそ・ぞ・なん・や・かー」(1958、『国文学解釈と鑑賞』4月号)
- 99、白藤禮行『奈良時代の国語』(1987、東京堂出版)
- 100、鈴木一彦「打ち消して残るところー否定表現の結果ー」(1962、『国語学』50)
- 101、鈴木義和「『ずは』論再考ー仮定条件法としての理解ー(学会発表要旨)」(1982、『国語学』130)
- 102、鈴木義和「助動詞『む』に原因推量の用法は認められるかー上代語における考察ー」(1983、『国文論叢』10)
- 103、鈴木義和「いわゆる逆接の『ねば』についてー上代語の偶然確定条件法ー」(1984、『国文学研究ノート』17)
- 104、竹内美智子「助動詞(1)」(1977、『岩波講座日本語・7・文法Ⅱ』)
- 105、竹岡正夫「助動詞『けり』の本義と機能ー源氏物語・紫式部日記・枕草子を資料としてー」(1963、『国文学言語と文芸』31)
- 106、田島光平「万葉集に於ける『ず』の表記の特色とそれより導かれる種々の問題」(1950、『国語と国文学』3月号)
- 107、田中敏生「否定述語・不確定述語の作用面と対象面ー陳述副詞の呼応の内実を求めて」(1983、『日本語学』10月号)
- 108、丹保健一「否定表現の文法(1)ー否定内容と文構造とをめぐってー」(1980、『三重大大学教育学部研究紀要』31-2)
- 109、丹保健一「否定表現の文法(2)ー副詞と否定辞との係わりをめぐってー」(1981、『三重大大学教育学部研究紀要』32)
- 110、丹保健一「否定表現の文法(4)ー係助詞『は』との係わりを中心にー」(1984、『三重大大学教育学部研究紀要』34)
- 111、塚原鉄雄「推量の助動詞ーその国語史的考察」(1958、『国語国文』26-7)
- 112、塚原鉄雄「過去(回想)／完了・古典語・たり」(1964、『国文学』9-13)

113. 塚原鉄雄「過去（回想）／完了・古典語・り」（1964、『国文学』9-13）
114. 築島裕「万葉集歌謡における返読字について」（1984、『五味智英先生追悼上代文学論叢』）
115. 築島裕『平安時代の国語』（1986、東京堂出版）
116. 土井洋一「否定・ず・ざり・じ・まじ」（1968、『解釈と鑑賞』10月号）
117. 鶴久「万葉集の文法・助動詞の問題点」（1966、『国文学解釈と鑑賞』10月号）
118. 時枝誠記「条件法として解釈される連体形の一用法」（1958、『国語と国文学』2月号）
119. 中西字一「打消の助動詞を中心とする助動詞の二分類—助動詞の相互承接と意味との関係—」（1961、『言語と文芸国文学』19）
120. 中西字一「助動詞『けり』の意味について—竹岡正夫氏の論に対する反論として—」（1964、『国文学言語と文芸』34）
121. 中西字一「反実仮定を表わす推量の助動詞の意味構造—『まし』と『む』—」（1966、『女子大國文』43）
122. 中西字一『日本文法入門・構造の論理』（1986、和泉選書）
123. 西宮一民「上代子音音節の脱落と語釈について」（1970、『皇学館大学紀要』8）
124. 西宮一民「上代の所謂ズハの意味」（1982、『皇学館大学紀要』20）
125. 仁田義雄「現象描写文をめぐる」（1986、『日本語学』2月号）
126. 根来司「助動詞『けり』の表現性」（1964、『国文学言語と文芸』34）
127. 橋本四郎「上代の形容詞語尾ジについて」（1955、『万葉』15）
128. 橋本四郎「ベシ・マジの接続面の混乱」（1955、『国語学』22）
129. 橋本四郎「ミの形をめぐる問題」（1962、『万葉』42）
130. 橋本進吉「『がてぬ』『がてまし』考」（1910、『上代語の研究』所収）
131. 橋本進吉「助動詞の研究」（1969、『助詞助動詞の研究』所収）
132. 橋本進吉「奈良朝語法研究の中から」（1925、『上代語の研究』所収）
133. 橋本進吉「上代の国語に於ける一種の『ずは』について」（未詳、『上代語の研究』所収）
134. 浜田敦「上代に於ける希求表現について」（1948、『国語国文』17-1）
135. 浜田敦「上代に於ける願望表現について」（1948、『国語と国文学』2月号）
136. 浜田敦「助動詞」（1955、『万葉集大成・6・言語篇』）
137. 林大「万葉集の助詞」（1955、『万葉集大成・6・言語篇』）
138. 林巨樹「打消・古典語・ず（付・ざり・なふ）」（1964、『国文学』9-13）
139. 原田登美「否定との関係による副詞の四分類—情態副詞・程度副詞の種々相—」（1981、『国語学』128）
140. 原田芳起「助動詞『けり』の意味—竹岡氏の提説をめぐる—」（1964、『国文学言

語と文芸』34)

- 141、原田芳起「上代の形容詞性接尾辞『じ』－打消か類似か－」（1974、『樟蔭国文学』12)
- 142、久島茂「助動詞ムの成立についての一考察－終助詞ナ・ネ・ニと関連して－」（1977、『国文学研究（早大）』60)
- 143、広濱文雄「過去（回想）／完了・古典語・き」（1964、『国文学』9-13)
- 144、広濱文雄「過去（回想）／完了・古典語・けり」（1964、『国文学』9-13)
- 145、福田良輔「東歌の語法」（1955、『万葉集大成・6・言語篇』）
- 146、古田啓「『国語での否定表現の意味』続貂」（1982、『計量国語学』13-7)
- 147、北条忠雄「成立から観たケリの本義－竹岡説の直接的批判にかえて－」（1964、『国文学言語と文芸』34)
- 148、北条忠雄「いわゆる『過去の助動詞』とは」（1970、『月刊文法』5月号)
- 149、細川英雄「禁止表現形式の歴史的関係について－その表現上の差異を手がかりに－」（1977、『国文学研究（早大）』60)
- 150、堀田要治「推量・古典語・む（ん）」（1964、『国文学』9-13)
- 151、堀田要治「推量・古典語・けむ」（1964、『国文学』9-13)
- 152、本田畠治「日本語の否定構文(1)－『否定副詞』の分布をめぐって（前）－」（1981、『静岡大教養部研究報告・人文社会』16)
- 153、本田畠治「日本語の否定構文(1)－『否定副詞』の分布をめぐって(2)－」（1982、『静岡大教養部研究報告・人文社会』17-2)
- 154、松田剛史「打消の助動詞の性格をめぐって」（1983、『大谷女子大國文』13)
- 155、馬淵和夫「『古事記』のシ・オ・ホのかな」（1957、『国語学』31)
- 156、馬淵和夫「助動詞『キ』と『ケリ』の区別はなんとみるべきか」（1964、『国文学解釈と鑑賞』10月号)
- 157、丸山明「『も』助詞の機能についての一考察」（1979、『成蹊国文』12)
- 158、宮地幸一「ずは・なくは考(5)－鎌倉時代資料の考察（二）－」（1982、『帝京大学文学部紀要国語国文学』14)
- 159、宮地幸一「ずは・なくは考(6)－鎌倉時代資料の考察（三）－」（1983、『帝京大学文学部紀要国語国文学』15)
- 160、宮地幸一「ずは・なくは考(7)－鎌倉時代資料の考察（四）－」（1984、『帝京大学文学部紀要国語国文学』16)
- 161、宮地幸一「ずは・なくは考(8)－近松浄瑠璃詞章の考察－」（1985、『帝京大学文学部紀要国語国文学』17)
- 162、宮地幸一「ずは・なくは考(9)－紀海音浄瑠璃詞章の考察－」（1986、『帝京大学文学部紀要国語国文学』18)

163. 宮島弘「願望助詞『なも』についての一考察」(1932、『国語国文』9)
164. 森重敏「終助詞」(1958、『国文学解釈と鑑賞』4月号)
165. 森重敏「係結」(1958、『続日本文法講座・1』)
166. 森重敏「係助詞は・も」(1970、『国文学解釈と鑑賞』11月号)
167. 森山隆「上代に残存する \ddot{o} - u 対応について-意味の分化に関する一試論-」(1964、『国語学』56)
168. 山口明穂「『已然形-や』の形について-中世における一用法をめぐる-」(1968、『国語国文学報』20)
169. 山口佳紀「古代日本語における母音脱落の現象について」(1971、『国語学』85)
170. 山口佳紀「古代条件表現形式の成立」(1971、『国語と国文学』12月号)
171. 山口佳紀「古代日本語における語頭子音の脱落」(1974、『国語学』98)
172. 山口佳紀「古代日本語における母音交替の一側面-動詞活用成立論の前提として-」(1976、『国語と国文学』2月号)
173. 山口佳紀「上代希望表現形式の成立-ナ行系希望辞をめぐる-」(1981、『国語国文』49-9)
174. 山口佳也「万葉集の文中のヤについて」(1975、『国文学研究(早大)』53)
175. 山口佳也「『~のだ』の文の本質をめぐる」(1983、『日語学習と研究』5)
176. 山口堯二「接続助詞『ば』の確定条件法」(1966、『遠藤博士還暦記念国語学論集』)
177. 山口堯二「疑問表現の否定」(1984、『国語と国文学』7月号)
178. 山崎馨「地庭不落の訓について」(1955、『万葉』30)
179. 山崎馨「形容詞系助動詞の成立-その一、まし・ましじ・き-」(1964、『国語と国文学』41-5)
180. 山崎馨「形容詞系助動詞の成立-その二、らし・じ・しむ-」(1965、『国語と国文学』42-3)
181. 山崎馨「助動詞研究史の展望」(1965、『山口大学教育学部研究論叢』14-1)
182. 山崎馨「(万葉集の文法) 動詞・形容詞の問題点」(1966、『解釈と鑑賞』31-12)
183. 山崎馨「古代日本語とその助動詞」(1968、『五味智英先生還暦記念上代文学論叢』)
184. 山崎馨「助動詞小辞典『らし』『まし』」(1969、『月刊文法』5月号)
185. 山崎馨「続日本紀宣命における形容詞について」(1972、『大阪大学医療技術短期大学部研究紀要・人文科学篇』4)
186. 山崎馨「続日本紀宣命における助動詞について」(1975、『神戸大学教養部紀要<論集>』15)
187. 山崎馨「万葉のことば」(1980、『鑑賞日本の古典2・万葉集』)
188. 山崎馨「形容詞とは何か」(1983、『研究資料日本文法・3』)
189. 山崎馨『万葉集逍遙』(1985、和泉選書)

190. 山田巖「係助詞（古典語）・や・か」（1968、『国文学』12-2）
191. 山田孝雄『平安朝文法史』（1952、宝文館）
192. 山田孝雄『奈良朝文法史』（1954、宝文館）
193. 山本正「万葉集における打消の『な』について—東歌『あはなはば』を中心として—」（1962、『東北大学教養部文科紀要』9）
194. 吉沢義則「所謂形容動詞に就いて」（1932、『国語国文』2-1）
195. 吉田金彦「古代における中止否定辞の系譜」（1964、『国語と国文学』40-5）
196. 吉田金彦「『降りにせば』と『枕かずけば』—語史的にみた『き』の活用—」（1970、『月刊文法』7月号）
197. 吉田金彦『上代語助動詞の史的研究』（1973、明治書院）
198. 吉田優子「『ない』についての諸問題」（1984、『文教大学国文』13）
199. 吉永登「『已然形にヤの添うた形』追考」（1974、『国文学（関西大）』50）
200. 米山敬子「上代の『ずは』」（1983、『甲南大学紀要文学』48）
201. 和田明美「上代語『じもの』について—特に『男じもの』を中心として—」（1982、『訓点語と訓点資料』67）
202. 渡辺実「陳述副詞の機能」（1949、『国語国文』18-1）
203. 渡辺実「象徴辞と自主語—音と意味（一）—」（1952、『国語国文』21-8）
204. 渡辺実『国語構文論』（1971、塙書房）

資料・辞典・参考書の部（五十音順）

205. 稲岡耕二編『万葉集必携』（1979、学燈社）
206. 稲岡耕二編『万葉集必携Ⅱ』（1981、学燈社）
207. 大久保正『古事記歌謡全訳注』（1981、講談社）
208. 大久保正『日本書紀歌謡全訳注』（1981講談社）
209. 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』（1974、岩波書店）
210. 小沢正夫校注『日本古典文学全集古今和歌集』（1971、小学館）
211. 片桐洋一訳・注『古今和歌集』（1980、創英社）
212. 金子武雄著『続日本紀宣命講』（1941、白帝社）
213. 北川和秀編『続日本紀宣命校本・総索引』（1982、吉川弘文館）
214. 『源氏物語大成総索引』（1953～1956、中央公論社）
215. 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広校注『日本古典文学全集万葉集』（1971～1975、小学館）
216. 国語学会編『国語学大辞典』（1980、東京堂出版）
217. 佐伯梅友校注『古今和歌集』（1981、岩波書店）
218. 佐伯梅友・森野宗明・小松英雄編『例解古語辞典第二版』（1985、三省堂）

- 219、佐々木信綱編『新訓万葉集』(1927、岩波書店)
- 220、佐藤喜代治編『国語学研究事典』(1977、明治書院)
- 221、桜井満『現代語訳対照万葉集』(1974~1975、旺文社)
- 222、『時代別国語大辞典上代編』(1967、三省堂)
- 223、高木市之助・五味智英・大野晋校注『日本古典文学大系万葉集』
(1957~1962、岩波書店)
- 224、土橋寛・小西甚一校注『日本古典文学大系古代歌謡集』(1957、岩波書店)
- 225、鶴久・森山隆『万葉集』(1972、桜楓社)
- 226、中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』(1960、風間書房)
- 227、中西進『万葉集全訳注原文付』(1978~1983、講談社)
- 228、西田直敏著『資料日本文法研究史』(1979、桜楓社)
- 229、『日本古典文学大辞典』(1986、岩波書店)
- 230、『日本国語大辞典』(1972~1976、小学館)
- 231、藤平春男編『古今集新古今集必携』(1981、学燈社)
- 232、松村明・今泉忠義・守随憲治編『旺文社古語辞典新版』(1981、旺文社)
- 233、『万葉集大成総索引』(1953~1955、平凡社)
- 234、森淳司編『万葉集研究入門ハンドブック』(1988、雄山閣)